
遊戯王GX StrikerS

ネロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX Strikers

【Nコード】

N2497T

【作者名】

ネロ

【あらすじ】

遊城十代は、ある日謎の赤い宝石を拾った。そして突然別の世界へと飛ばされてしまった。そこは『デュエルモンスターズ』は無く、代わりに魔法が普及した世界『ミッドチルダ』だった。＊タイトルが少し長かったので変えました。(11/3)

プロローグ（前書き）

遊戯王5D'sの方が少し行き詰まってしまったので、新しく始めました。

GXは書くのが初めてなので、うまく書けないかもしれませんが、暖かい目で見てくれると嬉しいです。

プロローグ

遊城十代はデュエルアカデミアを卒業し、風の向くまま、気の向くまま、旅を続けていた。

しかし、そんな彼の日常を大きく変える出来事が起こった。

十代

「ん？何だあれ？」

十代が旅を続けている途中、赤色の六角形の宝石が落ちているのを見つけたのだ。

十代はその宝石を拾い上げ、観察した。

十代

「ただの宝石じゃない……何だ！？この宝石から流れ込んで来る異質な感じは……」

十代がそう呟いた時、十代の魂の一部であるユベルが現れる。

ユベル

「十代、今すぐその宝石を捨てろッ！！」

ユベルが叫ぶのと同時に、宝石が光り出す。

十代

「え！？」

十代が聞き返した時には既にその光は十代を包み込んでいた。

十代

「うわあああああああッ!!」

そして、十代の意識はそこで途切れた。

プロローグ（後書き）

前書きでも書きましたが、GXは初めて書くのでうまく書けないかもしれません、頑張って書いて行こうと思います。

感想や、何か気付いた事、アイディアなどがあつたら言ってくれると嬉しいです！！

第1話 召喚！E・HERO！！ 新たな出会い！！（前書き）

この世界でのデュエルのルール。

初期ライフポイントは8000

1…ドローフェイズのドロー、モンスターの通常召喚は一分置き。
ただしトラップカードの発動はセットした後でも発動条件が合えば
すぐに発動できる。

2…自分の場の攻撃表示モンスターが破壊された時そのモンスターの
元々の攻撃力分の数値がライフポイントから削られる。守備表示
の場合はダメージは受けない。

何か疑問に思った事があれば質問してください。

第1話 召喚！E・HERO！！ 新たな出会い！！

十代

「う……ここは!？」

十代が目を覚ますと、そこはさっきまでいた荒野ではなく、森のど真ん中だった。

十代

「森!？俺はさっきまで、荒野のど真ん中にいたはずなのに……」

足下に赤いラインの入ったデュエルディスクが落ちてはいたが、持ってきたバッグは置いてきてしまったようだった。

十代

「バッグが見当たらない元いた場所に置いてきちまったのかもな……まあ、デュエルディスクとデッキはあるし、何が起きてもある程度何とかなるだろ……」

十代がそう呟いた時、十代の中からユベルが現れた。

ユベル

「何が何とかなるだ……すぐにあの宝石を捨てろと言ったのに……」

十代

「しょうがないだろ？いきなり言われたんだ。それに、お前に言われた時にはあの宝石は光始め……」

十代が言葉を切る。

ユベル

「どうした？……ッ！？」

ユベルも十代と同じ事を考えた。

十代

「この気配は……」

ユベル

「ああ……間違いないね……」

十代&ユベル

「敵！！」

ユベルが十代の中に姿を消すと同時に、周りの茂みから、カプセルのような形のロボットが数体現れた。

十代

「何だ！？こいつは……」

ユベル

「（そんな事はどうでもいい。この状況をひっくり返すには、戦うしか無い！！）」

十代

「わかってる！！」

十代の右目がオレンジ色に、左目が緑色に変わる。

十代はこの力を使うことで精霊を実体化させる事ができるのだ。

十代

「行くぞ!!」

十代は左腕のデュエルディスクを展開させる。

十代 LP8000

十代

「俺のターン!!」

十代はカードを1枚引いた。

十代

「(手札は……融合があるが、素材が足りない……)なら、来い、E・HEROスパークマン!」

十代がスパークマンのカードをセットすると、十代の前に、青と金色を基調としたバイザーを付けたヒーローが現れた。

十代

「行くぜ!スパークマン、奴らを攻撃だ!!」

スパークマンが右手を突き出し、ロボットに向けて電撃『スパークフラッシュ』を浴びせる。

その攻撃を察知したロボットは散開するが、逃げ遅れたロボットは『スパークフラッシュ』受けて、爆発した。

十代

「まだまだ行くぜ!! 手札のE・HEROフェザーマンを攻撃表示で召喚!!」

十代がフェザーマンのカードをセットするが、フェザーマンは現れなかった。

十代

「フェザーマンが出ない?」

ユベル

「(どうやら、新たなモンスターを召喚するには、何か条件があるみたいだな……)」

十代の隙を見てロボットが目のような器官からビームを発射する。

ビームはスパークマンを直撃し、スパークマンは破壊された。

十代

「ぐああッ!!」

十代 LP8000-1600||6400

十代

「ライフが……スパークマンが破壊されたから、スパークマンの攻撃力分の数値が、俺のライフから削られるのか……」

十代が身構えた時、デュエルディスクにセットされているデッキの一番上のカードが光り始めた。

十代

「これは、ドローできるってことなのか？」

十代がそのカードを引く。

十代

「（よし、カードは引けた。さっきカードを引いてからの感覚は、一分前後ってとこだな。ここじゃ、ドローは一分置きってことかならッ！！）今度こそ、フェザーマンを攻撃表示で召喚！！」

十代がカードをセットすると、背中に白い翼を生やし、左腕にかぎ爪を装着したヒーロー、フェザーマンが現れた。

十代

「（やっぱり、モンスターの通常召喚も一分置きってことか……掴めてきたぜ、この世界での戦いが）行け！フェザーマン！！」

十代が指示を出すと、フェザーマンはロボットに一体に飛びかかる。

しかし、フェザーマンの攻撃力が低いためか、傷を付ける事は出来たが破壊は出来ず、弾き飛ばされてしまった。

十代

「カードを1枚伏せて……」

十代の攻撃が停まったのを見計らって、ロボット達は一斉に射撃を始める。

十代

「トラップ発動！！『ヒーローバリア』！！」

十代が宣言すると、フェザーマンの目の前に、見えないバリアが現れ、攻撃を防ぐ。

十代

「（デッキが光った！）ドロー！！」

十代はドローしたカードを微笑む。

十代

「魔法カード『融合』を発動！！手札の『E・HEROエッジマン』と、『E・HEROワイルドマン』を融合させ、『E・HEROワイルドジャギーマン』を攻撃表示で召喚！！」

十代の前に左腕に金色のガントレットを装備し、右手には十代の身長を軽く超える大剣を持ったヒーローが現れた。

十代

「ワイルドジャギーマンは、相手モンスター全てに攻撃できる！！行け！ワイルドジャギーマン！！」

ワイルドジャギーマンが大剣を振りかざし、残りのロボットを全て破壊する。

十代

「ふう……もう出てこないようだな……」

ユベル

「（まだ終わっていないぞ……）」

ユベルが十代に忠告する。

十代

「え?……ッ!？」

十代は気配のする方を向いた。

十代が向いた方向は空。そこには白い服を着た茶髪をツインテールにしている女性が左手に杖を持って浮いていた。

???

「あなたは……一体!？それにそのガジェットは……!？」

十代

「ガジェット!？」

???

「そこに壊れてバラバラになっているロボットの事です。あなたが壊したんですか？」

十代

「まあ……そう言う事になるな……でも、俺は悪くないぜ?襲ってきたのはあっちなんだからな」

???

「いえ、私達もガジェットを殲滅するためにここに来たので……」

十代

「じゃあ、あんたは敵じゃないってことか？」

???

「あなたに敵意が無ければ、そうなります」

女性は地面に降りながら十代に告げる。

十代

「あんたの名前は？俺の名前は遊城十代だ」

なのは

「私は『時空管理局機動六課』所属の高町なのは一等空尉です」

十代

「何か長いな……じゃあ、なのはって呼んでいいか？」

なのは

「じゃあ、私は十代さんって呼ぶ事にしますね」

なのはが笑う。

なのは

「それで、十代さんはどこから来たんですか？」

十代

「俺？地球から……ってここはどこだよ？月は2つあるし、いきなり森に來ちまったから焦ったぜ……」

なのは

「ここがどこだかわからないって事ですか？」

十代

「そうなるな……」

なのは

「もしかして、十代さんは『次元漂流者』かもしれません……」

十代

「『次元漂流者』!？」

なのは

「簡単に説明すると、別の世界から来た、迷子って感じです」

十代

「迷子ねえ……それで、俺はこれからどうなるんだ？」

なのは

「そうですねえ……とりあえず、ウチで保護する事にしましょうか？」

十代

「いいのか？助かるぜ!!」

こうして十代は機動六課に保護される事になったのだった。

第1話 召喚！E・HERO！！ 新たな出会い！！（後書き）

十代

「いきなり呼ばれたんだが……何だ？この紙……」

ガサガサ

十代

「何何？『この世界での遊城十代のデッキの解説』！？ったく、何の意味が……まあいいか。俺のデッキはアニメで出てきたカードを中心に漫画登場カードとオリカを絡めたデッキになるらしいぜ？まあそれがどう生かされるのかは作者の腕次第ってことだな。もういいだろ？俺も暇じゃねえからな。ガッチャー！！」

第2話 機動六課での出会い！対決！E・HEROVS烈火の将！（前書き）

詰め込み過ぎた感がハンパないです……

分割すれば良かったかも……

第2話 機動六課での出会い！対決！E・HEROVS烈火の将！

十代

「ここが機動六課か……」

機動六課に案内された十代は六課の宿舎を見て、驚いていた。

なのは

「じゃあ、取りあえず、部隊長の所へ案内しますね」

十代

「あ……ああ」

なのはに案内されて十代は部隊長室への道を歩いていた。

ユベル

「（何か、面倒な事になったね……）」

十代

「（まあ、そう言うなって。ここに来て行く宛も無えし……）」

ユベル

「（君ならそう言うと思ってたけどね。じゃあ、しばらく僕は表に出てこないようにするよ）」

十代

「（何でだよ?）」

ユベル

「（僕を見た奴らが君を敵と勘違いされると面倒だからね、余程の事が無い限りは出てこないようにするよ）」

十代

「（ああ、わかった）」

なのは

「十代さん？」

と、不意に声をかけられた。

十代

「え？ああ……どうした？」

なのは

「どうしたって……着きましたよ？」

十代

「ああ……そうか」

なのは

「失礼します」

なのはは一言挨拶すると、部屋の中に入って行った。十代もそれに続いて部屋に入る。

????

「ああ、なのはちゃん。待ったよ」

十代達を迎えたのは茶髪をショートカットにした女性だった。

???

「で、こっちが報告にあった次元漂流者の……」

十代

「遊城十代だ。よろしくな。ええと……」

はやて

「ああ、自己紹介がまだやったな。私の名は八神はやて。ここ機動六課の部隊長やってます」

十代

「へえ」

十代達が互いの自己紹介を終えた所に、部屋の扉が開き、三人の女性が入室してきた。

???

「失礼します……あっ、あなたが次元漂流者の……」

と、長い金髪の女性が十代に問う。

十代

「ああ。遊城十代だ。よろしくな」

フェイト

「フェイト・T・ハラオウンです。こちらこそよろしく」

シグナム

「ヴォルケンリッター烈火の将シグナムだ」

ヴィータ

「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータだ。後、シャルとザフイーラってのがいるけど今はちょっと出掛けてる」

と、シグナムとヴィータが自己紹介をする。

はやて

「さて、十代君のいた世界の事だけど、調べてもデュエルアカデミア何て学校は無いし、デュエルモンスターズなんて物も知らないって言う報告しか無かったんや……」

フェイト

「つまり十代は私達の知ってる地球とは別の地球から来たって事？」

十代

「なるほどな。パラレルワールドってやつか……」

なのは

「帰る方法も無いみたいで……」

十代

「ふん」

十代は部隊長室のソファに座る。

ヴィータ

「ふんって、お前、自分の置かれた状況理解してるのかよ!!」

ヴィータが怒鳴る。

十代

「わかってるさ。帰れないんだろ？」

十代が当然のように答える。

十代

「そりゃあ、元の世界の事は心配だけだよ……」

はやて

「だけど？」

十代

「魔法の世界なんてすっげえワクワクするじゃないか!!」

一同

「「「「は!?!」」」」

十代

「魔法だぜ?魔法!!俺一度でいいから魔法使いに会って見たかったんだよなあ!!」

……

はやて

「じゃあ、十代君は機動六課に協力してくれるってことでええんか？」

十代

「ああ、いいぜ」

あれから十代はこの世界の事やさっき戦ったロボット（ガジェットドローン）の事などを聞いた。

はやて

「それと、一回テストさせてくれんかな？」

十代

「テスト？」

はやての言葉に十代が聞き返す。

はやて

「うん。十代君の魔導師ランクはA A A。実はこれって結構高いねんな。そこで、うちの訓練所を借りて、精密に検査したいねん。ええかな？」

十代

「つまり、俺と戦うってことか？」

はやて

「まあそういう事や」

シグナム

「主、その役目、どうか私に」

はやて

「シグナム？十代君に怪我させたらあかんよ？」

シグナム

「はい。遊城、先に行っているぞ」

十代

「ああ」

訓練場では、十代とシグナムが向かい合っていた。シグナムは騎士甲冑を装備し、右手には愛剣『レヴァンティン』が握られていた。

十代

「いつでもいいぜ」

十代がモニターに映っているなのは達に告げる。

シグナム

「同じく、いつでもいいける」

シグナムがレヴァンティンを構える。

なのは

『勝負方式は1対1のガチンコ勝負、相手を戦闘不能にすれば勝ちね』

訓練場になのはの声が響く。

シグナム

「ああ！行くぞ遊城！！」

十代

「ああ!!」

十代はデュエルディスクを展開させる。

十代

「ドロー！来い！E・HEROワイルドマン!!」

十代がカードをセットすると、上半身裸の褐色の肌のヒーローが大剣を構えて現れる。

シグナム

「召喚獣の召喚か……面白い！」

シグナムがレヴァンティンを構え、ワイルドマンに向かって行く。

十代

「行け！ワイルドマン!!」

ワイルドマンも、大剣を構えシグナムに向かって行く。互いの剣が衝突し、火花を散らす。

シグナム

「中々の攻撃だ……だが!!」

シグナムがワイルドマンの剣を弾き、ワイルドマンの体勢を崩す。

シグナム

「はぁッ!!」

シグナムの攻撃でワイルドマンが破壊される。

十代

「ぐああッ!!」

十代 LP8000-1500||6500

十代

「（油断したら、一瞬でやられる……!）ドロー!魔法カード『融合』!!」

はやて

「融合?」

モニターで見ていたはやてが首を傾げる。

十代

「手札のフェザーマンとバーストレディを融合!出でよ!E・H E R O フレイム・ウイングマン!!」

十代の目の前に右腕がドラゴン、左からには白い翼を生やしたヒーローが現れる。

フェイト

「召喚獣が融合した?」

ヴィータ

「あんなの、今まで見た事ねえぞ!?」

なのは

「それに、あの召喚獣、さっき融合する前の2体より魔力が桁違いに高い。融合前はランクBだったのに、あの召喚獣のランクはA A」

はやて

「召喚獣を融合させて戦うのが十代君の戦闘スタイルみたいなやな」

はやて達が十代を分析する。

シグナム

「召喚獣を融合させるとはな……遊城、お前は面白い奴だ」

十代

「行くぜ！ フレイム・ウイングマン！！ 『フレイムシュート』 ！！」

フレイムウイングマンが右腕のドラゴンをシグナムに向け、炎を发射した。

シグナム

「くっ！？」

シグナムが何とかフレイムウイングマンの攻撃を避けようとするが、炎の大きさが予想より大きかったため、騎士甲冑をかすめる。

十代

「カードを1枚伏せる」

シグナム

「（今の一撃、何とか避けたが……次に攻撃されたら後が無い……ならばッ!!）レヴァンティン！」

レヴァンティン

『シュランゲフォルム!』

レヴァンティンからカートリッジをロードし、レヴァンティンを連結刃にする。

十代

「何だ!？」

突然の事に十代が驚く。

シグナム

「飛竜一閃!!」

フレイム・ウイングマンは攻撃を避けようとしたが、不規則な動きに翻弄され、破壊されてしまった。

十代

「うわあああッ!？」

十代 LP 6500—2100 4400

十代

「流石に効いたぜ……だが、フレイム・ウイングマンの犠牲は、新たなヒーローを呼び覚ます!トラップ発動!『ヒーロー・シグナル』!!」

十代の場に伏せてあったカードが開き、ヒーローの『H』という文字を浮かべたシグナルが現れる。

シグナム

「何だこれは!？」

シグナムがレヴァンティンを構えながら問う。

十代

「ヒーローシグナルは、自分の場のモンスターが破壊された時、手札かデッキからレベル4以下の『E・HERO』を一体特殊召喚できる! 来い! フォレストマン!!」

シグナルが消え、代わりに右半身が樹になっているヒーローが現れる。

十代

「ここからが俺の反撃だ! ドロー!! フォレストマンの効果発動!!」

フォレストマンの体が緑色に光る。

十代

「この効果によって、俺はデッキか墓地から、『融合』を手札に加える」

十代はデッキから融合を手札に加える。

十代

「さらに、E・HEROエアーマンを召喚!!」

十代の場にプロペラを付けた翼を生やしたヒーローが召喚される。

十代

「エアーマンの効果発動!! 召喚時、デッキから『HERO』と名の付いたモンスター一体を手札に加える! 俺はE・HEROオーシヤンを手札に加える!!」

シグナム

「そんな召喚獣をいくつ並べても、私には勝てんぞ!!」

十代

「慌てるなつて。俺のヒーローコンボを見せてやるぜ! 魔法カード『融合』を発動!! 手札のオーシヤンと場のフォレストマンを融合! 来い! E・HEROジ・アース!!」

フォレストマンとオーシヤンが融合し、白い体のヒーローが召喚された。

十代

「ジ・アースの効果発動!! 場の『E・HERO』を生け贄にする事で、そのモンスターの攻撃力と守備力を吸収できる!!」

シグナム

「召喚獣を生け贄にするだ!!」

エアーマンがジ・アースに吸収され、姿を消すと同時に、ジ・アースの体はマグマのような色に変色する。さらに手にはマグマが噴射したような剣を二本持っていた。

なのは

「魔力、推定S+？」

フェイト

「そんな……」

はやて

「そんな召喚獣を一瞬で呼び出すなんて……」

ヴィータ

「何なんだよ、あいつは……」

モニターで見ていた四人も驚きを隠せなかった。

十代

「行け！！ジ・アース！！」

ジ・アースが剣を構え、シグナムに向かって行く。

シグナム

「面白い！！ならば、私も自分の全ての全力をこの一撃に注ぎ込む！！」

十代

「アースマグナスラッシュ！！」

シグナム

「飛竜一閃ッ！！！！」

互いの剣がぶつかり合い、巨大な爆発を起こす。

爆発が収まり、シグナムの姿が現れた。騎士甲冑は所々破れ、レヴアンティンもボロボロだったが、何とか攻撃を押さえたようだった。

十代

「さすがだな、シグナム……俺の攻撃を受けきるとはな……」

ジ・アースは力を使い果たしたのか、体の色は元に戻っていた。

シグナム

「お前の攻撃は受けきったが、こちらも攻撃するだけの力は無い。それはお前も同じだろう？ ならば、この勝負は引き分け……」

十代

「いいや、この勝負、俺の勝ちだぜ？」

シグナム

「何!？」

十代

「速攻魔法、『融合解除』！融合モンスターの融合を解除し、融合素材モンスターを場に特殊召喚する!!」

ジ・アースが消え、フォレストマンとオーシャンが現れる。

シグナム

「何!？」

十代

「行け！フォレストマン、オーシャン！！」

フォレストマンとオーシャンがシグナムに向かって行くが……

はやて

『そこまでッ！！』

訓練場に響いたはやての声によってフォレストマンとオーシャンは消えた。

はやて

『十代君の実力はよく分かった。ええな、シグナム？』

シグナムは十代を一目見た後、モニターに映っているはやてを見た。

シグナム

「はい、この勝負、リミッターが付いているとはいえ、私の敗北です」

モニターで見ていたなのは達は驚いていた。

シグナムは管理局の中でもそれなりに名があるベルカの騎士だ。

いくら制限があるとはいえ、敗北寸前にまで追い込んだ十代は隊長陣と同じかそれ以上の実力があるということになる。

シグナム

「今回は私の負けだが、次は勝つ」

十代

「望むところだ」

こうして、模擬戦の結果は十代の勝利という形に終わった。

第2話 機動六課での出会い！対決！E・HEROVS烈火の将！（後書き）

戦闘シーンはデュエルシーンと違って勝手が違うので難しい……

ネオスやネオスピーシアンの出番はもうちょっと先になりそうです

……

第3話 新たな邂逅！フォワードメンバー！！（前書き）

今回は戦闘シーンはありません。

第3話 新たな邂逅！フォワードメンバー！！

十代

「ん……朝か？」

窓から差し込む朝日で十代が目を覚ます。

十代は今、六課が用意してくれた部屋で寝泊まりしている。

昨日の模擬戦の後、十代が寝泊まりする部屋を用意してくれたのだ。

部屋はそこそ広く、生活する分には、十分な広さだった。

ハネクリボー

「クリクリ」

ハネクリボーが姿を現す。

十代

「よう、ハネクリボー。この世界で会うのは初めてだな」

ハネクリボー

「クリ」

ハネクリボーはそう言うと、部屋から出て行った。

十代

「おい、どこ行くんだよ、ハネクリボー！！」

十代は急いで着替え、ハネクリボーの後を追った。

ハネクリボーが来たのは昨日十代が模擬戦をしていた場所だった。

十代

「おい、ハネクリボー。こんなところに何のようだよ？誰もいないぜ？」

ハネクリボー

「クリッ」

ハネクリボーが指指す方向を見ると、シグナムが眼鏡をかけた女性とモニターを見ているのが見えた。

十代

「よお、シグナム」

十代がシグナムに声をかける。声をかけると同時にハネクリボーは姿を消した。

シグナム

「ああ、遊城か。随分早いな」

十代

「シグナムだって人の事言えないだろ？」

十代が訓練場に目を向けると、なのはが3人の少女と一人の少年を相手にしているのが見えた。

十代

「あいつ等は？」

シグナム

「ああ、あいつ等はなのはの教え子だ。一人前にするために出勤時以外はいつも訓練をしている」

十代

「あの2人も戦っているのか？」

シグナム

「エリオとキャロの事か？2人は幼いとはいえ、局員だからな」

十代

「ふーん」

と、十代は訓練場をしばらく眺めていた。

十代

「で、そっちは？」

十代がシグナムの隣にいる女性を見ながら聞いた。

シャーリー

「あっ、自己紹介してませんでしたね。私の名前はシャリオ・フィニーノって言います。シャーリーって呼んでください」

十代

「ああ。もう聞いてるかもしれないけど俺の名前は遊城十代だ。よ

ろしくなシャーリー」

シャーリー

「いえ、こちらこそ」

十代とシャーリーは握手をする。

シャーリー

「それにしても、十代さんのデバイスは変わった形をしていますねえ。カードを使って召喚獣を召喚したり、召喚獣同士を融合させたり……」

シャーリーがモニターに記録してある十代の戦闘記録を操作する。

訓練が終わり、なのは達は十代とシグナムがいるところまでやって来た。

なのは

「あつ、十代。おはよう」

十代

「ああ」

ちなみに昨日の夜からなのは達は十代を呼び捨てで呼び、敬語を使わなくなった。

〽昨日〽

十代

「なあ、さん付けと敬語やめてくれないか？何かむずむずすんだよ」

はやて

「うゝん。でも十代君って私達よりも年上やろ？」

十代

「は？」

なのは

「年上の人には敬語使わないと失礼でしょ？」

フェイト

「ああ、そっか……私いきなり呼び捨てにしちゃった……ごめんなさい……」

フェイトが謝る。

十代

「いや……俺まだ18だぜ？」

なのは&フェイト&はやて

「「「え!？」」」

……

はやて

「私達の方が年上やったんか……」

フェイト

「年上だと思ってた……」

なのは

「ちょっと大人びてたから、てっきり……」

十代

「と、とにかく、さん付け、敬語は禁止な!!」

（回想終了）

????

「えっと、なのはさん、そっちの方は？」

青い髪の少女が十代を見て尋ねる。

なのは

「ほら、昨日保護された人。話したでしょ？さ、みんな自己紹介して」

スバル

「スバル・ナカジマ二等陸士です!! よろしくお願いします!!」

青い髪の少女、昂が元気良く自己紹介する。

ティアナ

「同じく、ティアナ・ランスター二等陸士です。よろしく願いし

ます」

オレンジ色の髪をツインテールにした少女が淡々と答える。

エリオ

「エリオ・モンディアル三等陸士です!! よろしくお願いします!!」

赤い髪の少年がスバルに負けないくらいの声で自己紹介する。

キャロ

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です……よろしくお願いします……」

エリオの隣にいるピンクの髪の少女が小さく自己紹介した。

フリード

「キュクル」

キャロ

「えと……こっちは竜のフリードです……」

十代

「へえ、かわいい奴だな」

十代がフリードを撫でる。フリードも特に警戒はしなかった。

十代

「おっと、挨拶がまだだったな。もう聞いてるかもしれないが、俺の名は遊城十代だ。よろしくな」

フォアード一同

「「「はい!!」」「」」

なのは

「さて、お互いに挨拶が終わったところだけど、十代はどうする？
一緒に訓練する？」

なのはの問いに十代が答える前にシグナムがそれを遮った。

シグナム

「ああ、遊城は、主が午前9時に部隊長室に来るようにと」

十代

「え？」

シグナム

「この世界での語学についての勉強だそうだ」

十代

「げ……」

勉強と聞いた途端、十代の顔が引きつった。

朝食の後、十代はシグナムとヴィータに連行され、部隊長室に連れ込まれた。

十代

「おい!! お前等……痛いって……そんなに引っ張るなよ!!」

ヴィータ

「無理だって。離したらお前逃げるだろ？」

シグナム

「こうでもしないと連れて行けないからな」

三人が部隊長室に入ると、はやてが待っていた。

はやて

「やっぱり逃げようとしたんやな……」

シグナム

「はい。5回ほど逃げようとしたましたが、なんとか連れてこられました」

はやて

「そんなに嫌なんか？ 戦闘はあんなに得意なのに」

十代

「俺、学校にいたときは筆記テストほとんど赤点だったし、ほとんど実技で取ってたからさ、勉強はしないんだよ」

はやて

「筆記ほとんど赤点って……」

ヴィータ

「お前、ほんととほすげー馬鹿なんだな……」

シグナム

「あの時私に勝った奴とは思えんな……」

三人が呆れる。

はやて

「まあ、こうしていても始まんし、とっとと始めようか」

十代

「ちえ〜」

十代が渋々席に着く。

はやて

「十代の勉強はこの子が見てくれるから、仲良くするんやで？」

少女

「えっと、遊城十代さんですよ？これからお勉強を始めますよ〜」

十代の前に小さな人形が飛んできた。

十代

「人形？いや、妖精か？」

リイン11

「むう〜！！私は人形でも妖精でもありません！！私にはユニゾン
デバイスのリインフォース？という名前があるんです〜！！」

リインが顔を膨らませて怒る……が、全く怖くなかった。

十代

「悪い悪い、じゃあ、よろしくな、リインフォース!!」

リイン

「みんな私の事をリインって呼びますから、十代さんも私をリインって呼んでくださいね?」

十代

「じゃあ、リインな」

リイン

「(う……カッコいい……) は……はい!!」

こうして十代の勉強付けの毎日が始まった。

〓三時間後〓

十代

「疲れた……」

リイン

「十代さん、飲み込みは早いですから、後、2、3週間くらいやればすぐにミッド語はマスターできるようになりますよ」

十代

「あれを……後、3週間……」

リイン

「あと、逃げようなんて考えちゃダメですからね？」

十代

「ギクッ!？」

リイン

「子供じゃないんですから……」

十代とリインは訓練場に戻ってきた。訓練場にはなのはとフォアド陣、シグナムと、シャーリーがいた。

なのは

「おかえりって……その様子だと、みっちりやったみたいだね……」

十代

「まあ……」

なのは

「じゃあ、少し体動かしてみる？」

十代

「ああ、いいぜ？少し暴れたかったところだしな……」

なのは

「じゃあ決まりね？」

なのははそう言うのと、フォアード陣の方へと向き直る。

なのは

「さて、フォワードのみんな、十代と模擬戦してみたくない？」

フォアード陣

「「「え!?!」」」」

なのは

「さすがに4対1って訳には行かないけど、誰か、戦ってみたいって言う人、いる？」

スバル

「はい!!」

スバルが手を挙げる。

なのは

「じゃ、スバルに決まりね。今からお昼食べて、またここに集合。はい、解散!!」

昼食後、十代とスバルの模擬戦が行われる事になった。

第3話 新たな邂逅！フォワードメンバー！！（後書き）

次回は、十代VSスバルです！！

できるだけ早く、更新したいと思います。

あ……5D，Sの方も進めないと……

第4話 十代VSスバル!! (前書き)

V S スバル戦です。

あまり、面白みが無いような……

もっと研究しないとなあ……

第4話 十代VSスバル!!

昼食後、十代とスバルは訓練場にて向かい合っていた。

スバル

「十代さん、よろしくお願いします!!」

十代

「ああ、全力で来い!!俺も、手加減無しで行くぜ!!」

十代がデュエルディスクを展開させる。

なのは

『二人とも、準備はいい?』

十代

「いつでもいいぜ」

スバル

「はい!!」

なのは

『それじゃ、レディーゴー!!』

訓練場になのはの声が響き渡る。

スバル

「ウイングロード!!」

スバルが青いレールのようなものを造り出す。

十代

「すげー!!」

スバルの造り出したウイングロードを見て十代が感激する。

スバル

「十代さん、行きます!!」

十代

「来い!!俺は、E・HEROクレイマンを守備表示で召喚!!」

十代がカードをセットすると、十代の場に体が粘土できたヒーローが召喚される。

スバル

「これが、噂の召喚獣、カッコいい!!」

スバルが右腕のリボルバーナックルでクレイマンを攻撃する。

スバル

「くっ!!」

しかし、予想以上の強度だったのか、スバルの一撃はクレイマンによって弾かれる。

スバル

「見た目通り固い、だったら!!」

スバルがリボルバーナックルのカートリッジをロードし、魔力を拳に圧縮させた。

スバル

「うおおおおッ!!」

十代

「何!？」

スバルの一撃でクレイマンが爆散する。

スバル

「やった!」

十代

「すごい!!魔法ってそんな事も出来るのか!!」

スバル

「はい!!」

十代

「こりゃ、俺も負けてらんないな……今度は俺の番だ!ドロー!」

十代のドローしたカードは『融合』。手札は『フェザーマン』、『バーストレディ』、『スパークガン』、『融合解除』、『ヒーローシグナル』。

十代

「カードを1枚伏せ、魔法カード『融合』!手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合!来い!『E・HEROフレイム・ウ

イングマン』!!」

十代の場にフレイム・ウイングマンが召喚される。

スバル

「召喚獣同士が融合した!?!まさか、これがシグナム副隊長を圧倒した召喚獣……!?!」

十代

「行くぜスバル!行け!フレイム・ウイングマン!!」

フレイムウイングマンがスバルに向けて竜の形をした右手を突き出す。

十代

「フレイムシュート!!」

フレイムウイングマンの右手から炎が発射される。

スバル

「くっ!!」

それを見たスバルがすぐに防御壁を展開し、フレイム・ウイングマンの攻撃を防ぐ。

スバル

「(これは……想像以上にきつい!!)」

フレイム・ウイングマンの発射した炎が消える頃にはスバルの魔力は半分近く減っていた。

スバル

「(すごい!! 魔力を半分近く持って行かれた……それでも!!)」

十代

「(何かやるつもりか、それなら!!) 速攻魔法『融合解除』!!」

スバル

「え!?!」

十代

「フレイム・ウイングマンの融合を解除!」

フレイム・ウイングマンが消え、融合前のフェザーマン、バーストレディに戻る。

十代

「行け! フェザーマン、バーストレディ、スバルを攻撃!!」

フェザーマンとバーストレディがスバルに向かっていく。

スバル

「負けるかあ!! 一撃必倒!! デイバイイイイイン!!!!」

スバルが魔力スフィアを形成した時には、フェザーマンとバーストレディはスバルの眼前に迫っていた。

スバル

「バスタアアアアツ!!!!!!」

右手で魔力スフィアを撃ち抜くと、同時に魔力砲が発射され、眼前に迫っていたフェザーマンとバーストレディは破壊された。

十代

「ぐああっ!!」

十代 LP8000—2200≡5800

十代

「流石に効いたぜ……だが、トラップ発動!! 『ヒーローシグナル』
!!」

十代とスバルの間の上空に『H』の文字が浮かんだシグナルが現れる。

スバル

「何!?!」

十代

「俺の場のモンスターが破壊された時、手札かデッキから、『E・HERO』と名の付いたレベル4のモンスターを特殊召喚できる!俺はデッキから、『E・HERO バブルマン』を召喚する!!」

十代の場に青い鎧と白いマントを着込み、右腕に水鉄砲を装備したヒーローが召喚される。

スバル

「また新しい召喚獣!? これもカッコいい!!」

スバルが目を輝かせる。

十代

「バブルマンの効果発動！バブルマンが召喚された時、フィールドに他のカードが無ければ、カードを2枚ドロロー！！」

引いたカードは『スパークマン』、『融合回収』。

十代

「俺のターン、ドロロー！！」

引いたカードは『NEX』。しかし、『ネオスペーシアン』がいなかったため、このカードは必要なかった。

十代

「魔法カード『融合回収』を発動！！墓地から『融合』と融合に使用したモンスターを手札に加える！俺は、『融合』と『フェザーマン』を手札に加える」

スバル

「（十代さん、すごい、カッコいい！！）」

十代

「俺は『E・HEROスパークマン』を召喚！」

十代の場にスパークマンが召喚される。

十代

「さらにスパークマンに『スパークガン』を装備！！」

スパークマンの右手に黒い銃が装備される。

十代

「スパークガン発射!!」

スパークマンがスバルに向けてスパークガンを発射する。

スバル

「え!？」

突然の事に判断が遅れ、スバルはスパークガンの弾丸をまともに喰らってしまった。

スバル

「何これ!?! 体が痺れて……動けない!?!」

スバルが片膝を付く。

十代

「さらに、魔法カード『融合』発動! 手札の『フェザーマン』と場の『スパークマン』、『バブルマン』を融合!! 現れる! 『E・HERO テンペスター』!!」

スパークマンとバブルマン、フェザーマンが消え、スパークマンを思わせる青い体に、フェザーマンを彷彿させる背中の翼と左腕のかぎ爪、そして右腕にはバブルマンの水鉄砲が進化したようなキャノンを装備したヒーローが現れる。

ティアナ

「スバルを麻痺させた後に強力な召喚獣を呼んで確実に止めをさせるようにしてる……」

エリオ

「す、すごい……」

キャロ

「……」

フォワード陣も十代の戦い方に驚いていた。

シグナム

「少々、やり過ぎな感じはあるがな……」

リイン

「やり過ぎて言うか、鬼ですね……」

なのは

「そろそろ止めた方がいいかな？」

テンペスターがスバルに右腕のキャノンを向ける。

十代

「どうする？まだ続けるか？それとも……」

スバル

「すいません！！無理です！！」

スバルが白旗を挙げる。

こうして、十代とスバルの戦いは、十代の勝利と言う形に終わった。

その頃、十代のデッキの中では……

クレイマン

「あの青い髪の少女、スバルだったか？中々の一撃だった。俺の防御を崩すとはな……」

クレイマンが腕を組みスバルの放った一撃を評価していた。

ジ・アース

「私としては、私の攻撃を受けきったシグナムという騎士も中々……」

ジ・アースが腕組みをしてシグナムを評価する。

フォレストマン

「そう言えば、マスターのデッキから見ていたが。この世界は女性が多いな……」

オーシャン

「というより、女性しかいないような……男性はエリオという少年だけだったような気がする……」

フレイム・ウイングマン

「それにしても、美しい女性が多かった……／＼／＼」

フレイム・ウイングマンが頬を赤らめる。

オーシャン

「フレイム・ウイングマン!？」

フレイム・ウイングマンの様子をオーシャンが心配する。

フェザーマン

「私はなのはさんが好きだ!!」

フェザーマンが顔を真っ赤にして叫ぶ。

バブルマン

「いきなりどうしたんだ!？そもそもフェザーマンとなのはさんは直接の面識は無いはずだ!!」

フェザーマンのいきなりの発言にバブルマンはドン引きだった。

フェザーマン

「私が融合する前に、なのはさんが私を見ていたのだ!!あの憧れの眼差し……最高だ!!」

スパークマン

「いや、多分それはマスターを見ていたのだと思うが……」

スパークマンが冷静に指摘する。

バーストレディ

「それに召喚されたとしても、すぐにやられるアンタなんか眼中に無いと思うわよ?」

バーストレディが冷たくツツコミを入れる。

スパークマン

「（それは、私達下級HERO全員に言える事なのでは？）」

スパークマンが心の中でツツコミを入れる。

フェザーマン

「そ……そんな……」

フェザーマンが膝を付きうな垂れる。

スパークマン

「ま……まあ、そう落ち込むな。フェザーマンは召喚される比率もかなり高い方だからな。そのうち、なのはさんに気付いてもらえるさ」

スパークマンが落ち込むフェザーマンを慰める。

フェザーマン

「そ、そうだな！！まだここに来ただけだしな！！チャンスはあるよな？」

スパークマン

「ああ！！むしろ、なのはさんはかなり好みだ！共に頑張ろうじゃないか！！」

フレイム・ウイングマン

「私もだ！ともに頑張ろう！！」

フレイム・ウイングマンも会話に参加する

フェザーマン

「フレイム・ウイングマン、スパークマン……ああ!! ともに頑張ろう!!」

涙を流したフェザーマンが、スパークマン、フレイム・ウイングマンと肩を組む。

フォレストマン

「ああ、シグナム姐さん……／＼この命にかけても、あなたをお守りします!!」

オーシャン

「フォレストマン! その意見には心から賛同するぞ!!」

フォレストマンとオーシャンも叫ぶ。

フォレストマン

「そうか! なら、共にシグナム姐さんをお守りしようじゃないか!!」

オーシャン

「ああ!!」

フォレストマンとオーシャンが握手をする。

ネオス

「(ダメだこいつら……早く何とかしないと……)」

ネオスが小さくため息をついた。

第4話 十代VSスバル!! (後書き)

ヒーロー達のキャラが……

でも、絶対こういう事思ってるような気がする……

第5話 ホテル・アグスタ（前書き）

連続投稿中です。

ページが崩れないといいんだけどな……

第5話 ホテル・アグスタ

スバルとの一戦から数日後、十代は釣り道具一式を借り、六課の宿舎の裏で釣りをしていた。

ハネクリボー

「クリクリ〜」

十代

「訓練に出なくていいのかって？」

ハネクリボー

「クリ〜」

十代

「あいつらはあいつらで、やってるんだし、俺が無理に入る必要は無いさ。それに……」

ハネクリボー

「クリクリ〜」

十代

「そうだな。こんな所で釣りなんてしてたら……」

リン

「十代さん！ やつと見つけましたよー！！」

十代

「ゲッ……リン……」

リンの姿を見た瞬間、十代の顔が引きつる。

リン

「ゲッじゃないです！こんな所で釣り何かして……」

十代

「わかったよ……ちゃんと勉強すればいいんだろ？」

十代が釣り竿を引き上げる。

リン

「違います。はやてちゃんからの緊急召集です。十代さんも早く来てください」

十代

「はやてから？珍しいな」

リン

「はい、それと、ハネクリボーさんも来てくださいね？引っ込んじやダメですからね？」

ハネクリボー

「クリッ？」

スバルとの一戦の後、六課内にて姿を現したハネクリボーは、女性局員のハートを鷲掴みにしたのだった。

その後は、抱きつかれたり、撫でられたりとハネクリボーは散々な目に合わされたのだった。耐えられなくなったハネクリボーは十代

のデッキの中に姿を消したのだが、その所為で十代はハネクリボーを出せと女性局員から大ブーイングを受けたのだった。

今では、そのかわいらしい容姿と、愛くるしい動作から、リインと並ぶ六課のマスコットとなったとか……

ちなみに、管理局はリインは男性陣に、ハネクリボーは女性陣に大人気である。

十代

「何でハネクリボーも何だよ？」

リイン

「はやてちゃんがハネクリボーを胸に抱きたいからだそうです」

ハネクリボー

「クリ〜……」

ハネクリボーが十代に救いを求めるが、

十代

「悪い、相棒……俺にはどうする事も出来ない……」

十代はお手上げ状態だった。

それから移動した十代は、はやてと隊長陣、フォワード陣を召集しヘリに乗った。

ヴィータ

「遅えよ！何やってたんだよ！！」

遅れてきた十代にヴィータが突っかかる。

リン

「また六課の宿舎裏で釣りをしてました……」

なのは

「また！？」

フェイト

「良く飽きないね……」

ちなみに十代はこれまで5回ほど勉強やら訓練をサボって釣りをしていた。その度にリンに見つかって説教を喰らうのだが。

十代

「それで？俺を呼んだのには訳があるんだろ？」

十代がはやてに問う。

はやて

「うん。今まで分からなかったガジェットの開発者がやっとわかってな。それにしても、ハネクリボー可愛いな」

はやてがハネクリボーを抱きながら言うと、シャーリーはパネルを叩いて画像をだした。

フェイト

「ジェイル・スカリエッティ。生態関係の違法研究で指名手配されている科学者」

説明を受け継いだのはフェイト。十代達は配られた資料に目を通す。資料を読むと犯罪者ではなかったらまさしく天才と呼ぶにふさわしい研究者だろう。

十代

「うわ……性格悪そー」

スカリエッティの画像を見た十代の唐突な一言になのは達も苦笑いを浮かべる。

一応、十代は六課に保護されたとき、はやてから機動六課の方針を聞いていた。『ロストギア』と呼ばれる古代遺物の回収、特に『レリック』と呼ばれる赤い宝石の回収を専任している。恐らくスカリエッティと『レリック』には何か関連性があるとみて、六課はスカリエッティの行方を追うらしい。

なのは

「今回の任務はホテル・アグスタの警備です」

なのはが任務の説明をする。

なのは

「アグスタには骨董品オークションがあつて中には貴重なロストギアの護衛、及びオークションの参加者の安全の確保が目的だよ」

なのはが説明しているうちに、へりは目的地に着いた。

ホテルの中の警備はなのは、フェイト、はやての3人、ホテル周辺にはシグナム、ヴィーダとフォワード陣が警備にあたる。

十代はその両方を兼ねており、ホテル内で待機し、外で何かあれば外に出るという事になっていた。

デュエルディスクは持ち込む事が出来ないため、シャマルに預けている。

現在、なのはは十代と一緒に警備をしている。

時々念話でフェイト、はやて達に連絡を送っている。

ちなみにホテル内のため3人はドレスを着ていた。

ドレスに着替えた3人を十代が何のためらいも無く「綺麗だな」と言ったので、3人は顔を赤くしたのは内緒である。

なのは

「十代は地球で生まれたんでしょ？」

十代

「ああ。地球の、日本で生まれた」

なのは

「十代の世界にはカードゲームが流行してて、それをやる人を養成

する学校もあるんでしょ？」

十代

「ああ、もう卒業しちゃったけどな……」

十代はなのはにデュエルアカデミアで自分が体験した事を話した。
(ユベルの事は話さなかったが)

なのは

「そっか。十代も色々な事を経験して今の十代がいるんだ。そう言え、ハネクリボーって結局何なの？カードの精霊って説明されたけど、よくわからなくて……」

十代

「俺も詳しい事はわからないんだけど、ハネクリボーのカードは俺がデュエルアカデミアの入学試験を受ける時にある人から渡されたんだ。それに俺は子供の頃からカードの精霊が見えた」

なのは

「つまり、謎の存在ってことなんだ」

十代

「そういう事だ」

数時間後、オークションは通常通り行われたが、突如ガジェットの襲撃があり、会場内は混乱していた。

十代

「俺は外の奴らを助けに行く」

なのは

「わかった」

フェイト

「無理しないでね」

なのはとフェイトと分かれた十代はシャルが待機している所へと向かっていた。

十代

「シャルさん!!」

シャル

「十代君! ガジェットが……今、シグナムとヴィータちゃん、ザフィーラとスバルとティアナが応戦してるけど、数が多すぎて……」

十代

「わかった。俺もあいつらのところへ行く」

シャル

「お願い……」

シャルが十代のデュエルディスクを十代に渡す。

十代は森を駆けていた。この場所に一番近いのは、スバルとティアナのいる場所だ。

ユベル

「十代」

走っている十代にユベルが呼びかける。

十代

「どうした？」

呼びかけられた十代は立ち止まった。

ユベル

「この先に嫌な気配がする……」

十代

「え？」

十代はユベルの指差した方向を見る。

ユベル

「おそらくこの騒動の元凶がいるんだろう……」

十代

「じゃあ、その元凶をブッ潰しに行くか」

ユベル

「やれやれ、君ならそう言うと思ったよ」

十代達がしばらく進むと、紫色の髪の少女が魔法陣を展開させて立っていた。

十代

「あいつは！？歳はエリオやキャロと同じ位か？」

少女

「……」

少女は十代を見るが、動くようなそぶりは見せなかった。

少女

「遊城……十代……」

突然、少女が十代の名を呼んだ。

十代

「何故、俺の名前を！？」

少女

「あなたはドクターの探し物の一つ……」

十代

「ドクター？誰だよ、そいつは！？」

十代が聞き返すと、少女の前にモニターが現れた。

スカリエッティ

「ごきげんよう……遊城十代君」

十代

「なっ！？お前は……！？」

ヘリの中で見た資料に載っていた男、ジェイル・スカリエッティ。

十代

「お前、まさか、ジェイル・スカリエッティ!?」

スカリエッティ

「ほう、私の名前を知っているとは、光栄だよ。機動六課からの入
れ知恵かな?」

十代

「そんな事はどうでもいい。俺に何の用だ? まさか、俺をこの世界
に連れてきたのはお前仕業か!」

十代が声を荒げる。

スカリエッティ

「まあ、落ち着きたまえ。そんなくだらない事よりも、私は君の力
に少々興味があつてね」

十代

「俺の力!」

スカリエッティ

「そうさ。カードの力を使って戦い、精霊の姿が見え、そして、精
霊ユベルをその身に宿している。実に面白い」

十代

「何故、ユベルの事を!」

スカリエッティ

「君の事は最初から知っていたさ。全てね」

スカリエッティが不適な笑みを浮かべる。

十代

「こそこそしてないで、俺の前に来いよ。臆病者」

スカリエッティ

「安い挑発には乗らないよ。しかし、初対面がモニターというのは失礼だったかね？なら、私からの特別な贈り物を贈るとしよう」

スカリエッティがそう言うのと、少女が魔法陣から何かを召喚した。

十代

「これは!？」

それは人の形をしたロボットだった。全身銀色で、顔のような部位には赤いモノアイが着いていた。

十代

「まさか、そいつの腕についているのは……」

スカリエッティ

「察しがいいね。そうさ、これは私が新たに作り上げた作品の一つ君と同じようにデュエルモンスターズで戦う人工生命体さ」

十代

「デュエルモンスターズで!？」

スカリエッティの説明を聞いた十代が驚く。

スカリエッティ

「まだ試作段階だから対した戦力にはならないだろうけど、君の相手にはちょうどいいだろう。ゆっくりと遊んでくれてまえ」

スカリエッティはそう言い残して消えた。それと同時に紫色の髪の少女も姿を消した。

十代

「くっ！」

十代がホテルに戻ろうとすると、スカリエッティの人工生命体が行く手を阻む。

人工生命体

「十代、私とデュエルだ」

人工生命体が機械の音声で言う。

十代

「くっ！足止めのつもりか！なら、すぐに決着を付けてやる！」

十代と人工生命体がデュエルディスクを展開させる。

十代&人工生命体

「デュエル！！」

十代 LP4000

人工生命体 LP4000

人工生命体

「ドロー。仮面竜を守備表示。さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド」

仮面竜 DEF1100

十代

「俺のターン、ドロー!!」

引いたカードは『融合』。手札は『E・HEROスパークマン』、『ヒーローシグナル』、『ヒーローバリア』、『融合回収』、『Nフレアスカラベ』、『コンバート・コンタクト』。

十代

「来い! E・HEROスパークマン!!」

E・HEROスパークマン ATK1600

十代

「行け! スパークマン! スパークフラッシュ!!」

スパークマンが右手の電撃を仮面竜に浴びせ、破壊する。

人工生命体

「仮面竜の効果処理。アームドラゴンLV3を召喚」

アームドラゴンLV3 ATK1200

十代

「(アームドラゴン? まさか……) カードを二枚伏せて、ターン

エンド」

人工生命体

「ドロー、アームドドラゴンLV3の効果を処理。アームドドラゴンLV5を特殊召喚」

アームドドラゴンLV3が消え、アームドドラゴンLV5が召喚される。

人工生命体

「Xーヘッドキャノン召喚。バトル！アームドドラゴンLV5で、スパークマンを攻撃」

Xーヘッドキャノン ATK1800

アームドドラゴンLV5が両腕を振り回し、スパークマンを破壊する。

十代

「くっ！！」

十代 LP4000－800＝3200

十代

「トラップ発動！『ヒーローシグナル』！この効果によって俺はデッキから、『E・HEROフォレストマン』守備表示で特殊召喚する！！」

E・HEROフォレストマン DEF2000

人工生命体

「このターンのエンドフェイズ、アームドドラゴンLV5がモンス
ターを戦闘で破壊した事で、アームドドラゴンLV5は『アームド
ドラゴンLV7』へとレベルアップする。」

アームドドラゴンLV5が光に包まれ、次の瞬間、アームドドラゴ
ンLV7が姿を現す。

アームドドラゴンLV7 ATK2800

十代

「（アームドドラゴンに、X-ヘッドキャノン……やはり奴のデッ
キは……）」

十代は気付いていた、この人工生命体の使用しているデッキが十代
のライバルの一人『万丈目 準』のものである事に……

第5話 ホテル・アグスタ（後書き）

久しぶりに普通のデュエルシーンが書けた……

やっぱりこっちの方がやりやすいな。

第6話 決死の一撃！E・HERO マグマ・ネオス！！（前書き）

なのはとティアナの出来事が終わったら、5D'sの更新をしよう
と思います！

第6話 決死の一撃！E・HERO マグマ・ネオス！！

十代 LP3200

人工生命体 LP4000

十代

「俺のターン、ドロロー！魔法カード『融合』！手札のオーシャンと、場のフォレストマンを融合！来い！E・HERO ジ・アース！」

E・HERO ジ・アース ATK2500

十代

「バトル！行け、ジ・アース！X－ヘッドキャノンに攻撃！アースインパクト！！」

ジ・アースが両拳でX－ヘッドキャノンを粉碎する。

人工生命体 LP4000－700＝3300

十代

「ターンエンド」

人工生命体

「ドロロー、アームドラゴン LV7でジ・アースに攻撃！」

アームドラゴンLV7がジ・アースを破壊する。

十代

「ぐっ!!」

十代 LP3200-300||2900

人工生命体

「ターンエンド」

十代

「俺のターン、ドロー!」

引いたカードは『E・HERO ネオス』

十代

「魔法カード『コンバート・コンタクト』!自分の場にモンスターがない時、手札とデッキから、『N』を1枚づつ墓地に送る。俺は手札からN・フレア・スカラベと、デッキから、N・アクア・ドルフィンを送る。」

十代はカードを墓地に送った後、デッキをシャッフルする。

十代

「その後、カードを二枚ドロー!!魔法カード『融合回収』を発動!墓地の『融合』と融合に使用したモンスターを手札に戻す。俺は『融合』と、オーシャンを手札に戻す。」

十代がデュエルディスクからカードを手札に加える。

十代

「魔法カード、『フェイクヒーロー』を発動!自分の手札から、『E・HERO』と名の付いたモンスター一体を特殊召喚する。来い

！『E・HERO ネオス』！！」

E・HERO ネオス ATK2500

十代

「さらに、手札から魔法カード『コンタクト・ソウル』を発動！ネオスが場にいる時、手札、デッキ、墓地から『N』一体を特殊召喚する。俺は墓地からN・フレア・スカラベを特殊召喚する！！」

十代の場にカブトムシの様な姿のモンスターが召喚される。

N・フレア・スカラベ ATK500

十代

「そして、ネオスとフレア・スカラベをコンタクト融合！！出でよ！！E・HEROフレア・ネオス！！」

ネオスとフレア・スカラベが場から消え、代わりにカブトムシを思わせる姿をしたネオスが召喚された。

E・HERO フレア・ネオス ATK2500

十代

「フレア・ネオスの攻撃力は、場の魔法、罠カード1枚に付き、400ポイントアップする！！」

E・HERO フレア・ネオス ATK2500+800=3300

十代

「行け！フレア・ネオス！！アームドラゴン LV7に攻撃！！」

バーン・ツー・アッシュー!!」

フレア・ネオスが右手で火球を作り、アームドラゴンに投げつける。

その攻撃を受けたアームドラゴンは破壊された。

人工生命体 LP3300－500＝2800

十代

「俺はさらに、E・HERO オーシャンを攻撃表示で召喚して、ターンエンド。このターンのエンドフェイズに、フレア・ネオスはデッキに戻る」

フレア・ネオスは場から消え去った。

ネオスのコンタクト融合体はネオスペース以外の場所では、長時間場にいる事が出来ないのだ。

人工生命体

「ドロー、トラップ発動、『レベル・バックアップ』!墓地から、アームド・ドラゴン LV7を召喚条件を無視して特殊召喚」

アームド・ドラゴン LV7 ATK2800

十代

「また、アームド・ドラゴンを……!?!」

人工生命体

「ただし、このカードで召喚したモンスターの効果は無効となり、

攻撃力は0になる。そして、私はこのターン、モンスター効果の発動は出来ない」

アームド・ドラゴン LV7 ATK2800↓0

人工生命体

「このアームド・ドラゴン LV7を生け贄に、アームド・ドラゴン LV10を、特殊召喚!!」

アームド・ドラゴン LV7が消え、各部がさらに鋭くなったアームド・ドラゴン LV10が召喚される。

アームド・ドラゴン LV10

十代

「(危なかったぜ、アームド・ドラゴン LV10は、手札1枚をコストに相手の場のモンスターを全滅させる効果を持っている。効果を使われていたら、オーシャンは破壊され、ダイレクトアタックで俺は負けていた……アームド・ドラゴンの攻撃が来ても、伏せてある『ヒーローバリア』を使えば、オーシャンを場に残せる!」

人工生命体

「手札から速攻魔法『サイクロン』を発動。その伏せカードを破壊する」

十代

「何!?!なら、そのサイクロンにチェーンして、リバーストラップ発動!『ヒーローバリア』!」

場に現れた竜巻が十代の『ヒーローバリア』を破壊するが、十代の

場のオーシャンは破壊されたヒーローバリアの力によって守られた。

人工生命体

「アームド・ドラゴン LV10でオーシャンを攻撃！」

アームド・ドラゴン LV10がオーシャンを攻撃するが、アームド・ドラゴンの攻撃はオーシャンを破壊できなかった。

人工生命体

「何が……!?!」

十代

「『ヒーローバリア』は、俺の場にE・HEROがいる時、相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にできるのさ」

人工生命体

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

十代

「(まずい、俺の手札は0、場にはオーシャンがいるが、アームド・ドラゴンには勝てない……次のドロで全てが決まる……)ドロ！オーシャンの効果発動！俺のスタンバイフェイズに場か、墓地の『HERO』を手札に戻す!!」

人工生命体

「トラップ発動！『レベル・ドレイン』！このカードは、自分の場に『LV』と名の付いたモンスターがいる時、エンドフェイズ時まで相手モンスター全ての効果を無効にする」

十代

「何!?! なら、俺は、魔法カード『テイクオーバー5』を発動! デッキの上からカードを5枚墓地に送る」

十代の墓地に送ったカードは『E・HEROネクロダークマン』、『ネクロ・ガードナー』、『N・フレア・スカラベ』、『N・グライン・モール』、『ダンディライオン』の五枚だった。

十代

「さらに、ダンディライオンが墓地に送られた事で、綿毛トークン2体を守備表示で特殊召喚。ダンディライオンの効果は墓地に行つて発動する効果だ。よって、お前のトラップの影響は受けない!」

綿毛トークン DEF0

十代

「ターンエンド」

人工生命体

「ドロー、アームド・ドラゴン LV10の効果により、手札の『Yードラゴンヘッド』を墓地に送る事で、相手の場のモンスターを全て破壊する」

アームド・ドラゴンの腹から大型のカッターが現れ、オーシャンと綿毛トークンを八つ裂きにする。

人工生命体

「アームド・ドラゴン LV10でダイレクトアタック!!」

アームド・ドラゴンが十代に向けてドリルの付いた右腕を振り下ろす。

十代

「墓地のネクロ・ガードナーを除外する事で、相手モンスター一体の攻撃を無効にする！！」

十代の墓地からネクロ・ガードナーが現れ、アームド・ドラゴンの攻撃を防ぐ。

人工生命体

「ターンエンド」

十代

「俺のターン、ドロロー！テイクオーバー5の効果で、もう1枚ドロロー！！」

十代の手札は二枚だが、既にこの状況を打開する方法は手札にあった。

十代

「墓地のネクロダークマンの効果により、ネオスを生け贄無しで召喚！」

E・HEROネオス ATK2500

十代

「そして魔法カード『ホープ・オブ・フィフス』！墓地の『E・HERO』を五体選択してデッキに戻した後、カードを二枚ドロウする！！」

十代が墓地から『スパークマン』、『フォレストマン』、『オーシ

ヤン』、『ジ・アース』『ネクロダークマン』デッキに戻し、カードを二枚ドローする。

十代

「魔法カード『ミラクル・コンタクト』！場のネオスと、墓地のフレア・スカラベ、グラン・モールをデッキに戻して、E・HERO マグマ・ネオスを召喚！！」

十代の場からネオスが消え、マグマ・ネオスが召喚される。

E・HERO マグマ・ネオス ATK3000

十代

「マグマネオスの攻撃力は、場のカード1枚につき400ポイントアップする！場には、合計三枚のカードがある！よって攻撃力は1200ポイントアップ！！」

E・HERO マグマ・ネオス ATK3000+1200=4200

十代

「マグマ・ネオスでアームド・ドラゴンに攻撃！！スーパー・ヒーロ・メテオ！！」

マグマ・ネオスが巨大な隕石をアームド・ドラゴンに叩き付ける。

その隕石に押しつぶされ、アームド・ドラゴンは破壊された。

人工生命体 LP2800-1200=1600

人工生命体

「トラップ発動！『レベル・ブラスト』！自分の場の『LV』モンスターが破壊された時、破壊されたモンスターのレベル×200ポイントのダメージを与える！！アームド・ドラゴン LV10のレベルは10。よって2000ポイントのダメージとなる」

十代 LP2900－2000＝900

十代

「だが、俺の攻撃はまだ終わっていない！速攻魔法『コンタクト・アウト』！マグマ・ネオスの融合を解除し、素材モンスターを特殊召喚する！」

マグマ・ネオスが消え、ネオス、フレア・スカラベ、グラン・モールが召喚された。

人工生命体

「……！？」

十代の戦術で人工生命体の体が硬直する。

十代

「俺のモンスターにはまだ、攻撃が残っている！行け！ネオス！！」

ネオスが人工生命体に攻撃する。

人工生命体 LP1600－2500＝0

十代

「勝った……ん！？」

人工生命体は機能が停止したのか、その場で倒れ、爆発した。

十代

「うわっ!？」

十代は爆風から身を守る。

十代

「爆発した……ん？」

人工生命体が爆発した所にディスクのようなものが落ちていた。

十代

「こいつは……ってやべえ!早くあいつ等と合流しねえと!!」

十代はディスクを上着の内ポケットにしまい、スバル達と合流すべく走り出した。

スバル達と合流した十代は、残りのガジェットを全て殲滅し、ホテルに戻った。

十代

「そういえば、ティアナどこいったんだ？」

ティアナの姿が見えないのに気付いた十代がスバルに聞く。

スバル

「あ……えっと……」

スバルが言葉を詰まらせる。

ヴィータ

「あいつ、さっきの戦闘ででかいミスをしちまってな、それで、今は頭冷やすために、一人にさせてんだ」

スバルの代わりにヴィータが説明する。

十代

「ふうん」

軽い返事をした十代だったが、近いうちに良くないことが起きる様な感じがしていたのだった。

第6話 決死の一撃！E・HERO マグマ・ネオス！！（後書き）

結局、VWXYZ出せなかった……

アームド・ドラゴンだけじゃ、内容が薄い様な気がする……

第7話 悲しい戦い（前書き）

今回はあの伝説の回です。

うまく書けてないかもしれませんが……

第7話 悲しい戦い

アグスタの事件から数日後。

ティアナの様子がおかしいとなのは達から相談があった。

まるで焦っているように感じており、対応に困っているらしい。

十代はそんなティアナの様子を心配したフェイトとヴィータから相談を受けていた。

十代

「そういえば、最近、夜も自主練してるの何度か見たな……」

フェイト

「やっぱり？ 頑張るのは、いい事なんだけど、ちょっとやり過ぎっているか……」

ヴィータ

「ああ。焦ってる様な感じがするんだよな……」

十代

「ティアナが訓練の密度をあげたのってホテルでの任務の後だろ？ ミスを取り返すために頑張ってるじゃねえのか？ あゝ逃げられた……」

十代が竿を戻しながら言う。

フェイト

「それは、そうだけど……それでも、やりすぎって気はするよ？」

フェイトがハネクリボーを胸に抱えながら言う。

十代

「俺はあいつの事を知らないから何も言えねえけど、あいつって初めて会ったときも、何つうか……余裕が無いっていうか……」

十代が新しい餌を取り付けた竿を海に垂らす。

十代

「あいつ、強くなりたいって言う以前に何かあんのか？俺はあいつが何かを追いかけてるように見えるぜ？」

十代の言葉にフェイトとヴィータが表情を曇らせる。

フェイト

「実は……」

フェイト達はティアナと、ティアナの過去について話し始めたのだった。

ヴァイス

「よお！十代！」

夜、外を歩いている十代に一人の男が声をかけた。

十代

「ん！？ヴァイスか」

十代とヴァイスは、十代が六課に保護され、六課の宿舎に向かう時のヘリの中で知り合ったのだった。

何かと話が合うので、十代とヴァイスはすぐに親しくなったのだ。

ヴァイス

「散歩か？」

十代

「まあな」

ヴァイス

「そういや十代。ティアナが夜、毎日自主練してるの知ってるか？」

ヴァイスが十代に聞く。

十代

「ああ。知ってる」

ヴァイス

「一応、忠告はしたんだけどな……いまいち効果は無かった……」

ヴァイスが肩を落とす。

ヴァイス

「このままだと、あいつ、いつかぶっ倒れるぜ？」

十代

「かもな。まあ、何かあったら俺がフォローするさ」

ヴァイス

「そうか、頼むぜ」

そう言って十代達は別れた。

ヴァイスは寝ると言って宿舎に、十代は……

十代

「よお」

ティアナが自主錬をしている林にいた。

ティアナ

「え？十代さん？」

突然の訪問者にティアナが驚く。

十代

「この所、ぶっ続けで訓練してるだろ？体持たないぜ？」

ティアナ

「いえ、私みたいな凡人は人の何倍もやらなきゃ行けませんから……」

ティアナがぶっきらぼうな返事をする。

十代

「兄の汚名を晴らすためか……」

ティアナ

「!？」

十代の呟きにティアナが大きく反応する。

ティアナ

「どうして、兄の事を!？」

十代

「フェイト達から聞いた」

ティアナは執務官を希望していた。だがその背景には兄の無念を晴らすという目的があったのだ。

唯一の肉親であったティアナにとっては、兄の存在は強かったのだろう。

しかし兄は任務中に殉死、周りから『無能』、『役立たず』の烙印が押された。

だからこそティアナは力を求めるのだろう。

亡き兄をバカにした人物達に対して証明したい。

ただそれだけなのだろう。

十代

「仮にお前が強くなってもそれはお前の兄ちゃんが強いってことに

はならないんじゃないか？」

ティアナ

「どういう意味ですか？」

十代

「お前が強くなっても、それはお前の強さだ。お前がいくら強くなっても、周りはお前の事しか評価しねえよ」

ティアナ

「……」

十代の言葉にティアナが黙る。

十代

「それに、お前が手にしようとしているのは偽物の強さだ。それじゃあ本当に強くはなれねえよ」

十代はそれだけ言うと、宿舎に帰っていった。

ティアナ

「何よ……偉そうに……」

ティアナは兄の汚名を晴らすという事しか考えていなかった。

ティアナ

「（あたしは強くならなくちゃいけないんだ！ランスターの弾丸は誰よりも強いってことを証明するんだ！！）」

ティアナは拳を近くの木に叩き付けた。

ユベル

「君の言葉はあの小娘に届いたのかな？」

十代の自室にてユベルが十代に聞いた。

十代

「どうかな」

ユベル

「あの小娘は近いうちに何か、危ない事をする。気をつけておくんだね」

ユベルはそう言い残し消えた。

十代

「（危ないか……確かにな……）」

十代はベッドに寝転がる。

十代

「そういや、三日後に『スターズ』と『ライトニング』が合同で模

擬戦やるって言ってたな……」

十代はそう呟くと、眠りについた。

三日後

フェイト

「あつ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

エリオ

「フェイトさん!？」

なのはとスターズ分隊の模擬戦を見るために戦闘圏外のビルの屋上にフェイトが駆け込んできた。

フェイト

「私も手伝おうと思ってたんだけど……」

ヴィータ

「今はスターズの番。」

フェイト

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね。」

ヴィータ

「ああ、なのはもここんどこ訓練密度濃いからな。少し休ませねえと。」

フェイト

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり。」

エリオ

「なのはさん・・・訓練中もいつも僕達のこと見ててくれるんですね。」

キャラ

「本当に・・・ずっと。」

フェイトとヴィータの会話にエリオとキャラも「ずっと自分達のことを見ていてくれる」と話す。

フェイト

「そういえば、十代は？」

ヴィータ

「さあ？ また釣りでもしてんじゃねえの？」

フェイト

「もう、模擬戦見に行くって言ったのに……」

そうしている間に、模擬戦が始まった。

十代

「始まったか……」

十代はなのは達やフェイト達からは見えないビルの上から模擬戦の様子を見ていた。

ティアナを見ると、彼女の戦闘にはいつものキレの良さが無かった。しばらくするとあたりに煙が舞う。

なのは

「…レイジングハート。モードリリース。」

レイジングハート

『All Light』

十代

「ユベル、今からあいつ等を止めに行ってくる。それで、お前に頼みがある」

ユベル

「何だい？」

十代

「俺が止めに入ったら、フェイト達が止めに入るだろうから、その足止めをして欲しい」

ユベル

「やれやれ、そう来るとは思ってたけど……わかったよ」

ユベルはそう言うと、姿を消した。

なのは

「二人とも、どうしちゃったのかな……？」

なのはが小さく、そして冷たく告げる

「頑張っているのはわかるけど……模擬戦は喧嘩じゃないんだよ……」

よくみるとスバルの拳を右手で、空中に浮いているティアナを左手で支えている。

するとティアナは距離をとり、スバルの『ウイングロード』に着地する。

ティアナ

「私はっ!! もう……誰も傷つけないから……」

錯乱し、涙を流したティアナはスバルがいるのにも関わらずに砲撃『ファントムブレイザー』をなのはに放つが、なのはの放った『クロスファイアーシュート』に相殺された。

なのははスバルをバインドで捕縛すると、ティアナに砲撃魔法を発射する。

なのは

「少し、頭冷やそうか……」

なのははそう言い、砲撃をティアナに向けて発射した。

スバル

「ティアアアアアアアア！」

スバルの声が訓練場に響く。

しかし、砲撃の直撃を受け、撃墜されたはずのティアナは爆風の中から現れなかった。

なのは

「？」

スバル

「え？」

爆風の中から現れたのはティアナを抱えた十代だった。

十代

「よつと！」

十代がウインググロードの上に着地する。

なのは

「十代？なんのつもりかな？邪魔しないで欲しいんだけど……」

なのはが冷たく言い放つ。

十代

「そう言う訳にも行かなくてな……」

十代が抱えていたティアナをスバルに預ける。

スバル

「あ、あの……十代さん？」

ティアナを受け取ったスバルがいつもとは様子が違う十代に声をかける。

十代

「お前は引っ込んでろ。足手まといだ……」

十代が冷たく突き放す。

スバル

「で……でも!!」

スバルが食い下がろうとするが、

十代

「行け」

十代のいつもとは全く違う氷の様な眼差しを向けられ、スバルはフ
ェイト達のいる所へと戻っていった。

ウイングロードから近くのビルへと降り立った十代はデュエルデ
ィスクを展開させ、なのはに向き直る。

なのは

「私とやるつもり？」

十代

「そう見えないか？」

なのは

「十代でも、邪魔するなら容赦しないよ？」

なのはがレイジングハートを構える。

十代

「望む所だ!!」

今、『霸王』と『管理局のエース』の戦いが始まろうとしていた……

第7話 悲しい戦い（後書き）

難しかった……

次回は、十代VSなのはです!!

第8話 激突！十代VSなのは！！（前書き）

十代VSなのはです。

今回は長くなると思うので、分ける事にします。

色々おかしいかもしれませんが……

第8話 激突！十代VSなのは！！

スバルがティアナを抱えて戻ってきたのと同時にヴィータが十代を見て怒鳴っていた。

ヴィータ

「あの野郎！何考えてんだよ！！」

フェイト

「やっぱり、止めた方がいいよね？」

フェイトが二人を見て言う。

ヴィータ

「ああ、エリオとキャロ、スバルはここで待機、あたしとフェイトは……」

ヴィータが突然言葉を途切らせる。

フェイト

「ヴィータ？……ッ！？」

スバル&エリオ&キャロ

「「「えっ！？」」」

フォワードの3人も驚く。

フェイト達の周りには植物のツタの様なものが現れフェイト達を囲んでいた。

ヴィータ

「何だよ、これ……」

ヴィータがそう言うと同時にフェイト達の前にユベルが姿を現す。

ユベル

「君達にはここでおとなしくしてもらおうよ」

ヴィータ

「誰だ、てめえは!!」

ヴィータが怒鳴る。

ユベル

「僕はユベル。十代の中にいるデュエルモンスターの精霊と言えば、君達にもわかるかな？」

フェイト

「十代の!？」

ユベル

「そうさ、僕は十代に頼まれて君達を足止めしているのさ」

ヴィータ

「ふざけんな!!」

ヴィータがグラーフアイゼンを展開させ、ユベルを攻撃するが、

ヴィータ

「うわッ!？」

ユベルに攻撃したヴィータは跳ね返され、地面に叩き付けられた。

フェイト

「ヴィータ!！」

フェイトがヴィータを助け起こす。

ヴィータ

「お前……一体何を……」

ユベル

「僕への痛みは君のものなんだよ。僕を傷付ければ、君も僕と同じだけ傷つくのさ」

フェイト

「何を言っ……」

ユベル

「さてと、おしゃべりはあまり好きじゃないんだ。どうしても邪魔をするなら……」

キャラ

「きゃっ!？」

キャラがツタに縛られ、ユベルの腕に誘われた。

ユベル

「もし君達が十代達の邪魔をしようのならこの小娘をここで始

末するよ？」

フェイト

「キャロ！！」

フェイトがバルディッシュを展開させ、構える。

ユベル

「それとも、この小娘をその小僧達と戦わせて同士討ちさせるのも、面白いんじゃないかな？」

ユベルが狡猾な笑みを浮かべる。

フェイト

「やめて！その子達には手を出さないで！！」

フェイトが悲痛な叫びをあげる。

ユベル

「だったら、おとなしくしているんだ。全員だよ？一人でも妙な事をしたらこの小娘を殺す」

ユベルがそう言うときフェイトとヴィータはデバイスをしまった。

それを見ていたスバル達も何も言わなかった。

ユベル

「一つ聞いておくけど、君達は十代が何も考えずにあの女と戦っていると思っているのかい？」

フェイト

「え!？」

ユベル

「それを知りたければ、黙って見ているんだね」

ユベルはそう言うのと十代達の方を向いた。

それと同時にフェイト達も十代達の方を見た。

十代

「ドロー! 『融合』 発動!!」

十代が融合のカードををディスクにセットする。

十代

「手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合!! 来い! マイフェイバリットカード、E・HEROフレイム・ウイングマン!!」

十代の場にフレイム・ウイングマンが現れる。

十代

「行け! フレイム・ウイングマン! なのはに攻撃だ! フレイムシュート!!」

フレイム・ウイングマンが右手の竜の口から炎をなのはに向けて発射する。

レイジングハート

『プロテクション』

レイジングハートがオートガードで防ぐが、フレイム・ウイングマンの攻撃は並大抵の防御力では防げない。

それはシグナムとの戦いやスバルとの戦いで証明されている。

なのは

「くっ!？」

フレイム・ウイングマンの攻撃にシールドが耐えきれず、なのはが吹き飛ばされるが、なのはは吹き飛ばされる寸前にデイバインシューターを展開して、フレイム・ウイングマンに向けて発射した。

十代

「くっ!速攻魔法『融合解除』!!」

デイバインシューターがフレイム・ウイングマンに直撃する前にフレイム・ウイングマンの融合が解除され、デイバインシューターをかわす。それと同時にフェザーマンとバーストレディが現れる。しかし、誘導弾でもあるデイバインシューターは融合を解除したフェザーマンとバーストレディに向かう。

十代

「くっ!迎撃しろ!フェザーマン、バーストレディ!!」

なのはの展開させたディバインシューターの数は5つ。

フェザーマンは両翼から羽を飛ばし、5つの内、3つを消し、バーストレディも両手に一つずつ持った火球を残ったディバインシューターに投げつけ相殺させた。

十代

「フェザーマン、バーストレディ！そのまま攻撃だ！！」

フェザーマンとバーストレディがなのはに攻撃を仕掛けるが、どちらも基本攻撃力が低いため、レイジングハートのオートガードによって弾かれる。

なのは

「そんな弱い攻撃じゃ、私にダメージは与えられないよ？」

十代

「わかってるさ…俺はカードを1枚伏せる……はッ！！」

十代が気付いた時にはなのははカートリッジをロードして、ディバインバスターの発射体勢を取っていた。

なのは

「ディバインバスター！！」

なのはの発射したディバインバスターが十代達に向かって行く。

十代

「トラップ発動！『ヒーローバリア』！！俺の場にE・HEROがいる時、相手からの攻撃を一度だけ無効にする！！」

フェザーマン達の前に現れた透明の壁がディバインバスターを防ぐ。

なのは

「……」

なのはは内心驚いていた。自分が必殺と思って撃った一撃が簡単に防がれたのだ。

十代

「ドロー！ 来い！ スパークマン！！」

十代の場にスパークマンが現れる。

十代

「さらに、魔法カード『エレメンタル・ギフト』！ 自分の場のE・HERO1種類につき1枚カードをドローする。俺の場のヒーローは3体。よって3枚ドロー！」

十代がカードを3枚ドローする。

十代

「カードを1枚伏せ、装備魔法『スパークガン』をスパークマンに装備！」

スパークマンがスパークガンを装備しなのはに向ける。

十代

「スパークガン発射！！」

スパークマンがスパークガンを3発発射するが、なのははそれを全てかわした。

十代

「（スバルには通用した『スパークガン』も、なのはには効かないか……）『スパークガン』の弾丸は3発、弾丸が尽きたとき、『スパークガン』は破壊される」

スパークガンがバリ〜ンという音をたてて破壊される。

十代

「だったら攻撃だ！フェザーマン、バーストレディ、スパークマンで、攻撃……」

十代が攻撃の指示を出そうとするが、フェザーマン達は桃色のロープの様なもので縛り付けられていた。

十代

「バインドか……」

十代はリインに教えてもらった事を思い出していた。

敵を捕縛する魔法があると。

なのは

「ディバインバスター！！」

なのはが再び、ディバインバスターを動けないフェザーマン達に発射する。

その攻撃をフェザーマン達は避ける事が出来ず全てのヒーローが破壊された。

十代

「ぐああッ!!」

十代 LP 8000 - 1000 - 1200 - 1600 || 4200

十代のライフが半分近くまで削られる。

十代

「トラップ発動! 『エレメンタル・ミラージュ』!! 自分のE・HEROが破壊されたとき、破壊されたE・HEROを全て復活させる。蘇れ! 俺のヒーロー達!!」

十代の場にフェザーマン達が復活する。

十代

「(何とかヒーロー達を場に残せたが、このままじゃヤバイ……)」

ユベル

「(十代)」

突然、十代の頭にユベルの声が響く。十代とユベルは今とは別々の所にいるが、魂の融合を果たしているため短時間の会話が可能なのだ。

ユベル

「(今こそ、覇王の力を使うんだ)」

十代

「（覇王の！？）」

ユベル

「（もはやあの女に君の声は届かない。なら、圧倒的な力を見せてつけて屈服させるしかない。その力が君のデッキには眠っている）」

十代

「（ユベル……だが、それは……）」

ユベル

「（確かに君はその力で君の仲間達を傷付けた。だが……君は覇王という悪に染まってでも、あの女を……）」

十代

「（わかった……）」

ユベル

「（あの女を助けてやるんだ。あの女も君が助けた小娘も……信じているよ、十代……）」

ユベルとの会話はそこで途切れた。

それと同時に、十代は覚悟を決めていた。

十代

「なのは」

なのは

「！？」

十代の突然の呼びかけになのはが動きを止める。

十代

「今の俺では、お前の心に声を届ける事ができない……なら、俺は悪に身を堕としてでも、お前をお前自身の闇から引きずり出す!!」

なのは

「な、何を……」

さっきまでの十代とは違う感じになのはは狼狽していた。

それはなのはだけでは無かった。

十代達の戦いをモニターで見ていたフェイト達も十代の様子を見て驚いていた。

フェイト

「十代の様子が……変わった!?!」

エリオ

「僕、あんな十代さん初めて見ます……」

キャロ

「いつもの十代さんじゃ……ない!?!」

そして、なのはもフェイト達も十代の瞳の色が金色に変わっているのに気付いた。それと同時にその瞳に恐怖の念を抱いていた。

十代

「ドロー。なのは、お前を闇から引きずり出すために俺は霸王になる。そして、俺が悪に染まるのなら、俺のヒーロー達も闇に染まる！！行くぞ！魔法カード『ダーク・フュージョン』を発動！！」

第8話 激突！十代VSなのは！！（後書き）

次回、イービルヒーローが登場します！！

お楽しみに！！

第9話 決着！超融合発動！！（前書き）

なのは戦、決着です！！

第9話 決着！超融合発動！！

十代

「『ダーク・フュージョン』の効果により、場のフェザーマンとバーストレディをダーク・フュージョン！！」

フェザーマンとバーストレディが場に現れた黒い渦に吸収され、消える。

十代

「出ですよ！『E—HERO インフェルノ・ウイング』！！」

十代の場にインフェルノ・ウイングが召喚される。

しかし、フレイム・ウイングマンとは違い、女性の体をしたヒーローだった。

また、今まで十代が使っていたヒーローとは違い、ダークで邪悪なイメージがあった。

フェイト

「インフェルノ・ウイング！？フレイム・ウイングマンじゃない！？」

ヴィータ

「あのダーク・フュージョンって奴で召喚された召喚獣、嫌な感じがするな……」

エリオ

「あつ、それ僕も感じました!」

フェイト達の会話にエリオも加わる。

キャロ

「何か、今まで十代さんが使っていた召喚獣とは違って邪悪な感じがします……」

未だにユベルに縛られたままのキャロが言う。

ユベル

「あのモンスターは『E－HERO』。十代の『E・HERO』同士が融合する事で邪悪なヒーローが誕生する。だが、その力は強力だが、その邪悪な力を支配できるほどの力が無ければ使いこなすのは難しい……」

ヴィータ

「つて事は……」

フェイト

「十代はその邪悪な力を使っても、なのはに挑むってこと!？」

ユベル

「さあね……」

ユベルはそれきり口を開かなかった。それは、フェイト達にこの戦

いを黙って見ているという意思表示だった。

十代

「インフェルノ・ウイングで攻撃」

インフェルノウイングが飛び上がり、両手で青白い火球を作り、なのはに投げつけようとする。

なのは

「……ッ!？」

なのはがインフェルノ・ウイングをバインドで捕縛しようとするが……

なのは

「え!？」

バインドはインフェルノ・ウイングを捕縛する事は無く消えた。

十代

「『ダーク・フュージョン』で召喚されたモンスターは、このターン魔法、罠、モンスターの効果の対象にはならない」

十代が静かに告げる。

十代

「つまり、俺が次にカードをドロ―する時が来るまで、インフェルノ・ウイングにバインドなどの捕縛魔法は無効となる」

バインドを無力化したインフェルノ・ウイングは青白い火球をなのはに投げつけた。

十代

「『インフェルノ・ブラスト』!!」

なのは

「くっ!？」

なのはがレイジングハートのオートガードを使い、インフェルノ・ウイングの攻撃を防御するが……

なのは

「なに？」

オートガードを突き破った微量の炎がなのはのバリアジャケットを少しだけ燃やした。

なのは

「くっ!それでも!!」

すぐに十代から距離を取ったなのは、ディバインバスターの発射体勢を取った。

なのは

「ディバインバスター!!」

レイジングハートの先端から極太の魔力砲が発射される。

インフェルノウイングが両腕と背中の両翼で防御するが、ディバインバスターの威力に負けて爆散する。

十代

「ぐっ!？」

十代 LP 4200—2100∥2100

なのは

「まだやるつもり?それとも、負けを認める?どっちにしても、私は十代を叩きのめすけど」

十代

「……」

十代が無言でカードをドロースする。

なのは

「そう……あくまで私とやるつもりなんだね?」

なのはがレイジングハートを構える。

十代

「場のスパークマンを生け贄に捧げ、E—HERO マリシャス・エッジ召喚!!マリシャス・エッジは、レベル7だが、相手の場にモンスターがいる時、生け贄を一体減らす事が出来る」

スパークマンが消え、藍色のボンテージ服に身を包んだヒーローが

現れる、先程のインフェルノ・ウイングと同じようにダークで邪悪な印象がある。

十代

「マリシヤス・エッジの攻撃。『ニードルバースト』!!」

マリシヤス・エッジが両手に装備された針をなのはに向けて発射する。

なのは

「そんな攻撃じゃ、私には届かないよ!!」

なのはが右手で防御壁を展開させ、マリシヤス・エッジの攻撃を防ぐが……

なのは

「痛ッ!?!」

先程のインフェルノ・ウイングと同じようにマリシヤス・エッジの針がなのはの防御を貫通して、なのはの左腕を抉った。

十代

「マリシヤス・エッジは、守備を貫通して、ダメージを与える」

なのは

「さっきの召喚獣も……」

十代

「ああ。インフェルノ・ウイングも、守備を貫通する効果がある。カードを2枚伏せる」

なのはは距離を取ったまま、攻撃に移った。距離を取って戦えば、霸王十代の攻撃も届かないと考えたのだ。

なのはは、カートリッジをロードし、再びデイベインバスターの発射体勢を取る。

十代

「ドロー！マリシヤス・エッジに装備魔法『ヴィシヤス・クロー』を装備！」

マリシヤス・エッジの右手に装備された針が黒いオーラを纏う。

十代

「マリシヤス・エッジで攻撃！！」

マリシヤス・エッジがなのはに攻撃すべく上空に飛び上がるが、その直後に、マリシヤス・エッジなのはのバインドをともに受けてしまった。

十代

「何……」

なのは

「今度こそ、十代、頭冷やそう……」

なのはが冷たく言うと同時にデイベインバスターを発射する。

発射されたデイベインバスターは身動きの取れないマリシヤス・エッジに直撃する。

訓練場の上空に桃色の爆風が起きる。

ヴィータ

「終わったか……」

ヴィータが呟く。

フェイト

「十代……」

エリオ

「そんな……」

キャロ

「十代さん……」

フェイト達が口々にそう呟くが、ユベルだけは彼女達とは違う事を言った。

ユベル

「まだだ。よく見ろ……」

ユベルがモニターを指差す。

一同

「「「え!?!」」」」

なのは

「どうして?」

なのはが口を開く。

なのは

「どうして、十代はまだ立ってるのかな……」

十代

「『ヴィシャス・クロー』は装備モンスターが破壊される時、このカードを手札に戻す事で装備モンスターを破壊から守る事が出来る」

自分の攻撃を何度受けても倒れない十代を見て、なのはの心は折れそうになる。

しかし、ここまで来た以上、十代を倒すしか無いのだ。自分の過去と同じ様な事をもう誰にも体験させないために。

なのは

「（ディバインバスターが効かない……私の残り魔力はかなり少ないけど……私の今持てる全ての魔力を注いだディバインバスターで……）」

十代

「『ヴィシヤス・クロー』の効果で相手の場に、イービルトークンを特殊召喚する」

なのは

「え!?!」

なのはの目の前にイービルトークンが現れる。

なのは

「どういふつもり!?! こんな事しても私には……」

十代

「次の一撃で終わらせる」

なのは

「……!?!」

それを聞いたなのはは覚悟を決め、レイジングハートを構えた。

なのは

「行くよ……十代!!」

なのはがディバインバスターの発射体勢に入り、自分の今持てる魔力全てを注ぎ込む。

十代

「その攻撃は通用しない! 速攻魔法『超融合』!?!」

十代となのはの上空に巨大な雷雲が現れる。

十代

「手札1枚を捨てる事で、場のモンスター2体を融合させる!!」「ヴィシヤス・クロー」を墓地に送り、マリシヤス・エッジとイービルトークンを融合!!」

マリシヤス・エッジとイービルトークンが雷雲に吸い込まれる。

十代

「現れる!『EーHEROマリシヤス・デビル』!!」

十代の場にマリシヤスエッジよりも凶悪な姿になった最凶のEーHEROマリシヤス・デビルが姿を現わす。

なのは

「デイバイイイイイー!」

十代

「碎け!『エッジ・ストリーム』!!」

なのはがデイバインバスターを発射する直前にマリシヤス・デビルが両腕に装備された巨大な針を発射する。

なのは

「バスター!!!!!!」

レイジングハートの先端から巨大な魔力砲が発射され、マリシヤス・デビルの発射した針と激突する。

訓練場に巨大な爆発が起こった。

なのは

「きゃああああっ!!!」

その爆発に巻き込まれたのはが吹っ飛ぶ。

十代

「ぐあああッ!!!」

十代もその爆発に巻き込まれまいと必死に堪えていた。

マリシヤス・デビル

「(十代!!!)」

爆風の中でマリシヤス・デビルが十代に語りかける。

十代

「(マリシヤス・デビル!?)」

マリシヤス・デビル

「(俺様を生け贄にしてネオスを呼べ!)」

十代

「(何を!?)」

マリシヤス・デビル

「(俺様に同じ事を2度言わせるな! お前の場に伏せられた最後の砦を使えと言っている!!!)」

十代

「(最後の砦!?! そうか!)」

十代は自分の場に伏せられた最後の伏せカードを見る。

マリシヤス・デビル

「（お前がそれを使うまでに、俺様が吹き飛ばされたあの女を連れ戻す！！）」

マリシヤス・デビルが吹き飛ばされたのはを抱きかかえるようにして助ける。

なのは

「……！？」

意識が朦朧としているのか、なのは何がどうなっているのか理解できていないようだった。

マリシヤス・デビル

「（十代！！）」

マリシヤス・デビルが十代に呼びかける。

十代

「（ああ！）トラップ発動！『ヒーロー・フォーメーションチェンジ』！！俺の場の『HERO』と名の付いたモンスターを生け贄に、デッキから生け贄にしたモンスターよりもレベルの低いヒーローを特殊召喚する！！マリシヤス・デビルを生け贄に、現れろ！E・HEROネオス！！」

マリシヤス・デビルが消え、十代の場にネオスが召喚される。

十代

「ここは!？」

なのは

「どこなの？」

意識を取り戻したなのはが周りを見る。

そこには、十代となのは以外の人は存在せず、周りは真っ白だった。

ネオス

「どうやら、十代となのはの魂が交差する場所なのだろうな」

と、ネオスが言う。

十代

「魂？」

なのは

「じゃあ、ここにいるのは私と十代だけってこと？」

ネオス

「そういうことになる。だが、十代になのは。君達は互いに話さなければならぬ事があるんじゃないのか？ここにいられる時間はそう長くない。話すべき事だけを話すんだ」

ネオスはそう言うと言えてしまった。

なのは

「十代はどうして、私達の訓練に割り込んで来たの？」

なのはが一番気になっていた事を聞く。

十代

「俺は、お前がどうしてティアナにあんな事をしたのかが知りたかった。ただ、力の差を見せつけるだけなら、やりかたはいくらでもある」

なのは

「……」

十代

「それで思ったんだ。お前は、なのはは心の中に過去の悲しみや辛さを抱え込んでるんじゃないかって……そして、過去の辛い事と同じ道をティアナが辿ろうとしているから、それで力づくで止めたんじゃないかって……」

なのはにとって、十代の言っている事は凶星だった。

十代

「でも確信が持てなかったから俺はお前に戦いを挑んだ。デュエル

を通してお前の心を感じようと思ったんだ」

なのは

「だから……」

十代

「まあ、こんな事になっちまったけどな……」

十代が笑う。

なのは

「戻ったら、十代の事、私達に教えてくれる？」

十代

「ああ、でもその代わり、お前の過去に何があったのか、教えてもらうぜ？」

なのは

「うん。約束だよ？」

そして爆風が消えた訓練場のビルの屋上には、気を失ったなのはをお姫様だっこした十代が立っていた。

第9話 決着！超融合発動！！（後書き）

（補足）

この話の最後に、十代となのはが会話していたのを映像にすると、十代と明日香のペアデュエルでVS剣山&レイ戦の時に十代と明日香が会話をして、十代が3年間を振り返っているときの様な感じですよ。

第10話 和解と過去 (前書き)

過去編は長くなると思うので分けます。

第10話 和解と過去

なのはを医務室に運んだ十代は宿舎の屋上にいた。

十代

「そろそろ、話すべきかな……」

十代が小さく呟く。

十代はホテル・アグスタの事件から数日後、スカリエッティが送り込んで来た人工生命体が最後に残っていたディスクをはやてと共に見た。

十代

「つつても、内容からして話しにくいよなあ……」

十代が頭を抱える。

ユベル

「話せばいいじゃないか」

突然表に出て来たユベルが言う。

十代

「他人事のように言ってるけど、お前の事もだからな？」

ユベル

「それがどうしたって言うんだい？ 今更一人や二人に知られたとしても、僕は構わないけどね」

十代

「お前なら、そう言うと思ったけどな……」

ユベル

「それに、あの女には自分の過去を話すと言ったんだろう？」

十代

「……」

十代達が話していると突然アラートが鳴り響いた。

十代はヘリポートでなのは達と合流した。

何やら揉めていたようで、場は重い空気に支配されていた。

誰もがこの空気を何とかしたいと思っている中、突然、ユベルが表に出た。

ユベル

「まったく、どいつもこいつも不器用すぎて見ていられないね……」

突然現れたユベルを見た一同は驚いた。

ヴィータ

「てめえは!？」

ユベルは殺気立っているヴィータを無視してモニターの方を向いた。

ユベル

「君達に関わりあうつもりは無いけど、まずはあの目障りなゴミを掃除するのが先なんじゃないかな？」

ユベルがモニターに映っている新型ガジェットを指差す。

十代

「ああ。まずは、あいつ等を片付けないとな……」

十代がへりに乗り込もうとするが、

十代

「ぐっ!？」

表情を歪め、うずくまってしまう。

フェイト

「十代!？」

うずくまった十代を見たフェイトが十代に駆け寄った。

ユベル

「管理局のエースとの戦いは相当キツかったみたいだね。少しは休んだらどうだい？」

ユベルが腕組みをして十代を見下ろす。

十代

「だけど……」

フェイト

「いいから十代は休んでで、ガジェットの方は私達が何とかするから……」

起き上がろうとする十代をフェイトが止める。

ヴィータ

「まあ、あれぐらいなら何とかなるだろ」

なのは

「じゃあ、フォワードのみんなは、待機、ガジェットは……」

ユベル

「待った」

なのはの指示をユベルが遮った。

なのは

「え!?!」

ユベル

「ここは僕が行くよ。あれぐらいのおもちゃならすぐに片付けられる」

十代

「ユベル……」

うずくまっていた十代が顔を上げ、ユベルを見る。

ユベル

「ここからあそこまで飛んでいけば、十分くらいで着くだろうね。僕の戦いをしっかりと目に焼き付けるといいさ」

ユベルはそう言うのと背中 of 翼を広げた。

はやて

「何やて!?! 十代の精霊が単独でガジェットを!?!」

部隊長室でなのはとフェイトの報告を聞いたはやてが驚いた。

なのは

「何か……止める間もなくっていうか……」

フェイト

「十代は任せておけば大丈夫だって言うし……」

フェイトが部隊長室のソファに座っている十代を見る。

十代

「ユベルは強い。あいつに任せておけばすぐに終わる」

十代の言葉を聞いたはやてはユベルとガジェットの姿が映し出されたモニターを見る。

ロビーでもフォワードのメンバーとヴィータ、シグナム、シャリーがモニターを見ていた。

ユベル

「随分多いけど……」

ユベルの左腕がデュエルディスクのような形になる。

ユベル

「すぐに片付ける」

ユベル LP8000

ユベル

「ドロー、魔法カード『ゼロ・サモン』発動！この効果により、ライフを1000払い、手札から攻撃力0のモンスター一体を特殊召喚する。僕は手札から僕自身『ユベル』を召喚！！」

ユベルの体からもう一体のユベルが分離して場に現れる。

フェイト

「ユベルがもう一体！？」

戦闘の様子を見ていた十代以外全員が驚く。

ユベル

「さらに僕は『スナイプ・ストーカー』を通常召喚！！」

ユベルの場にルーレットの付いた銃を持った黒い悪魔が現れる。

ユベル

「スナイプストーカーの効果発動。手札を1枚捨て、場のカードを1枚選択する。サイコロを一回振り、1か6以外の目が出た時、選択したカードを破壊する。僕は『ユベル』を選択する！！」

はやて

「自分の召喚獣を破壊って……そんな……！？」

十代

「いや、これでいい……」

十代が静かに言う。

なのは

「これでいいって……自分の召喚獣を破壊するのには何か理由があるってこと？」

なのはが十代に聞く。

十代は小さく頷いた。

ユベル

「僕は手札の『サクリファイス・ロータス』を捨て、スナイプ・ストーカーの効果を発動!!」

場にサイコロが現れ、数回転がる。

ユベル

「出た目は3だ。よってユベルは破壊される」

スナイプストーカーが場にいるユベルに銃を向けて発射する。

そしてユベルが破壊され、爆発する。

ヴィータ

「あいつは何やってんだよ!? ふざけんのか!？」

ロビーでユベルの戦闘を見ていたヴィータが声を荒げた。

シグナム

「だが、自らから召喚獣を破壊するのには、何か訳があるのかもしれない」

シグナムが自分の考えを言う。

ヴィータ

「何だよ、訳って……」

シグナム

「さあな」

シグナムはそう言って再びモニターに目を向けた。

ユベル

「場の『ユベル』が破壊された時、手札、デッキ、墓地から『ユベル—Das Abscheulich Ritter』一体を特殊召喚する！！」

ユベルが破壊された際の爆発が収まると、そこには禍々しい黒い双頭の竜が姿を現した。

はやて

「この召喚獣は！？」

十代

「『ユベル—Das Abscheulich Ritter』。簡単に言えば、ユベルの第二形態だ」

なのは

「第二形態？」

なのはが聞く。

十代

「ユベルは戦闘では破壊されず、自分の受けた攻撃をそのまま相手に返すという効果を持っている」

フェイト

「昼の模擬戦の時、ヴィータがユベルに攻撃したら、そのまま弾き返されたけど……」

十代

「それがユベルの持つ力だ。だけど、ユベルには更なる姿がある」

はやて

「その姿が……」

はやてがモニターのユベルを見る。

ユベルーDas Abscheulich Ritter（以下、ユベル第二形態）を確認したガジェットはユベル第二形態に攻撃を開始するが、その攻撃はユベル第二形態には届かず、攻撃したガジェットは自らの攻撃を受け、破壊された。

ユベル

「僕を戦闘で破壊する事は出来ない。だって攻撃は僕への愛。僕を傷付ければ、僕を傷付けた分だけ君達も傷付くんのだ」

残りのガジェットはユベルには攻撃せずに、上空で停止した。

ユベル

「攻撃しなければ、傷付かないと思っているのか。さすがはあのヤブ博士の作った兵器だ。せこい所が制作者そっくりだ」

ユベルが口元を歪める。

ユベル

「でも、このタイミングで、ユベル―Das Abscheulich Rittlerの効果が発動。僕以外のモンスターを全て破壊する」

ユベルの場のスナイプストーカー、残りのガジェットが全て爆発し、粉々になる。

はやて

「圧倒的や……」

はやてが呟いた。

ロビーで戦闘を見ていた一同も、ユベルの圧倒的な力を前に言葉が出なかった。

ユベル

「つまらなかったな。もっと骨のある戦いを期待してたんだけど……」

六課に帰還したユベルが言う。

十代

「相変わらず、えげつない戦い方だな」

少しは回復した十代が帰還したユベルに言う。

ユベル

「君の馬鹿正直なデュエルよりマシだよ」

十代

「ちえ、言ってくれるぜ」

二人は短い言葉を交わし、六課の宿舎の中に入って行った。

なのははかつて無茶なトレーニングなどにより疲労が溜まっているにも関わらず出撃した。

それにより任務中に大怪我を負い、一時は再起不能と言われていた。かつての自分のようにさせたくない。

それで基礎を中心とした無茶をしない訓練をしていた。

その話を終えたのち、ティアナはなのはに謝罪し、なのははクロスミラージュの新たなモード、『ダガーモード』を見せて、謝罪した。

十代もなのはの過去をフェイトとはやてから聞いたのだった。

そして、部隊長室には十代、ユベル、達隊長陣、フォワード陣とシヤーリーとリインが集まっていた。

六課のメンバーは十代の3年間の事を若干知っていた。

1年生の時にセブンスターズや三幻魔の脅威と戦った事。

2年生の時に光の結社、破滅の光と戦った事。

3年生の時には、ダークネスと戦い勝利した事などだ。

十代

「俺はこの前行ったアグスタで、スカリエッティの送り込んで来た人工生命体と戦い、このディスクを拾ったんだ。」

十代が人工生命体の残していったディスクをテーブルに置く。

十代

「記録されているのは、俺の3年間の事と、ユベル関連のことだ。何であいつがこんな物を持ってるのかは知らないけどな」

六課メンバーは十代の言葉を黙って聞いていた。

十代

「映像はシャーリーが解析してくれて、いつでも見られる様になってる。シャーリー」

シャーリー

「あっ、はい！」

シャーリーがモニターを操作すると、全員の目の前に巨大なモニターが現れた。

そこには今より若い十代がデュエルアカデミアでデュエルしている映像が映し出されていた。

なのは

「これが、デュエルアカデミアにいた十代？」

フェイト

「何か、今よりも若いね」

十代

「まあな。でもそんな俺を異世界での出来事を変えた」

はやて

「異世界？」

はやてが聞き返す。

十代

「ああ、今から全部話すぜ。異世界での出来事とユベルの事をな」

第10話 和解と過去 (後書き)

次回は、十代の3年間の学園生活の中で一番辛かった異世界編の話です。

第11話 十代の過去 〽覇王覚醒〽 (前書き)

過去編長え……

後、三回は続くかも……

第11話 十代の過去 〔霸王覚醒〕

十代

「異世界の事を話す前に、まずはユベルの事を話しておいた方がいいな」

十代はそう言うのと腰のデッキケースからユベルのカードを取り出し、テーブルの上に置く。

なのは

「これが、ユベルのカード？」

六課メンバーの視線がユベルのカードに集まる。

十代

「ユベルは俺が小さい頃に使っていたデッキのフェイバリットカードだったんだ」

ユベル

「だが、十代を泣かせたという理由で対戦者を平気で意識不明の重症に陥らせるなどの事をした。気味悪がった十代の知人達は十代を仲間はずれにして、十代は孤独な少年時代を送っていたんだ」

十代

「その時の俺はユベルには邪悪な力が宿っているから、ユベルのカードをカプセルに入れて宇宙に飛ばしたんだ」

フェイト

「どうして、そんな事を？」

フェイトが質問する。

質問された十代はデッキケースからもう1枚カードを取り出し、ユベルの横に置いた。

はやて

「これは？」

十代

「こいつは『E・HERO ネオス』俺のデッキのエースカードだ。ユベルはこのカードと一緒に宇宙に飛ばされたんだ」

なのは

「どういう事？」

なのはを始め、六課メンバーは首を傾げている。

ユベル

「当時、海馬コーポレーションでは、宇宙の波動を取り込んで素晴らしいカードを作るっていう計画があったんだ」

その説明を十代が引き継ぐ。

十代

「その時海馬コーポレーションは子供達からカードデザインを募集したんだ。そして、俺のデザインしたネオスが採用されて、宇宙へと飛ばされた」

フェイト

「ユベルのカードと一緒に？」

フェイトの言葉に十代とユベルが頷く。

十代

「実際にネオスは正義の闇の波動を受けて、今のカードになったんだ。ネオスのカードには精霊が宿ってるし、俺もネオスと一緒にたくさんの敵を倒してきた」

ウィータ

「じゃあ、ユベルのカードはどうなったんだよ？」

ユベル

「十代は僕を宇宙に飛ばす時にこう願ったんだ。邪悪な力を取り払い、正義の闇の波動を受けて清くなって欲しいと」

はやて

「それで？」

ユベル

「だが、僕は破滅の光の波動を受けて、邪悪な力を取り込んでしまい、カードを入れたカプセルは燃え尽きてしまった」

十代

「そして、俺は両親の手によって、ユベルに関する全ての記憶を消される事になった」

十代がシャーリーに目で合図をすると、シャーリーが映像を切り替えた。

十代

「俺達はユベルの手によって、異世界へと飛ばされた」

モニターには、異世界の砂漠で十代達がデュエルゾンビと戦っている映像が映っていた。

フェイト

「ちょっと待って！ユベルのカードは燃え尽きちゃったんじゃないの？」

ユベル

「そうさ。だから僕は、様々な人間を使って僕の体を修復させた」

十代

「そして、異世界で俺はユベルと再会した」

映像が変わり、三幻魔を操るユベルと十代がデュエルをしている映像になった。

ユベル

「僕は後一步という所まで十代を追い詰めた」

十代

「だが、そこにヨハンが助けに来てくれたんだ」

映像にはヨハンが十代と合流する所が映っていた。

十代

『ヨハン、お前がここに来たって事は……』

ヨハン

『ああ、遂に来たぜ、レインボードラゴンのカードがな』

そして、映像が進み、レインボードラゴンと三幻魔の融合体混沌幻魔アーミタイルがぶつかり合い、激しい閃光が十代達を包み込んでいた。

なのは

「それで、十代達はどうなったの？」

十代

「俺達は元の世界に戻る事が出来た。けど、ヨハンは戻って来なかった」

シグナム

「自分の身を犠牲に遊城達を元の世界に戻したという事か……」

十代

「ああ。そして、俺は再び仲間達と共に、異世界へと旅立った」

はやて

「ヨハンって子連れ戻すためにやな？」

十代が頷く。

十代

「だが、俺達が行ったのは、あの砂漠の異世界じゃなかった。それでも、俺はヨハンを探し求めて、仲間達と異世界を彷徨い続けた」

エリオ

「それで、ヨハンさんは見つかったんですか？」

エリオの言葉に十代は首を横に振る。

十代

「ヨハンは見つからず、しかも、そこでのデュエルは命がけのデュエルだ。負けた方は消滅してしまう」

スバル

「そんな危ない戦いを十代さん達はやってたんですか!？」

六課メンバー全員が驚いていた。

十代

「そして、ヨハンが見つける事の出来ない俺は、次第に焦り始め、いつしか仲間達の事を考えずに突っ走っていたんだ」

映像が再生され、闘技場で十代とブロンがデュエルをしている場面が映し出される。

映像が進むに連れて、六課メンバー達はある事に気付いた。

なのは

「あそこに、十代の仲間達が……」

闘技場の高台に、万丈目、剣山、明日香、吹雪が捕らえられているのが映っていた。

十代

『万丈目く!!! すぐに助けてやるからなく!!!』

映像の十代が万丈目に呼びかけるが、

万丈目

『十代の馬鹿野郎!!』

十代

『え!?!』

万丈目

『お前、俺達と一緒にヨハンを探すんじゃないのかよ!!』

十代

『あ!?!』

万丈目

『勝手に一人で燃えやがって……お前、最初から俺達の事なんか、考えちゃいなかったんだろう!!』

十代

『違う!それは……』

万丈目

『お前はそう言う奴だ!お前の大国には、最初からお前しかいなかったんだ!!そんなお前に、友情何ぞを感じて……一緒にやる気になっちまった俺達の方が、馬鹿だったんだッ!!』

そして、突然万丈目が苦しみだし、光となって消えてしまった。

なのは達、六課メンバーはそれを見て驚いた。

なのは達隊長陣達は映像から顔を背け、フォワードメンバーはエリオを除き、両手で口を押さえていた。

なのは

「どうして、万丈目君は消えちゃったの!?!」

沈黙の中なのはが小さな声で聞いたが、十代は答えようとしなかった。

ユベル

「対戦相手のブロンが使った『邪心教典』の効果によって、ブロンがダメージを受ける度に『怒』、『憎』、『苦』、『悲』、『疑』の文字のカードが『邪心教典』に吸収される。『超融合』のカードを完成させるために十代の仲間を生け贄にするために……」

ユベルが説明をしているうちに映像が進む。

ブロン

『トラップ発動! 『ダークネス・ハーフ』! !』

十代

『何だ!?!』

ブロン

『『ダークネス・ハーフ』は自分の場のモンスター一体の攻撃力を半分にし、ダークトークン2体を相手の場に特殊召喚する』

十代

「何のつもりだ!?! こんな事をして俺は……攻撃をするつもりは

無いと言ったはずだ……』

ブロン

『だがそうはいかない。貴様の意志とは関係なく、モンスター達は戦い始めるのだ。トラップカード『暗黒武闘会』発動!!』

それと同時に、映像に映っている十代の場のフェザーマン達が攻撃態勢に入る。

十代

『フェザーマン!?!』

ブロン

『『暗黒武闘会』が発動した今、モンスターは全て戦わねばならない。最も、このカードが発動したターンには、戦闘でモンスターは破壊され無いがな……』

剣山

『やめるドン!!』

明日香

『助けて!!』

吹雪

『十代君!!』

剣山達が悲痛な叫びをあげる。

十代

『やめろ……やめてくれ……フェザーマン……』

そして、フェザーマンがブロンの中のズールに攻撃をする。

それに続いて、ダークトークン2体も攻撃に参加する。

十代

『よせ!!』

フェザーマン達の攻撃は全てズールにヒットした。

ブロン

『十代、お前の攻撃に連動して、永続魔法『邪心教典』の効果が発動するのだ!!』

ブロンのデッキから『憎』、『苦』、『悲』のカードが射出され、消える。

十代

『ああ!?!』

そして、剣山達が叫び声をあげる。

剣山

『兄貴! どうして俺達を犠牲にしてまで、フリードの仲間を助けたかったドン!?!』

十代

『違う! そうじゃないんだ剣山!!!』

吹雪

『苦しい……肉体の痛みだけじゃない……友に裏切られ、魂が引き裂かれる思いだ!!』

十代

『吹雪さん……』

明日香

『あなたに裏切られ、葬られる……こんな悲しみを抱く事になるなんて……』

十代

『明日香……』

そして、3人も、さっきの万丈目の様に光となって消えてしまう。

六課メンバーのほとんどは大粒の涙を流していた。

そして、さらに映像が進む。

暗黒会の魔神レインが十代を追い詰めていた。

ブロン

『まだやる気力があるというのか?』

ブロンが狡猾な笑みを浮かべながら言う。

十代

『万丈目、剣山、吹雪さん、明日香……みんなの受けた苦しみは、こんなもんじゃ無かった……みんなの命を犠牲にして生まれた魔物など……生かしておくかぁ……!!』

そして、映像の十代の瞳の色が金色に変わる。

なのは

「あれって……」

その瞳を見た事のあるのはが声を上げた。

十代

『魔神レイン……お前の所為で俺の仲間……！！友達……！！
絶対許さねえ……！！！』

映像の十代が叫ぶ。

そして映像が進み、ネオスとレインが相打ちする場面が映し出される。

十代

『速攻魔法発動！！『鎮魂の決闘』！！バトルフェイズ中に破壊されたモンスターをお互い特殊召喚できる！！俺はネオスだ！！お前もレインを召喚しろ！！』

映像の十代がさらに叫んだ。

ブロンが一步引いた。

十代

『レイン！！暗黒界の魔神レインは何度倒しても、俺の怒りは収まらない！！ぶっ倒しても！ぶっ倒しても！！ぶっ倒しても！！俺の仲間達はもう……蘇らないんだ！！』

ブロン

『……』

十代

『どうした！早くしろ！！』

ブロン

『む、無理だ……『暗黒界へ続く結界通路』を使用したターン、モンスターを召喚する事は出来ない……』

十代

『召喚しないのなら……行くぞ！！』

ブロンはネオスの攻撃によって、ブロンは敗北し、消えた。

六課メンバー達は映像の十代を見て複雑な感情を抱いていた。

なのは

「（どうして十代は……十代だけ……こんな経験をしなきゃいけないの？）」

フェイト

「（十代は……私達の過去よりも辛くて残酷な経験をしてる……）
はやて

「（でも、十代の過去を知ってしまった私達は……どうすればいいんや……）」

しかし、そんな六課メンバー達に追い打ちをかける様な言葉をユベ

ルが言った。

ユベル

「まさか、これで終わりだなんて思っていないよね？ 本当の戦いはここからだよ？」

スバル

「そんな！？」

ティアナ

「まだ、あるっていうの！？」

十代

「……エリオとキャラは、席を外した方がいいかもれないな……辛いなら、出て行ってもいいんだぜ？」

十代がエリオ達に声をかける。

キャラ

「いえ、十代さんは……私達の仲間ですから……」

キャラが鼻声で言う。

エリオ

「僕も……最後まで聞きます……」

エリオが右腕で両目の涙を拭いながら言う。

十代

「そうか……無理はするなよ？」

十代は短く言った。

なのは

「私達は最後まで聞くよ？辛くなって、また泣いちゃうかもしれないけど……」

フェイト

「うん、私も最後まで聞く。だから、続けて？」

フェイト達の言われ、十代は話す決意をする。

十代

「わかった、話すぜ……この後の事、それと『霸王』の事を……」

第11話 十代の過去 〱覇王覚醒〱（後書き）

ほとんどの場面を、原作から引っ張って来てしまった……

十代達の言葉で言った方が良かったんだろうか……

第12話 十代の過去 〱覇王消滅〱(前書き)

過去編第二弾です!!

過去編は次回で終わりにしたいなと思っています。

第12話 十代の過去 〈霸王消滅〉

十代

「ブロンとの戦いの後、俺は超融合のカードを拾って、霸王の声を聞いたんだ」

なのは

「霸王って昼間十代の目が金色になった時のあれ？」

なのはの言葉に十代が頷く。

十代

「霸王は俺に言ったんだ。『悪を倒すためなら悪にでもなれ。この弱肉強食の世界を力によって支配しろ』って……」

フェイト

「力って？」

十代

「超融合のカードの事だ」

十代が超融合のカードをテーブルに置いた。

はやて

「これが、さっきの映像に映ってた奴が完成させようとしたカード？」

十代

「ああ」

シグナム

「そもそも、霸王とは一体なんだ？お前の事を操ろうとした敵の一種か？」

シグナムの問いに十代は首を横に振る。

十代

「霸王は、俺の心の闇が創り出してしまった、俺の心の奥底に眠っていた第二人格の事なんだ」

十代はさらに続ける。

十代

「霸王は、俺に超融合のカードを使って、異世界を力によって支配しろと語りかけてきた」

フェイト

「でも、そのカードは映像で見たときは真っ白なカードだったよ？完成させるとかって言ってたけど、十代が完成させたの？」

十代

「ああ。正確には、俺の心と体を支配した霸王が完成させた」

なのは

「どういう事！？」

十代

「異世界には、たくさんの精霊達がいる。その精霊達を殺して、その魂を超融合のカードに吸収させる事で、超融合を完成させたんだ」

スバル

「それって、間接的に十代さんがその精霊達を殺したって事になるんじゃないですか!？」

十代

「ああ。覇王に支配された俺は精霊達の魂を吸収させて超融合のカードを完成させた……」

キャロ

「その後は、どうなったんですか？」

十代

「俺の事を助けに来たジムとオブライエンって奴が俺の事を探しに来てくれたんだ」

十代がシャーリーに合図をすると、シャーリーが映像を再生する。

ジム

『覇王! ! I'm coming back ! ! 俺とデュエルを
! !』

映像ではジムがデュエルディスクを構えており、ジムの目の前には五人の側近が立っていた。

そして突然、覇王城の扉が開いた。

扉の奥から出て来たのは黒い鎧に身を包んだ十代だった。

なのは

「あれが、十代!？」

フェイト

「これが……!？」

はやて

「信じられへんけど、これが……」

スバル

「十代さんとは思えません……」

ティアナ

「でも、この十代さんは……」

キャロ

「すごく……怖いです……」

覇王を見たなのは隊長陣は覇王のプレッシャーに絶句し、フォワード陣は覇王を見て怯えていた。

モニターには覇王がジムを『インフェルノ・ウイング』、『マリシヤス・エッジ』で痛めつけている映像が映っていた。

だが、ジムは『地球巨人ガイアプレート』を召喚し、覇王を後一歩という所まで追い詰めてた。

ジム

『今だ!!! 戻って来い!!! マイフレンド!!!』

ジムがそう呼びかけるが、覇王はデュエルを続けた。

霸王

『手札を1枚墓地に送り……見せてやろう。心の闇が創り出した最強の力の象徴を!!絶対無敵!!究極の力を解き放て!!発動せよ!!超融合!!』

霸王が遂に超融合を発動させる。

霸王

『超融合を用いれば、自分フィールド上のモンスターと、フィールド上のあらゆるカードを融合する事が出来る』

ジム

『それじゃあ、防ぎ様が無い!なんてカードなんだ……!?!?』

霸王

『その通り。超融合をカウンターする事は出来ない。完全なる勝利を導く絶対的な力!その力の前にはあらゆる物は無力!!』

ヘルゲイナーとガイアプレートが黒い渦の無効に消える。

霸王

『出でよ!E-HERO　　ダーク・ガイア!!』

そして、ダーク・ガイアの攻撃で、ジムは敗北し、光となって消えた。

なのは

「十代は、どうやって霸王の呪縛から解放されたの?」

十代

「この後、オブライエンが俺の事を自らを犠牲にして、助けてくれたんだ」

映像が覇王城で覇王とオブライエンが向かい合っている映像に切り替わった。

覇王

『お前か。よくここまで無事に来られたな』

オブライエン

『出陣直前にまさか、本丸が襲われるとは思っていなかったようだな。……今なら誰にも邪魔されない』

覇王

『俺から逃げ出したお前に、立ち向かう勇氣があるというのか？』

オブライエン

『力だけで比べるなら、俺はお前に、到底及ばないだろう……力の前には友も情けも無い。ただ強い者が生き残る世界。力とはそういう物だと思っていた……だから俺はお前に恐怖し、逃げ出した』

覇王

『そこまで解っていないが、何故戻って来た？』

オブライエン

『それは……違っていたからだ。俺は気付かされた。力には2つあると。それは……誰も求めない力と、誰もが求める力だ。誰もが求める力は、無限の勇氣を与えてくれる。俺は今、俺の力を求めてくれる人たちの与えてくれた勇氣の力でここにいる！』

霸王

『欺瞞だな。お前は勇者ではない。ただの負け犬だ、その過ちは、死を持って体现する事になる……』

オブライエン

『十代。俺は確信している。今の俺は絶対に心の闇に陥る事は無い……そしてこの境地を、皆は正義と呼ぶんだと!!』

霸王

『勝に残る物が正義だ!』

霸王とオブライエンの戦いが始まる。

オブライエン

『十代! お前は何とも思わないのか!? ジムは……ジムはお前のために……』

霸王

『俺は、力の示す道を全うするのみ……』

オブライエン

『それが、この世界を闇に導く道だとしても、構わないのか!? 闇に堕ちた心は孤独だ……何故それが解らない!』

霸王

『俺は孤独を恐れていない。孤独こそ真実。誰も他人の心の奥底にある闇に立ち入る事は出来ない……』

オブライエン

『十代、かつてのお前は違ったはずだ!』

覇王

『成長したんだよ』

オブライエン

『心の闇に堕ちる事がか!?!』

覇王

『負け犬の戯れ言に真実は無い!!』

全員が覇王とオブライエンの会話を聞いていた。

そして、覇王とオブライエンのデュエルは激しい攻防が続いた。

オブライエンが覇王を追い詰めれば、逆に覇王がオブライエンを追い詰める。

そして終盤。覇王が超融合を発動させ、『マリシヤス・デビル』を召喚し、オブライエンの『ヴォルカニック・デビル』を迎撃する。

覇王

『何い!?!』

オブライエン

『うおおおおッ!!』

オブライエンが覇王の元へと走り、覇王に飛びかかる。

覇王

『む、無駄だ……貴様のモンスターを破壊され、貴様のライフは0となる……はッ!?!』

オブライエ

『だが俺も、最後の作戦を発動させている!!墓地の『ヴォルカニツク・カウンスター』の効果にで、俺が受けたダメージと同じだけ、お前もダメージを受ける!!』

モニターを赤い閃光が迸る。

霸王

『ぐあああああッ!!』

モニターからは霸王の叫び声の後、巨大な爆発音が聞こえ、映像が途切れる。

なのは

「この後、十代の中の霸王は消えたの!?!」

六課メンバーを代表してなのはが聞く。

十代

「ああ」

フェイト

「それじゃあ、十代は解放されたの?」

十代

「ああ。だけど、俺はこの後、『融合』のカードが使えなくなるんだ……」

なのは

「どうして？」

十代

「霸王の人格の時に、人々を虐殺していた時の記憶が蘇ってしまうから、俺は無意識の内に『融合』が使えなくなってたんだ……」

スバル

「でも、十代さんは復活するんですね？」

スバルの言葉に六課メンバーがそれはまずいという顔をした。

ティアナ

「（バカスバル！！あんたこの空気の中なんて事聞いてんのよ！！）」

スバル

「（で、でも……）」

しかし十代は気にしていないようだった。

十代

「ああ。俺の仲間や俺のヒーロー達に励まされて、俺は復活を果たしたんだ。再会したヨハンを救うために……」

シグナム

「お前が探していた奴が見つかったという事か？」

十代が合図をするとシャーリーがモニターに映像を映す。

なのは

「え……」

フェイト

「これが……」

映像にはユベルに取り憑かれたヨハンが映っていた。

そのヨハンを見た六課メンバーはまたも絶句する。

今映っているヨハンは、先程の映像で見たヨハンとは違い、別人と言っている程、邪悪な笑みを浮かべていたからだった。

第12話 十代の過去 〱 覇王消滅〱 (後書き)

難しかった……

次回はヨハン救出〱ユベル決着の予定です。

予定通りには行かないかもしれませんが……

第13話 十代の過去 〱ヨハン救出〱(前書き)

結局、VSヨハンとVSユベルを分ける事は出来ませんでした。

2話に分けた方が落ち付くと思ったので……

第13話 十代の過去 ～ヨハン救出～

モニターにはユベル城にて十代とヨハンが向かい合っている映像が映っていた。

ヨハンはユベル城の中心に浮いている椅子の上に座っていた。

ヨハン

『やあ、待っていたよ。……十代』

ヨハンが邪悪な笑みを浮かべる。

ヨハン

『ちょうど今、ビンテージ物の心の闇をごちそうになってねえ……』

なのは

「これが、ヨハン君なの？」

フェイト

「どうしてこんな風になっちゃったの？」

十代

「このヨハンはユベルに支配されたヨハンなんだ」

なのは

「取り憑かれているってこと？」

十代

「まあ、そんなとこだ」

十代達が再びモニターに目を向ける。

ヨハン

『フフフ……いい表情だ。疑念、憎悪、殺意……まさに霸王たる高見に達したお前にふさわしい。俺も親友として、同じ色に染まる事が出来た事を誇りに思うよ』

そう言って、ヨハンが立ち上がり、十代が身替える。

ヨハン

『来いよ、十代！共に傷付け合おう！！』

ヨハンが椅子から地面に向けて歩いてくる。

十代

『茶番は止めろ！！ユベル！！』

映像の十代が叫ぶ。

そしてヨハンが足を止める。

十代

『俺は、ヨハンを取り戻すためにここまで来た！今すぐヨハンの体を解放しろ！！』

ヨハンが地面に移動する。

ヨハン

『フフフ……それはできないな。今の僕はユベルであり、ヨハンで

もある……この体は親友である君と、激しく傷付け合う事を望んでいるのさ』

十代

『ふざけるな!!それ以上でたらめを言うと、容赦しないぞ!!』

ヨハン

『容赦?フフ……大歓迎だよ……お互い、手加減無しで行こうじゃないか』

ヨハンが十代に向かい合う事の出来る位置に移動しデュエルディスクを構える。

ヨハン

『さあ!』

だが、十代は動かなかった。

ヨハン

『さあ、どうした十代。君の大好きなデュエルじゃないか。怖じけづいたりして、がっかりさせないでくれよ……』

ヨハンが狡猾な表情を浮かべる。

そして十代がヨハンに向かって走り出す。

十代はヨハンとデュエル出来る位置まで来ると足を止めた。

十代

『俺は、自らの意志の元に戦う!!』

十代がデュエルディスクを展開させる。

ヨハン

『そこなくちゃ……』

十代

『頼むみんな!! ヨハンを助けるために、力を貸してくれ!!』

十代の声に呼応するように十代の足下が白く光る。

ヨハン

『フフ……気合い十分だね』

十代

『ありがとう! 俺のヒーロー達!!』

ヨハン

『もういいかい? 待ちくたびれたよ……仲間だなんて……僕というものがあるが……』

十代

『ユベル……!!』

十代がヨハンを睨む。

十代&ヨハン

『『デュエル!!』』

二人のデュエルが始まる。

ヨハン

『フフフ……命を懸けて取り戻そうとした大切な友達を傷付ける……それでこそ、僕の愛しい人、遊城十代……』

デュエルが始まり、十代は遂に融合を使用し、『フレイム・ウイングマン』を召喚する。

なのは

「『融合』……使えたんだ」

フェイト

「良かった……」

なのは達は『融合』を使い、完全復活を果たした十代を見て感動する。

映像では十代が『フレイム・ウイングマン』の炎と共に、ヨハンの心の闇に飛び込む瞬間が映っていた。

スバル

「これは？」

十代

「ヨハンの魂がヨハンの心の闇に閉じ込められているかもしれないと思った俺は、『フレイム・ウイングマン』の力を借りて、ヨハンの心の中に飛び込んだんだ」

リン

「それで、ヨハン君はいたんですか？」

十代

「いや、ヨハンは心の闇にはいなかったんだ……」

シグナム

「それでは、どこに？」

十代

「ヨハンの魂はデッキの中にいたんだ」

モニターの映像が進み、『フレイム・ウイングマン』の攻撃が終わった後の映像が映っていた。

ヨハン

『フフ……わかるよ十代。君は本気なんだ。本気で僕を傷付けようとしているんだ』

そのヨハンのセリフに六課のメンバーはドン引きだった。

ヴィータ

「何だ……こいつ!？」

ユベル

「まあ、その男の中身は僕だからね。仕方ないさ。フフフ……」

モニターを見ていたユベルが笑いながら言う。

リン

「すごく不健全だと思います……男の人の体を使って言う辺りが……特に……」

しかし、映像のヨハンは喋り続ける。

ヨハン

『フフフ……君も嬉しいんだろう？愛する者と本気で傷付け合う事が……でもどうせなら、何故僕に対しても、これぐらい本気になってくれなかったんだい？』

十代は答えない。

ヨハン

『どうして黙っているのさ？僕には何も答えてくれないのかい？ねえ、十代？』

しかし十代は何も言わない。

ヨハン

『冷たいねえ……なんて冷たい目なんだ。こうなったらとことんわからせてあげるよ!!』

ヨハンの返しのターンでヨハンが一気に形勢を逆転させる。

ヨハン

『フフフ……これでわかってくれたかい？君を世界で一番愛しているのは、この僕だという事が』

十代

『へへへ……』

映像の十代が笑う。

十代

『この程度じゃやられない！今度はこっちから行くぜ！ユベル！！』

ヨハン

『いいよ。もっともっと痛みを分かち合おう』

十代

『フッ』

十代も負けじと、ヨハンに攻撃をする。

十代

『バトル！ネオスでダイレクトアタック！！ラス・オブ・ネオス！！』

しかし、ヨハンは笑う。

ヨハン

『フフフ……十代、最高だよ……君を命を懸けて守ろうとした大切な人をこんな風に傷付ける事が出来るなんて……やはり君は覇王だ。僕にとって、永遠の憧れの存在だよ。大好きだ……大好きだよ……十代……』

そしてヨハンは遂に『A宝玉獣』を場と墓地に七体揃える。

ヨハン

『フフフ……行くよ十代。出だよ！『究極宝玉神 レインボー・データク・ドラゴン』！！』

遂に『レインボー・ダーク・ドラゴン』が現れる。

その禍々しい姿に六課メンバーは狼狽する。

十代

「そして、ヨハンの魂はこのモンスターの中に閉じ込められていたんだ」

フェイト

「え？」

十代

「ユベルが造り出した暗黒の空間。それはレインボー・ダーク・ドラゴンの中に存在していた」

なのは

「そんな所から、どうやって助けるの？」

十代

「レインボー・ダーク・ドラゴンの闇を取り払えば、ヨハンは帰ってくる。でも、それは簡単な事じゃない

。でも、俺のデッキにはそれを可能にするカードが1枚だけあったんだ」

映像が進み、十代がレインボー・ダーク・ドラゴンの攻撃により、ライフを300まで削られている場面が映し出された。

十代

『まだだ！『インスタント・ネオスペース』の効果により、デッキから、ネオス等特殊召喚！』

十代の場にネオスが現れる。

ヨハン

『またそいつか……よっぽどお気に入りなんだね。そのモンスター……二枚カードを伏せ、ターンエンド』

十代

『俺のターン！ドロー！』『ホープ・オブ・フィフス』！墓地から『E・HERO』を5枚選び、デッキに加えて、シャッフルする。そして、カード2枚ドロー！……ッ！？』

映像の十代はドローしたカードを見て顔色を変える。

モニターを見ていたなのは達もその様子を黙って見ていた。

そして、その時はやって来た。

十代

『速攻魔法『超融合』発動！！』

映像を見ていた六課メンバー全員が息を飲んだ。

なのは

「超融合って……！？」

フェイト

「十代を地獄に堕とした、暗黒のカード……」

エリオ

「それを十代さんは遂に……」

十代

「俺はこの強大な力に支配され、自分を見失い、そのために、取り返しの付かない多くの物を失って来た……でも、俺は消えてしまったみんなのために……覇王の力を支配してでも、大切な物を守り抜くって決めたんだ……」

リイン

「十代さん……」

映像では超融合発動させた場に黒い竜巻が現れていた。

十代

『このカードは手札を1枚墓地に送る事で発動！俺の場の『ネオス』と、フィールド上のもう一体、『レインボー・ダーク・ドラゴン』がデッキの壁を越えた、究極最大の進化を遂げる！！』

黒い風が場に現れ、レインボー・ダーク・ドラゴンがレインボー・ドラゴンへと変化する。

そして、ヨハンの体からユベルが現れる。

十代

『出だよ！レインボー・ネオス！』

十代の場に巨大なモンスター『レインボーネオス』が現れる。

ヨハン

『十代……！？』

十代

『ヨハン！大丈夫か！？』

ヨハン

『十代……俺は……助かったのか……！？』

十代と本当のヨハンが再会する。

しかし、その再会を邪魔するようにユベルが大笑いをする。

ユベル

『この時を待っていた。全て僕の計算通りだよ』

十代

『何だと！？』

ユベル

『もうそんな奴の体なんてどうだっていい……くれてやるよ。一番欲しかった物が手に入ったからね』

十代

『え！？』

ユベル

『君を覇王にする事よって完成させた最強のカード。宇宙を統べる究極の力をね』

ユベルが『超融合』のカードを十代に見せる。

十代

『『超融合』！？何故、お前の手に！？』

ユベルは伏せていたカード『ラスト・トリック』によって十代の墓地から『超融合』を奪い取っていたのだ。

ユベル

『今までのデュエルは余興さ。お楽しみはこれからだよ。フッフ…』

そして、このデュエルはユベルが伏せていたもう1枚のカード『バスター・サウザンド』によって引き分けとなった。

ユベル

『さあ、始めようか十代……僕達の本当の時間をね……』

遂に、十代とユベルが決着を付ける時が来たのだった……

第13話 十代の過去 〓ヨハン救出〓（後書き）

次回、遂に十代の過去編が完結します！

お楽しみに！！

第14話 十代の過去 くユベルとの和解く（前書き）

過去編、遂に完結です！！

第14話 十代の過去 くユベルとの和解く

十代

「これが、俺とユベルの最後の戦いだ」

映像が再生される。

六課メンバーも何も言わずにモニターを見ていた。

ユベル

『どうして、そんな怖い顔してるの?』

十代

『俺の仕打ちが憎かったのなら、俺にだけ復讐すれば良かったんだ』

ユベル

『憎い? 復讐? 何を言ってるんだ? 言っただろう? 全ては十代に喜んで貰えると思って、努力してきたことなんだ』

十代

『俺が喜ぶ? 仲間達が傷付いて、苦しんで消えていつているのに…
…!!』

ユベル

『だってそれが愛だろう? 君を苦しめて、愛の深さを伝えたかった

んだ』

十代

『ユベル……お前には、何を言っても無駄なのか!?!』

ユベル

『デュエルしようよ……もっと苦しめてあげるよ。苦しみと悲しみの中でこそ、互いの愛を理解し合えるんだよ?』

十代

『ああ。ただし、理解し合うためではなく!?!』

十代がデュエルディスクを構える。

十代&ユベル

『『デュエル!?!』』

二人のデュエルが始まる。

しかし、ユベルの特異な戦術に十代は惑わされ、次第に追い詰められていく。

ユベル

『どうしたんだい?なんで攻撃して来ないんだ?もっと傷付け合おうよ』

十代

『俺の所為でどんなに傷付いていたのか、お前の苦しみはよく分かった。だから、もうこんな悲しいデュエルは止めよう!?!』

ユベル

『勘違いしてないかい？僕は傷付きながら喜んでいたのさ……君の愛を感じてねえ』

十代の説得は通じず、ユベルの歪みは広まっていく。

そして、十代は合流した翔の言葉をきっかけに霸王を蘇らせる。

十代

『一度、俺の心の中の闇の霸王は死んだ。しかしユベル……お前を倒すために、俺の中の霸王を蘇らせる』

映像の十代の瞳の色が金色に光る。

なのは

「あれって!？」

フェイト

「霸王は死んだはずでしょ？」

十代

「ああ。でも霸王も俺も、同じ、一人の人間の一面だ。あの時は、正義の心だけではユベルに勝てなかった。だから俺は、一度は死んだ……いや、一度は消えた霸王を蘇らせて、完全な俺としてユベルと戦った』

映像がさらに進む。

十代

『ユベル。お前が光の波動を受け、悪に染まり、一人復讐の思いに

燃えている間、俺にはたくさんの仲間が出来た』

ユベル

『えっ!?!』

十代

『そして、みんなから教えられたんだ。本当の愛とは、宇宙を包むように広く、大きく深い。お前の愛は、独り善がりの思い込みに過ぎない!!』

ユベル

『思い込みだって!?!』

そして十代がE・HEROをネオスピーシアンに入れ替える。

十代

『ネオスピーシアンもまた俺の仲間だ。正義の闇の波動で悪の光の波動を消し去ってやる!!』

ユベル

『思い込みではいけなかったのかい? 愛されていると思わなければあの辛さに耐えることなんて出来なかったんだよ……それなのに、十代の愛をそんな奴らが、僕から奪っていったんだね……』

ユベルが十代に視線を向けるが、霸王となった十代はそんなことでは流されなかった。

そして、霸王と一体化した影響か、プレイングにも変化が現れ、ユベルに反撃をする。

ユベル

『フフフ……嬉しいよ……これが君の愛なんだね?』

十代

『まだそんなことを言っているのか……今の俺はお前へ対する怒りでいっぱいだ。そして、お前が覚醒させた霸王の力で、お前をこの宇宙から消滅させようとしている!!』

ユベル

『やだねえ……僕の十代はそんな非常にはなれないよ……』

十代

『人は優しいだけでは大切な物を守れない。俺は大事な物を守り抜く覚悟をした。たとえ鬼、悪魔と呼ばれようとも……!!……俺は今になって知った。覚悟こそ力だ。所詮、仲間との結束を持たないお前に、勝ち目は無い!!』

十代とユベルのデュエルは続く。

一進一退の攻防が展開される。

さらにユベル第二形態が召喚され、十代はさらに追い詰められる。

ユベル

『そんなに僕が嫌いかい……?』

十代

『ッ!?!』

ユベル

『僕にとって、十二の次元の宇宙とは、十代と共に生きるための空間。だからこの宇宙を愛で満たそうとした……でも、君が仲間を呼びそこまで僕を排除しようと言うのなら、もうこの宇宙を愛で満たす必要も無い……いや、もうこんな世界すらいらぬ』

十代

『ユベル、お前は!?!』

ユベル

『終わらせよう、この宇宙を。君との空間も。君との時間も。フフ……楽しかったよ、十代』

そしてユベルは十代と再会するための経緯を話した。

ユベル

『悲しいよ十代。君がこんなに分らず屋だったなんて……君が悪いんだよ。僕の愛をわかってくれない君なんていらぬ! この宇宙もいらぬ! みんな……みんな消えちやえ!!!』

十代

『ユベル! そんな真似させるか!!!』

再び十代とユベルのデュエルが再会する。

そして、ユベル第二形態の効果によってネオスペースは全て破壊された。

ユベル

『十代! 君の大好きなネオスペースの仲間は一匹もいなくなつたよ? 所詮僕の愛の前にはあんな奴らとの友情なんてどんなに頼り

ないものか……さあ！最後のチャンスだよ？思い出してよ……十代！』

十代

『それはどうかな？』

不意に十代が笑う。

ユベル

『何！？』

十代

『『ネオスペーシアン』も、『E・HERO』もデュエルを通して出会った素晴らしい仲間達だ。でも、俺にはもつと多くの仲間達がいる……！』

ユベル

『くっ……！！？』

十代

『ヨハン、俺の素晴らしい仲間の一人……俺はお前の思いを引き継ぐ！デュエルを通して、必ずみんなを救ってみせる……！』

その言葉は映像を見ている十代とユベル以外の全員に深く響いた。

エリオ

「十代さん……」

スバル

「とても……」

リン

「カッコいいです!!」

エリオ、スバル、リンがこの空気の中、目を輝かせる。

十代

『レインボー・ドラゴンとネオスよ!俺とヨハンの友情の証を示してくれ!!』

そして十代は遂にレインボー・ネオスを召喚する。

十代

『融合召喚!出でよ!レインボー・ネオス!!』

そしてレインボー・ネオスの効果を使い、ユベル第二形態を場から消し去ることに成功するが、ユベルの究極の姿が現れる。

さらにユベルの声は男の声へと変わる。

そして激しい攻防の末にネオスの強烈な一撃がユベルを襲った。

ユベル

『うれしいよ……十代』

ユベルの声が元に戻る。

十代

『何!?!』

ユベル

『君の思いがやっと僕に届いた。その憎しみは愛の裏返しなんだねえ……僕的能力は攻撃で決して傷付かないこと……自分は傷付けられずに他人を傷付けることしか出来ない……そんな僕は誰の愛も受け入れることはなかった……』

ユベルがそう言うのと周りが紫色の靄に包まれ、モニターには何も映らなくなった。

なのは

「何? どうしたの?」

十代

「ここからのことは流石に入ってないか……」

シャーリー

「記録されてるのはここまでなんです……すみません」

十代

「シャーリーが謝る事じゃないさ……」

ユベル

「なら、僕の力を使って直接彼女達の頭の中にこの事を教えてあげてもいいよ?」

ユベルが提案する。

十代

「……わかった。頼む」

十代が答えるとユベルの額の目が光り始める。

なのは

「何!？」

フェイト

「頭の中に何かが……」

六課メンバー達は頭の中に入ってくる映像を見る。

そこにはとある城の一角で王と思われる男と一人の子供が話している場面が映し出された。

なのは

「これは……!？」

王

『ユベル、よく聞け』

ユベル

『はい』

王

『宇宙は無より生まれ、光と闇とに別れた。光は何処かへと消え、闇は多くの命を育んだ。しかし、圧倒的な力を持つ破滅の光は、いつか優しい闇を侵略するために再び輝き始めるだろう……その時、光の波動を退け、優しい闇を守るための力が必要だ』

ユベル

『はい』

王

『お前の友はその心の中に強力な覇王の力を持って生まれた。その力はやがて破滅の光に包まれた宇宙を救うだろう。しかし、少年の心が大人に成長するまで、誰かが彼を守ってやらねばならない』

ユベル

『王よ、僕にその役割をお申し付けください！』

ユベルが名乗り出る。

王

『しかし、少年の心を守るためには誰も傷付けられぬ固い鱗の鎧を身に着けねばならぬ。そなたの若く美しい肉体は、二目と見られぬ醜い竜の姿になってしまうのだぞ？』

ユベル

『構いません。彼を守るためなら！』

そして場面が変わり、暗い牢獄の様な部屋で、ユベルが今の姿になるための手術を受けている場面になる。

エリオ

「ユベルさんは、それで、今の姿に……」

キャロ

「守りたいひとのために……」

六課メンバー達はその光景を見るのに耐えられず、涙を流す。

少年

『ユベル!!』

突然、部屋に一人の少年が入ってきた。

スバル

「あれは、十代さん!？」

ティアナ

「いや、違うわ。あれは……誰!？」

十代

「この記憶は、俺が俺として生まれてくる前の記憶だ」

フェイト

「それって、あの子は十代の前世って事？」

十代

「まあ、そうなるな」

その事実には六課メンバー全員は驚きを隠せなかった。

十代とユベルは前世から愛を誓いあっていたのだ。

自分達が十代と知り合う遥か昔から愛を誓い合っていたのだ。

そして、さらに場面が変わり、海の近くの岩の上で少年とユベルが抱き合っている場面になる。

少年

『君は、僕の為に……』

ユベル

『いいのです。あなたが子供から大人になるまでお守りするのが僕の努めなのですから……』

少年

『ユベル、約束するよ。僕の愛は君だけのものだ。誰が何と言おうと、僕は君だけを永遠に愛し続ける』

ユベル

「そして僕は精霊となった後も十代を守ろうとした。だけど、その愛はだんだん歪んだ物となってしまっていた……」

少年達の映像は消え、十代とユベルがデュエルをしている場面に切り替わる。

ユベルは遂に超融合のカードを手にしてしまう。

そしてユベルは罫カード『チェーン・マテリアル』と『超融合』を使い、十二の次元を束ね、超融合神を誕生させ、宇宙を破滅に導こうとする。

ユベル

『『終わりだ！全て終わりにする事で僕は君の愛を永遠に独り占めする事が出来る……』』

十代

『その通りだ』

ユベル

『『何!?!』』

十代

『だが、超融合するのは十二の世界じゃない。お前と俺の魂だ!』

ユベル

『何だって!?!』

十代は最後の罨カード『スピリチュアル・フュージョン』により、融合するモンスターは十代が選択する事になったのだ。

十代

『さあ、ユベル。悲しい魂の旅は終点に着いた。もう終わりにしよう。さあ……』

そして十代の体から少年の姿が現れ、ユベルに語りかける。

少年

『僕たちが戦わなくちゃ行けないのは、宇宙を破滅に導く光の波動。君の魂を歪めてしまった光の波動を追い払い、霸王十代の魂が君に乗り移る……』

十代

『もしそれで俺という存在がなくなってしまうとしても、俺は構わない……『超融合』を発動!!』

そして十代とユベルは黒い渦の向こうへと消えた。

場面が変わり、ユベルが十代を抱きしめていた。

ユベル

『二つの魂は一つになって、もう決して離れる事は無いんだね……僕は今、君の愛に包まれている……共に戦おう！！宇宙を破滅に導く光の波動と！！』

ユベルは涙を流し、十代と一つになって、光となって飛び立った。

そして、なのは達の意識も元に戻った。

十代

「これが、俺が異世界で経験した事だ」

十代が説明を終わる。

なのは

「この後は？」

なのはが口を開いた。

なのは

「この後十代はどうなったの？十代の仲間達とは再会できたの？」

十代

「ああ。俺を含めて全員元の世界に戻る事が出来た。でも……」

はやて

「でも、なんなん？」

十代

「異世界での出来事の後、俺は『大切な物』を失ってしまったんだ……」

フェイト

「『大切な物』？」

ヴィータ

「お前の仲間達はみんな帰ってきたんだろ？」

ヴィータの問いに十代は首を横に振る。

十代

「目に見える物じゃないんだ。ずっと俺の中にあって、俺が大人になるのと同時に次第に消えていってしまったものだ……」

六課メンバーは十代が何を失ったのかがわからなかった。

ユベル

「十代は異世界での戦いで命がけの戦いをしてきた。そして、子供から大人になった」

十代

「その所為で俺はデュエルを純粹に楽しめなくなった……」

なのは

「十代が失った物ってもしかして、『純粹にデュエルを楽しむ気持ち』？」

十代

「ああ。でも、ちゃんと取り戻したんだぜ？」

十代は明日香や剣山、レイとのペアデュエルの事、伝説の決闘者『武藤遊戯』との『本当の卒業デュエル』の事を話した。

それを聞いた六課メンバーも笑顔になる。

こうして、十代の過去の話は幕を閉じたのだった。

第14話 十代の過去 くユベルとの和解く（後書き）

長かった……

最後がグダグダに……反省してます……

色々書きたかったけど、今の自分ではこれが限界でした……

心残りがあるとすれば、十代が融合を使えるようになったきっかけを書けなかった事です……

機会があれば書きたいと思っています。

書けるかどうかはわかりませんが……

第15話 外出 く女の戦いく (前書き)

久しぶりの投稿です!!

今回はちょっと短いです……

すみません!!

そして気付いたら10万PV超えていました。皆さん本当にありがとうございます!!

第15話 外出 女の戦い

十代が過去を話して数日が過ぎた。

この日の朝、フォワード陣の第2段階の見極めテストで4人とも見事に合格した。

そのご褒美として、訓練は明日からとなり、今日は丸1日休み。

4人は街へ遊びに出掛ける事になっていたのだった。

そして、十代は……

十代

「あゝ平和だなあ……」

ヴァイス

「何、爺さんみたいな事言ってるだよ」

ヴァイスが十代の言葉にツツコミを入れる。

ヴァイス

「お前もそんなとこ座ってないで、街に出ればいいじゃんか」

十代

「そうは言うけど、俺はこの外の世界を知らないし、行っただけ何すればいいのかわかんないんだよ」

ヴァイス

「じゃあ、誰かに付いて来てもらえばいいだろ？ お前なら楽勝だろ？」

十代

「楽勝って？」

ヴァイス

「……もういい」

ヴァイスはため息をつく。

十代がヴァイスの反応に首を傾げていると、リインが飛んでくる。

リイン

「あっ！十代さんこんな所に居た！」

十代

「どうした？何かあったのか？」

リイン

「こんなところでんびりして……朝食は？」

十代

「いや、まだだけど？」

リイン

「そうですか。私もまだなので、一緒に行きましょう」

リンが十代の右手を両手掴み、引っ張る。

小さいくせにやけに力が強かった。

その力に抗う事が出来ず、十代はただ引っ張られるだけだった。

十代

「お、おい！待って。引っ張るなよ！！」

リン

「隊長達も今朝食を取っている所なので一緒に行きましょう」

十代

「え〜」

引っ張られる十代を見てヴァイスは笑っていた。

食堂に引っ張られた十代はなのは達の居る席へ着いた。

十代の右にはなのは、左にはフェイトと、六課のファンクラブ勢にとって夢の様な位置である。

十代

「いっただきまゝす！！」

十代が食事をする。

なのは

「……」

フェイト

「……」

十代

「ん？どした？」

二人が自分を見ている事に気付いた十代が問うた。

なのは

「え？い、いや……別に……／＼／＼」

フェイト

「な、何でもないよ……／＼／＼」

二人とも顔を赤くして顔を逸らしてしまう。

十代

「？（あ……そういえば）」

十代は自分の過去を話してから数日後、なのは達（主に隊長陣）の反応がおかしい事を思い出したのだ。

顔を赤くして顔を逸らしたり、黙ったりと個人によって反応は違ったが。

十代

「(考えても仕方ねえか。具合が悪いのかもな)」

十代は頭の中で自己完結して食事を再会した。

十代がのんきに食事をしている中、女性陣の頭の中は大変な事になっていた。

なのは

「(まだ顔が熱い……どうしよう……今日一緒に出掛けないって誘うべきかなあ……?)」

フェイト

「(一緒に出掛けないって誘おうかな?でも、他のみんなも同じ事考えてそうだし……)」

はやて

「考える事はみんな一緒か……女の戦いやなあ……)」

リン

「(みんなが十代さんを狙っているのはわかりますけど……ここ最近十代さんと一番多く接しているのはリンです!!みんなには負けません!!十代さんLOVEです!!)」

ヴィータ

「（こういう場合ってなんて言って誘えばいいんだ？ そうだ！ 街を案内するって言えば問題ないな。大丈夫……落ち着けあたし！！）」

この後、隊長室で誰が十代と一緒に出掛けるかを決める戦いが繰り広げられたとか……

第15話 外出 く女の戦いく (後書き)

十代

「何かみんな最近変だよな。俺嫌われてんのかな？ユベル、俺はどうすればいいと思う？」

ユベル

「二度爆発しろ」

十代

「え？」

第16話 休日と新たなる脅威（前書き）

更新が久しぶりなので、おかしい所があるかもしれません。

見つけたら指摘してくれると嬉しいです！！

それと、しばらくはGXの方を優先して更新するかもしれません。

第16話 休日と新たなる脅威

???

「さて、この街に、十代君がいる……」

その男は森からミッドチルダを見下ろして、そう呟いた。

???

「早く彼に会わなければ……」

十代

「俺と街に？」

朝食（エビフライ定食）を食べていた十代はフェイトに声をかけられたのだ。

フェイト

「うん。十代もここに来て結構経つけど、街の事とか、全然知らないでしょ？」

十代

「まあ、そうだな」

フェイト

「それに、どこに何があるのかとかを理解しておけば、買い物も楽

になるし、緊急出勤した時とかにも、すぐに動けるでしょ？」

フェイトが続ける。

十代

「ああ。なるほど！」

説明を聞いた十代が納得する。

フェイト

「私、今日時間空いてるから、街を案内してあげる」

十代

「本当か！？じゃあ、頼むぜ！」

十代の返答にフェイトは心の中で喜んだ。

フェイト

「じゃあ、私、車の用意するから、玄関で待ってて」

十代

「おう！また後でな」

フェイトと一旦別れた十代は支度をするために部屋へ戻った。

十代

「なあ、ユベル。お前なんでそんなに笑いを堪えてるんだ？」

ユベル

「いや……なんでもないよ……」

薄暗い部屋に白衣を着た一人の男が目の中のモニターを眺めていた。男の名前はジェイル・スカリエッティ。機動六課が追跡している犯罪者である。

スカリエッティのしているモニターには、なのは達隊長陣とフォワード陣そして……

スカリエッティ

「ふむ。やはり、厄介なのはこの男、遊城十代か」

???

「その身に精霊の力を宿す者……ですか？」

スカリエッティの後ろにいた、紫色の髪の女がスカリエッティに声をかける。

スカリエッティ

「ああ、ウーノ。来ていたのか」

ウーノ

「捕獲対象が、また一つ増えてしまいましたね」

スカリエッティ

「この次元には無い特異な存在。実に興味深いじゃないか」

ウーノ

「はぁ……」

ウーノが呆れた顔をする。

????

「失礼する」

スカリエッティのラボに黒いタイツを着て、サングラスをかけた男が入室する。

ウーノ

「あなたは……」

入室して来た男を見たウーノが顔をしかめる。

スカリエッティ

「やぁ、君か。何の用だい？」

????

「君の開発したデュエルロイドだが」

スカリエッティ

「どうかしたのかい？」

????

「我々のデータを組み込んだ事によって、君の造り出した『作品』に並ぶ力を得たよ」

スカリエッティ

「そうか。それは良かった……」

???

「後はクアットロが最終調整をしてくれるはずだ。それには少し時間を用意するが……」

スカリエッティ

「そうか。その辺りは彼女に任せるとしよう。ところで……」

スカリエッティがモニターに視線を戻す。

???

「遊城十代、そして、Fの遺産か」

スカリエッティ

「ああ、どれも興味深い代物ばかりさ。」

???

「精霊の力を持つ遊城十代、禁断の方法で生まれた人形か」

スカリエッティ

「あの三人は最優先で捕獲したいものだ。できれば、生きている状態で」

スカリエッティが狡猾な表情を浮かべる。

???

「その件についてなのだが、今、遊城十代とFの遺産が街に出ている。捕獲するチャンスが巡って来たのかもしれない。その時は私も出

撃るつもりだがね」

スカリエッティ

「そうか！遊城十代の方は君に任せる。こちらからも、私の『作品』達を出撃させる」

???

「了解した」

そう言って黒の男は黒い霧となって姿を消した。

ウーノ

「よろしいのですか？」

スカリエッティ

「何がだい？」

ウーノ

「あの様な得体の知れない者共に好き勝手やらせるなど……」

スカリエッティ

「構わないさ。利用できる者は全て利用する。今までもそうして来たじゃないか」

ウーノ

「……」

スカリエッティ

「さてウーノ。ルーテシアと動けるナンバーズをここに呼んでくれないかな？この機を逃す訳には行かないのでね」

ウーノ

「わかりました」

ウーノはそう言うトラボから退室した。

2人は初めに衣服関係の店に行くことにした。

四六時中アカデミアの制服を着ているのはどうなのかという事で、十代に似合う服を探そうという事で衣類店に立ち寄ったのだ。

フェイト

「うん、これなんかいいんじゃないかな？」

十代

「そうか？自分じゃよく分かんないけどな」

十代が着ているのは黒いTシャツの上に赤のジャケット、ズボンは黒いジーンズ、靴はアカデミアの物を履いている。

正直アカデミアの制服と色の配色は殆ど同じなのだが、卒業したのにずっと制服を着ているよりマシだろう。

十代

「よく見ると中々いいな。フェイト、サンキューな！」

どうやら随分気に入ったようである。

フェイト

「どういたしまして」

その後、十代はフェイトの案内で街を回った。

この世界に来てから連戦続きで疲れた顔をしていた十代の顔も随分と穏やかになっていった。

一通り街を回った二人は公園のベンチで休憩していた。

十代

「ふう……」

フェイト

「疲れた？」

十代

「まあな、でも俺は楽しかったぜ。サンキューな」

フェイト

「いいよそんなの！色んな所に引っ張り回しちゃって、迷惑じゃなかった？」

十代

「そんな事無いさ。こういうのすげえ久しぶりだったし、本当にありがとな」

フェイト

「(そういえば、あの模擬戦からかな……十代を意識する様になったのは。いつも自分をストレートにぶつけてくる十代に惹かれて……)」

フェイトは十代と模擬戦をした時の事を思い出す。

十代

「どうした？」

十代と目が合ってしまったフェイトは顔を赤くする。

フェイト

「い、いや、何でもないよ!!」

十代

「いや、お前顔が赤いぜ？具合でも悪いのか？」

フェイト

「(この鈍ささえ無ければなあ……)」

フェイトは心の中でため息をついた。

きっと今の十代に『付き合ってください!』と言っても、『いいけどどこに?』と答えられるだろう。

フェイト

「(じゃあ、付き合ってくださいじゃなくて、愛してるって言えば

私の気持ちは伝わるのかな？」

十代

「お、おい？フェイト？（何か黙っちゃったぞ？俺なんかしたか？）」

ユベル

『（してるよ……）』

ユベルは呆れていた。

フェイト

「ねえ、十代は……」

フェイトが真剣な眼差しを重大に向ける。

十代

「ん？」

フェイト

「十代は、私の事……」

と、フェイトがそう言いかけた時、キャロからの全体通信が入った。

フェイト

「これは、キャロからの全体通信？（ああ……いい所だったのに……）」

十代

「え？」

2人は心配しながら通信を聞く。

キャロ

『こちら、ライトニング4。緊急事態につき、現場状況を報告します!』

キャロが少しあわてた感じで報告をする。

キャロ

『サードアベニューF23区画の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見』

その報告を聞き、真剣な表情になるが次の報告でさらに驚く。

キャロ

『ケースを持っていたらしい小さな女の子が1人……』

エリオ

『女の子は、意識不明です』

キャロのあとにエリオが続けて言う。

十代

「女の子?」

ユベル

「十代……」

十代の隣にユベルが現れる。

十代

「ん？」

ユベル

「嫌な予感がする。すぐに女の子の方へ向かった方がいい」

十代

「わかった！フェイト！」

フェイト

「うん！ここからそう遠くないよ。急ごう！」

十代

「ああ！行くぜ！！」

そして、現場へと向かう二人を後ろから見ている男がいた。

???

「十代君、街に来ていたのか……」

その男が天を仰ぐ。

???

「しかし、今は彼に会うときではない。今はこの街に迫っている新たな脅威と戦うときだ！！」

男はそう呟いて走り出した。

第16話 休日と新たなる脅威（後書き）

フェイト

「気になってたんだけど、あの模擬戦って何？」

ネロ

「まあ、その話は後日な……」

フェイト

「そっか、何にも考えないで書いたんだね？」

ネロ

「そんなことないさ（棒）」

フェイト

「……」

フェイト達の模擬戦の話は後日書きます。

本当です。

第17話 迫り来る敵！希望のHEROネオス！！

十代とフェイトが、キャロから送られてきた通信場所に着くと既にスバル、ティアナが来ていた。

状況を確認したところケースはもう1つあるらしい。

話しているとなのは、シャル、リインもヴァイスのヘリで来た。

十代

「シャル、その子は大丈夫なのか？」

シャル

「バイタルは安定してるし、危険な反応もない。……心配ないわ」

十代達はそれを聞くととりあえず安心した。

なのは

「とにかく、この子とケースはこのままヘリで搬送するから、皆はこっちの調査をお願い」

フォワード陣

「」「はい！」「」

フォワード陣が元気良く答える。

シャル

「あと、十代君。これ」

シャマルがヘリから十代のデュエルディスクを持って来て十代に渡す。

十代

「助かったぜ。これが無いと、俺は戦えないからな」

十代がデュエルディスクを腕に装着する。

そして、レリックを狙いガジェットが地下水路と海上に現れた。

地下のほうは十代とフォワードの四人にまかせ、ヴィータとリインは海上の南西方向の敵を、なのは、フェイトの2人は北西方向の海上の敵をそれぞれ倒すこととなったのだが、

ユベル

「十代、何か不穏な気配を感じる。気をつけろ」

十代

「ああ。わかってる！」

十代はフォワードメンバーと共に地下水路へと飛び降りた。

地下下水道を走り、向かってくるガジェットを破壊しながら、ティアナはスバルの姉、ギンガ・ナカジマと連絡を取っていた。

十代

「お前の姉ちゃんのギンガって人も魔導師なのか？」

スバル

「はい！私のシューティングアーツの師匠で歳も階級も二つ上なんです！」

十代が聞くとスバルは誇らしく言った。

十代

「そいつは楽しみだ。一度戦ってみたいぜ」

ユベル

「そんな事言ってる場合か！来るぞ！」

前方からガジェットが数機向かって来るのが見えた。

十代

「面倒だな……一撃で終わらせてやるぜ！！融合召喚！来い！『E・HERO ワイルドジャギーマン』！！！」

十代の目の前にワイルドジャギーマンが現れる。

十代

「行け！ワイルドジャギーマン！！」

十代が指示を出すとワイルドジャギーマンは自身の身の丈以上の大剣を軽々と振り回し、ガジェットを全滅させる。

エリオ

「す……すごい……」

キャロ

「アレだけのガジェットを一瞬で……」

エリオとキャロが驚く。

ティアナ

「ガジェットを一瞬で撃破したのは、その召喚獣のスキルですか？」

と、ティアナが質問する。

十代

「さすがティアナだな。そう、『ワイルドジャギーマン』には相手に一度ずつ攻撃できる効果がある。俺のデッキのモンスターは基本的に一回しか攻撃できないから、集団で攻撃されると結構厄介だが、こいつなら集団で現れる敵にも対応出来るって訳さ」

スバル

「でもそれって十代さんが手に持ってる召喚獣を呼ぶカードがうまく揃わないと召喚できないんですよね？」

十代

「ん？ああ、まあな」

と、十代が言いかけたとき、壁が派手に破壊され、十代達は構える。

十代

「ガジェットか！？」

スバル

「いえ、この魔力の感じ……ギン姉！」

土煙の中から、藍色の長髪を靡かせて、左手に白色のリボルバーナックル、両足にブリッツキャリバーを装着したギンガ・ナカジマが姿を現す。

ギンガ

「久しぶりね、スバル！」

スバル

「うん！ギン姉！」

スバルは嬉しそうにギンガに駆け寄る。

十代

「何か、すげえインパクトのある登場だな」

ユベル

「それより、局員が壁を破壊してよかったのか？」

十代とユベルがそれぞれの感想を述べる。

ギンガ

「えっと、スバル。こちらの方は？」

スバル

「えっとね……」

スバルが答えるより先に十代が自己紹介をする。

十代

「俺は遊城十代。別の世界からこの世界に飛ばされて来た。それで機動六課に協力してる」

ユベル

「僕の名はユベル。十代の魂に宿る精霊さ」

二人が自己紹介を終える。

ギンガ

「ああ、はい」

十代とギンガが握手をする。

そして、共にレリック搜索に乗り出す。

しばらくすると、柱が何本もある広い場所にたどり着き、レリックの入ったケースが見つかった。

すると突然、高速で何かが接近し、レリックを持つキャロに襲いかかる。

エリオ

「キャロ！危ない！」

キャロ

「えっ？」

エリオがストラーダで攻撃を弾き返す。

エリオ

「くっ……」

そして、キャロの後ろに紫色の髪をした少女が砲撃魔法を撃とうとする。

十代

「くっ！『フェザーマン』！！」

十代がフェザーマンを召喚する。

召喚されたフェザーマンは背中の翼の羽を飛ばし、少女に攻撃し、砲撃体勢を解除させる。

十代

「エリオ！キャロを連れて、ティアナと一緒にいろ！」

十代がエリオに声をかける。

エリオ

「はい！キャロ、行こう！」

キャロ

「う、うん！」

エリオがキャロの手を引いてティアナ達と合流するべく移動する。

ユベル

「あの小娘とは別に何かが高速移動している。姿も消している。この状況で攻撃するのは難しい」

ユベルが状況を分析する。

十代

「なら、『フェザーマン』！お前の力を借りるぜ！『フェザーマン』を生け贄に『ネクロダークマン』召喚！」

十代がネクロダークマンを召喚する。

十代

「行け！『ネクロダークマン』！」

十代が指示を出すと、ネクロダークマンは姿を消す。

その直後、十代の目の前に黒い鎧を身に纏った戦士、少女の召喚獣ガリユーが現れ、両腕の爪で十代に攻撃する。

十代

「くっ!？」

十代はその攻撃を左腕のデュエルディスクでガードする。

十代

「『ネクロダークマン』!!」

十代の声に反応してネクロダークマンが、黒い戦士の背後に現れ、黒い戦士を羽交い締めにする。

十代

「モンスターで攻撃すれば、その使い手を狙って来る事は読めてたぜ。だから、こういう手を打たせてもらったぜ」

黒い戦士はネクロダークマンの拘束を逃れ、少女の隣へと移動する。

ユベル

「どうやら、あの黒い戦士はあの小娘が召喚したみたいだね。あの戦士から小娘の魔力を感じるからね」

十代

「あの黒い奴は接近戦に強いな。ティアナ、どうする？」

十代はティアナに指示を仰ぐ。

ティアナ

「スバル！私が援護するからギンガさんと二人であの黒い奴をお願い！エリオは十代さんと一緒にあの女の子を！キャロはフリードと一緒にエリオ達を援護して！」

ティアナがすぐに指示を出す。

????

「残念だがそううまく行かねえよ！！」

大きな声が響くと、少女の隣にリインと同じ背丈の赤髪の少女が現れる。

少女

「アギト……」

????

「来たぜ、ルールー！」

アギトと呼ばれた少女は両手から炎を出す。

アギト

「喰らえ!!」

炎弾を連続発射する。

十代

「くっ! 『バブルマン』!」

十代がバブルマンを召喚する。

召喚されたバブルマンは右腕の銃から水流を発射し、アギトの放った炎弾を消し止めるが、その隙にバブルマンの背後に回った黒い戦士の連続攻撃によってバブルマン、そしてネクロダークマンは破壊された。

十代

「ぐああっ!!」

ユベル

「十代、奴らの攻撃を受け流して、あいつ等と合流しろ!」

十代

「わかってるよ!」

少女の魔法、アギトによる炎の連続攻撃、黒い戦士の近接格闘が組み合わさった連携攻撃を繰り返され、あっという間に十代達を追い詰める。

スバル

「マズい！ 追い詰められた！」

十代

「いや、そうでもないぜ！」

十代がスバルの言葉を否定する。

スバル

「え？」

十代

「奴らの攻撃で、俺等はうまく一つに固まる事が出来た。これなら、誰が狙われようと助けられる！」

ユベル

「そうしろと言ったのは僕だけだね……」

十代

「行くぜ！ 墓地のネクロダークマンの効果で一度だけ、『E・HERO』を生け贄無しで召喚できる！ 来い！ 『E・HERO ネオス』！！」

十代の場に、ネオスが現れる。

スバル

「これが十代さんの最強の召喚獣……」

エリオ

「カッコいいです!!」

十代

「まだまだ! ネオスの力はこんなものじゃないぜ! 装備魔法『ネオス・フォース』を『ネオス』に装備!」

ネオスの身体がオレンジ色に発光する。

十代

「行け! 『ネオス』!! 『ラス・オブ・ネオス』!!」

ネオスが少女に向かって突進するが、それを見た黒い戦士がすぐに少女の前へと移動し、ネオスの攻撃を防ぐ。

しかし、ネオスの攻撃があまりにも強かったのか、黒い戦士はその攻撃を受け切る事が出来ずに吹っ飛ばされる。

少女

「ガリュー! アギト、お願い」

アギト

「おうっ!」

アギトは自身が出せる最大級の炎弾を発射して、辺りに煙を撒き散らす。

十代

「くそっ! 煙幕か!」

ユベル

「逃走のための攻撃だ。下手に手を出さなけりや大丈夫だ」

ヴィータ

「お前ら！大丈夫か！」

そこに、急いでやって来たヴィータとリインが合流する。

煙が晴れると少女達の姿がなかった。

十代

「やっぱり逃げられたか！……ん？」

天井が崩れる音が鳴り、瓦礫が落ちてくる。

ヴィータ

「スバル！」

スバル

「はい！ウイングロード！！！」

スバルが螺旋状に作られた魔力製の道を展開する。

全員がウイングロードを登り、地上に戻る。

十代

「ったく、とんだ休日だぜ……ん？」

遠くのほうに黒い影が登っていくのが見えた。

十代

「（あの影、まさか……）」

第17話 迫り来る敵！希望のHEROネオス！！（後書き）

次回はデュエルシーンを書くつもりです！！

第18話 十代VS闇と光の天使達!! (前書き)

9／29に最後のデュエルシーンを一部変更しました。

第18話 十代VS闇と光の天使達!!

地上へ空間転移魔法で退避した少女は傷ついた自分の召喚獣を帰還させ、巨大な甲虫の姿をした新たな召喚獣、地雷王を召喚し、十代達のいる地下下水道を崩壊させようとしていた。

だが、その直後、地雷王にキャロの放った桃色のバインドが現れ、地雷王は動きを封じられた。

さらに二本のウイングロードが交差するように出現し、スバルとギンガが現れる。

そしてヴィータが空を飛翔し、ティアナが魔力弾で少女を狙い、最後にエリオが首もとにストラダーの刃を突き立てる。

アギトもリインに捕まり、特に何もすることがなかった十代とユベルは見事なチームワークに感心していた。

ユベル

「彼女達も随分と成長したな」

十代

「ああ。俺ら、必要なかったかもな」

ユベル

「彼女たちは以前より確実に強くなっているからね。君もウカウカしていると、すぐに追い抜かれるよ」

十代

「ちえ……ん？」

ヴィータ達に合流しようとした十代は突然の違和感に襲われる。

十代

「（何だ……？この感覚は……？）」

十代が空を見上げると、先程保護した少女を乗せて飛び立ったヘリが空を飛んでいる。

十代

「まさか！？」

十代が危険を感じるのと同時刻、廃ビルに2人の女性が居た。一人は眼鏡をかけ、白いマントを羽織った女。もう1人の女は布に巻かれた棒らしきものを持っていた。

眼鏡の女

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

眼鏡をかけている女が布に包まれた巨大な棒の様な物を持っている女に話しかける。

ディエチ

「ああ。遮断物もないし空気も澄んでるからよく見える」

ディエチと呼ばれた女が言ったとおり、彼女の眼には空中に浮いているヘリが映っていた。

ディエチ

「でもいいのか？クアットロ。撃っちゃって。ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになるかも」

クアットロ

「ウフフフ……ドクターとウーノ姉様曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に『聖王の器』なら砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ」

クアットロの話を聞き終わるとディエチは大砲を包んでる布を取って大砲『イノーマスカノン』を露わにする。

そしてイノーマスカノンを両手でしっかり構えチャージを開始する。

ディエチ

「後12、11、10……」

狙いは機動六課のヘリだった。

十代達にも、空で戦闘しているはやて達にも高エネルギー反応があるという通信が入っていた。

十代

「あのエネルギー反応が巨大なビームだったら、狙いは俺達か？それとも空中で戦ってるなのは達か！？」

ユベル

「いや、ここには捕らえた奴らもいる。あのエネルギー反応の正体がいいつ等の仲間なら、ここに撃つ事は無いだろう」

ヴィータ

「それじゃあ、狙いはなのは達の方か！？」

ユベル

「それも多分違うな。あそこから撃つても、確実に避けられ、自分達の戦力を無駄に消費して終わる。おそらく狙いは……」

ユベルがシャルマル達の乗るヘリのほうへと視線を向ける。

十代

「まさか……狙いは……」

フェイト

『狙いがヘリだとしたら、距離が離れ過ぎてる所為で、最速で向かったとしても、間に合わない……』

フェイトから通信が入る。

十代

「防御用のカードは何枚があるが、この距離からじゃ、手が出せねえ……」

十代達は黙ってヘリを見ているしか無かった。

ディエチ

「発射!!」

ディエチはイノームスカノンの引き金を引き、Sランク級の破壊力
の持つ砲撃を放った。

標的は保護した少女を乗せたヘリ。

ヘリを破壊し、少女を連れて退散するという算段だった。

十代

「やっぱり、狙いはヘリか!？」

十代達全員が気付いた時には砲撃はヘリに向かっていった。

おそらく避ける事も出来ないだろう。

全員が諦めかけた時、ヘリの前に黒い穴が現れる。

砲撃はヘリには当たらず、そのまま黒い穴へと吸収された。

十代

「なっ……なんだアレは!？」

十代達が驚愕する。

驚いていたのは十代達だけではなかった。

砲撃を放ったディエチと指示を出したクワットロも同じである。

クワットロ

「ちょ……ちよつと、どういう事!？」

ディエチ

「私に聞かれても……」

クアットロとディエチは驚きを隠せなかった。

その直後、金色の魔力弾が2人を襲い、フェイトが2人の後ろに回り込む。

フェイト

「見つけた」

クワットロ

「こっちも?」

ディエチ

「早い！」

二人は逃げ、フェイトが追いかけるが、クワットロの能力で2人は姿を隠す。

しかし、はやてが広域空間攻撃魔法を展開していた。

フェイトは一度上空に退避して巻き込まないようにする。

はやて

「闇に染まれ……ディアボリック・エミッション！」

紫色の球体が巨大化していき、辺り一面を呑み込んだ。

姿を隠した二人は何とか避けたが、なのはとフェイトが2方向からの砲撃魔法で狙っていた。

フェイト

「トライデントスマッシャー！！！」

なのは

「エクセリオンバスター！！！」

なのはとフェイトが砲撃が発射する直後に突然、なのはとフェイト、はやての3人の姿が消えた。

消えた砲撃を見て驚いていた十代達の周りにも脅威が迫っていた。

十代達の周りに黒い霧が出現したのだ。

ユベル

「これは……」

十代

「ああ、地下で見たのと同じだ」

十代がデュエルディスクを構え、黒い霧を見たヴィータ達も警戒する。

黒い霧は一ヶ所に集まり、男の姿になる。

????

「ほう、暗闇の中とはいえ、私の気配を察知していたとは、さすがは遊城十代だな」

十代

「お前は、ミスターT!!」

ミスターTと呼ばれた男は黒いタイツの様な衣装に身を包み、サングラスを掛けていた。

ヴィータ

「何だこいつ!?!」

リン

「黒い霧が人の形になったです!？」

その異形の姿にヴィータ達が引く。

ミスターT

「私の目的は遊城十代、君だ」

十代

「何!？」

ミスターT

「君のその力は強力だ。是非、我々に協力する気は無いか？」

十代

「ふざけるな! 誰がお前達に協力なんかするか!」

ミスターT

「ふうん。予想通りの返答だな」

ミスターTが不適な笑みを浮かべる。

十代

「今回の事件はお前の仕業だな? 一体、何が目的だ!」

ミスターT

「その質問に答えるつもりは無い」

ミスターTは捕らえられているルーテシアの背後に黒い穴を開ける。

ミスターT

「君のお仲間が近くまで着ている。安全な所まで送ってやるから、保護してもらうんだな」

ルーテシア

「うん。ありがとう、助けてくれて」

ルーテシアはその穴に入り、姿を消す。

それを見届けたミスターTが十代達に視線を戻す。

ミスターT

「随分と簡単に行かせてくれたじゃないか。いや、簡単に行かせざるをえないと言ったほうがいいかな？」

ミスターTが笑う。

十代

「これは!？」

いつの間にか十代達の周りに黒い結界の様な物が存在していた。

ミスターT

「魔力が結合できないだろう？この結界は『アンチマギリンクフィールド』、通称AMFに似た力を有している。最も、別の世界から来た君に効果はないようだがね……」

十代

「つまり、この結界の中で戦えるのは、俺だけって事だな？」

十代がデュエルディスクを構える。

ミスターT

「理解が早くて助かる。君は何としても連れて帰る」

ミスターTの左腕がデュエルディスクの様な形に変わる。

ミスターT

「それと、ギャラリーをもう少し増やすとしよう」

十代

「何？」

ミスターTが右手をルーテシア達のいた場所に向けると、なのは、フェイト、はやての3人が現れる。

十代

「なっ!？」

なのは達の突然の出現に十代達が驚く。

なのは

「あれ?ここは……」

フェイト

「私達、空で戦ってたはずなのに……」

はやて

「どうして……って何で十代君達がここにおるん!？」

十代

「それはこっちが聞きたいぜ……どうして……まさかお前の仕業か！」

十代がミスターTを睨む。

ミスターT

「ふうん、その通りだ。彼女達をここへ移動させたのはこの私だ。ギャラリーが多いと中々楽しいだろう？それと、君を倒した後に、彼女達を始末するのも楽になるからね」

フェイト

「あなたは……！？」

ミスターT

「これは失礼。私とした事が自己紹介がまだだったな。私の名はトウルーマン。ミスターTとも呼んでもらおうか」

ミスターTが笑う。

なのは

「くっ！」

なのはがレイジングハートを構え、ミスターTを攻撃しようとするが、すぐに自分の身体の異変に気付く。

なのは

「魔力が、結合できない……！？」

ミスターT

「この結界の中では魔力を結合させる事は出来ない。つまり、ここ

では君達は無力な人間だと言う事だ」

なのは

「そんな……」

十代

「なのは、お前達は下がってろ。ここは俺に任せろ！」

なのは

「十代……」

十代

「心配すんな。俺はこんな所で負けたりしねえよ」

と、十代が笑う。

なのは

「うん、そうだね！でも、油断は禁物だよ！」

十代

「おう！」

十代が構えるのと同時に、なのは達もヴィータ達と合流する。
合流したなのは達を護る様にユベルがなのは達の前に移動する。

ミスターT

「準備は整ったのかな？」

十代

「ツベコベ言わずに、さっさと始めろよ」

お互いにデュエルディスクを構える。

十代&ミスターT

「『デュエル!!』」

十代 LP4000

ミスターT LP4000

十代

「先攻は貰うぜ!ドロー!」

十代がドローカードを確認する。

ドローカードは『融合』。

十代

「『E・HERO クレイマン』を守備表示で召喚!」

十代の場にクレイマンが現れ、防御体制をとる。

E・HERO クレイマン 守備力2000

十代

「さらに、カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ミスターT

「私のターン、ドロー。私は手札から永続魔法『神の居城ーヴァルハラ』を発動!」

ミスターTの背後が美しい装飾で飾られた協会の様な物が出現する。

十代

「『ヴァルハラ』!？」

ミスターT

「このカードは自分の場にモンスターがいない時、手札から天使族モンスター一体を特殊召喚できる。私はレベル8の『墮天使アスモディウス』を特殊召喚!」

ミスターTの場に黒い衣装に身を包んだ天使が現れる。

墮天使アスモディウス 攻撃力3000

ミスターT

「『アスモディウス』の効果により、1ターンに一度、デッキから天使族モンスターを墓地に送る事が出来る。私はデッキから『墮天使スペルビア』を墓地に送る。そして、手札から『ウィクトーリア』を攻撃表示で通常召喚!」

ミスターTの場に2体の竜を従えた天使が現れる。

ウィクトーリア 攻撃力1800

ミスターT

「バトル! 『アスモディウス』で『クレイマン』を攻撃!」

アスモディウスが右手から黒い光球を出現させ、クレイマンへと投げつける。

黒い光球が直撃したクレイマンは爆散する。

十代

「くそっ！トラップ発動！『ヒーロー・シグナル』！モンスターがバトルで破壊された時、手札、またはデッキからレベル4以下の『E・HERO』一体を特殊召喚できる！来い！『バブルマン』！」

十代の場にバブルマンが現れる。

E・HERO バブルマン 守備力1200

十代

「『バブルマン』の効果発動！召喚に成功した時、自分の場に他のカードが無い時、デッキから2枚ドロロー！」

ミスターT

「だが、私の場にはまだモンスターが残っている。『ウィクトーリア』で『バブルマン』を攻撃！」

ウィクトーリアの従えている2体の竜がバブルマンを食い殺す。

ミスターT

「ターンエンド」

十代

「俺のターン、ドロロー！手札から、『融合』発動！手札の『フェザーマン』、『バーストレディ』を融合！」

十代の場に青い渦が現れ、フェザーマンとバーストレディが渦に吸

い込まれる。

十代

「来い！マイフェイバリットカード！『E・HERO フレイム・ウイングマン』！！」

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻撃力2100

十代

「行くぜ！『フレイム・ウイングマン』で『ウィクトーリア』を攻撃！『フレイムシュート』！！」

フレイム・ウイングマンが右手の竜から炎を発射し、ウィクトーリアを攻撃する。

ミスターT

「くっ……」

ミスターT LP4000—300〓3700

十代

「さらに、『フレイム・ウイングマン』のモンスター効果により、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

スバル

「『ウィクトーリア』の攻撃力は1800だから……」

ティアナ

「1800ポイント、あの黒タイツのライフを削れる！」

ミスターT

「……」

フレイム・ウイングマンの攻撃はウィクトーリアを貫通し、ミスターTにもダメージを与える。

ミスターT LP3700－1800＝1900

炎を直撃を受けたミスターTの上半身は黒い霧へと変化し、炎が消えると同時にもとに戻った。

十代

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

ミスターT

「私のターン！『アスモディウス』で『フレイム・ウイングマン』を攻撃！」

アスモディウスが攻撃体勢に入る。

十代

「この瞬間、トラップ発動！『ヒーロー・バリア』！俺の場に『E・HERO』が存在する時、相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする！」

ミスターT

「……カードを1枚伏せ、ターンエンド」

十代

「ドロー！（俺の引いたカードは『摩天楼一スカイスクレイパー』。こいつで『フレイム・ウイングマン』の攻撃力を上げて、『アスモディウス』を破壊して、『フレイム・ウイングマン』の効果ダメージで勝てる……だが、あの伏せカードがモンスター破壊カードだったら俺は不利になる。ならまずは……）行くぜ！『E・HERO』スパークマン』を攻撃表示で召喚！」

E・HERO スパークマン 攻撃力1600

ミスターT

「この瞬間！トラップ発動！」

十代

「ッ！？」

ミスターT

「『激流葬』！モンスターが召喚された時、フィールドの全モンスターを破壊する」

ミスターTのカードから、大量の水が出現し、フィールド上のモンスターを飲み込む。

水が消えると同時に十代とミスターTのモンスターも消滅していた。

十代

「トラップ発動！『エレメンタル・ミラーージュ』！自分の場の『E・HERO』が効果によって破壊された時、その『E・HERO』を破壊される前の状態で場に戻す！」

十代の場にフレイム・ウイングマンとスパークマンが戻る。

エリオ

「十代さんの召喚獣が元に戻って、あいつの場には召喚獣がない！」

リイン

「2体の召喚獣で攻撃すれば勝てるですう！！」

エリオとリインが歓喜の声を上げる。

ミスターT

「喜ぶのはまだ早い。『堕天使アスモディウス』が破壊され、墓地送りになった事で効果発動！私の場に『アスモトークン』、『ディウストークン』を守備表示で特殊召喚！」

ミスターTの場に赤と青のアスモディウスが現れる。

アスモトークン 守備力1300

ディウストークン 守備力1200

ミスターT

「『アスモトークン』は効果では破壊されず、『ディウストークン』は戦闘では破壊されない。さて、どうする？」

十代

「（『ディウストークン』は戦闘では破壊されない……なら）『フレイム・ウイングマン』で『アスモトークン』を攻撃！」

フレイムウイングマンが右手から炎を発射し、戦闘耐性の無いアス

モトークンを焼き殺す。

ミスターT

「だが、『フレイム・ウイングマン』の効果は戦闘で破壊したモンスターを墓地に送らなければならない」

十代

「ターンエンド」

ミスターT

「私のターン、ドロー。まずは『神聖なる球体』を守備表示で召喚」

神聖なる球体 守備力500

ミスターT

「そして、手札から魔法カード『シールド・クラッシュ』を発動。
このカードは場に表側守備表示で存在するモンスターを破壊する。
この効果で破壊するのは『神聖なる球体』」

ミスターTの場の神聖なる球体が破壊される。

ティアナ

「自分の場の召喚獣を犠牲にするなんて……」

ミスターT

「常識に捕われないのが私のデュエルでね。これで私の墓地には天使族モンスターが4体。よって、手札からこのモンスター『大天使クリスティア』を攻撃表示で特殊召喚！」

ミスターTの場に4つの光が集まり、美しい天使の姿となる。

大天使クリスティア 攻撃力2800

十代

「『クリスティア』だと……!?!?」

ミスターT

「十代。正しき闇の力をこの聖なる光で消し飛ばしてやろう!!」

第18話 十代VS闇と光の天使達!! (後書き)

次回で決着、その次の話で模擬戦の話をやろうと思います。

第19話 逆転のコンタクト融合!!

十代 LP4000 ミスターT LP1900

ミスターT

「『大天使クリスティア』がこの召喚方法で召喚された時、基地の天使族モンスターを手札に加える。私が手札に加えるのは『ウィクトーリア』」

十代

「くっ!？」

ミスターT

「そして、手札に加えた『ウィクトーリア』を攻撃表示で召喚!」

ウィクトーリア 攻撃力1800

ミスターT

「『大天使クリスティア』で『フレイム・ウイングマン』を攻撃!」

クリスティアが両手を天に掲げると、天から光の矢が振り注ぎ、フレイム・ウイングマンを貫く。

大量の矢が刺さったフレイム・ウイングマンは破壊される。

十代

「『フレイム・ウイングマン』……!」

十代 LP 4000－700＝3300

ミスターT

「『ウィクトーリア』で『スパークマン』を攻撃！」

ウィクトーリアの従えた2体の竜がスパークマンを食い殺す。

十代 LP 3300－200＝3100

ミスターT

「私はこれでターンエンド」

ユベル

「一気に形勢逆転か……しかも、あのモンスターがいる限り、十代は特殊召喚が出来ない」

フェイト

「それって……」

ユベル

「十代のデッキは融合によってレベルの低いモンスターを素材にレベルの高いモンスターを呼ぶのが基本戦術。だが……」

なのは

「それが出来ないと、十代の召喚獣は攻撃力の低い召喚獣だけになる……」

十代

「俺のターン！（くっ……俺の引いたカードは『N・グラン・モール』。『グラン・モール』バトルした相手モンスターを手札に戻す

強力なカード。奴の場には攻撃力2800の『クリスティア』と攻撃力1800の『ウィクトーリア』。ここで『グラン・モール』を使ってどちらかのモンスターを手札に戻した所で、俺の場はガラ空き……。次の奴のターンにダイレクトアタックを決められてしまう……。なら……。俺は手札から、魔法カード『コンバート・コンタクト』を発動！自分の場にモンスターがいない時、手札の『グラン・モール』とデッキの『フレア・スカラベ』を墓地に送り、シャッフル。その後、カードを2枚ドロー！カードを2枚伏せ、ターンエンド」

はやて

「召喚獣を召喚しない？」

フェイト

「召喚獣のカード、引けなかったって事！？」

ユベル

「この状況でモンスターを1枚も出せないとはな……」

ミスターT

「私のターン。君の場にモンスターは0。だが私の場には攻撃力2800の『クリスティア』と攻撃力1800の『ウィクトーリア』がいる。この2体の攻撃で君のライフは尽きる」

十代

「くっ！」

ミスターT

「さらばだ！遊城十代！『クリスティア』でダイレクトアタック！」

クリスティアが両手を天に掲げると、天から無数の光の矢が十代に振り注ぐ。

十代

「トラップ発動！『聖なるバリアーミラーフォースー』！相手が攻撃して来た時、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊するぜ！！」

クリスティアの攻撃が十代の目の前に現れた半透明のバリアによって反射され、クリスティアとウィクトーリアを破壊する。

ミスターT

「くっ！？」

十代

「迂闊な攻撃だったな！！」

ミスターT

「『クリスティア』は自身の効果で私のデッキの一番上に戻る。そして私は手札より魔法カード『トレード・イン』を発動。手札の『墮天使ゼラート』を墓地に送り、デッキより2枚ドロウ。さらに『神の居城ーヴアルハラー』の効果発動！自分の場にモンスターがない時、手札の天使族モンスター一体を特殊召喚できる。よって私は再び『大天使クリスティア』を特殊召喚」

大天使クリスティア 攻撃力2800

十代

「また『クリスティア』が……！？」

ミスターT

「ターンエンド」

十代

「ドロー！魔法カード『テイク・オーバー・ファイブ』！デッキの上からカードを5枚墓地に送る」

墓地に送ったカードは『E・HERO ワイルドマン』、『ネクロ・ガードナー』、『E・HERO ネクロ・ダークマン』、『N アクア・ドルフィン』、『異次元トンネルミラーゲート』。

十代

「さらに魔法カード『融合回収』を発動！自分の墓地から、『融合』と融合に使用したモンスター一体を手札に戻す」

十代は『融合』と『E・HERO バーストレディ』を手札に戻す。

十代

「そして俺は『バーストレディ』を守備表示で召喚！ターンエンド」

ミスターT

「私のターン。魔法カード『禁じられた聖杯』。このターンのエンドフェイズまで自分の場のモンスター一体の攻撃力を400ポイントアップさせ、効果を無効にする」

大天使クリスティア 攻撃力2800+400=3200

十代

「何！？まさか！？」

ミスターT

「そのまさかだよ。『クリスティア』の効果が無効にされた今、モンスターの特殊召喚が可能になる。手札より魔法カード『死者蘇生』を発動！これにより、墓地のモンスター一体を特殊召喚！蘇れ！『墮天使スペルビア』！！」

ミスターTの場に赤い翼を生やした壺の様な姿の天使が現れる。

墮天使スペルビア 攻撃力2900

ミスターT

「『スペルビア』が墓地からの特殊召喚に成功した時、自分の墓地の『スペルビア』以外の天使族モンスターを特殊召喚できる！出でよ！『墮天使ゼラート』！」

ミスターTの場に紅い翼の天使が銀色の剣を携えて現れる。

墮天使ゼラート 攻撃力2800

ミスターT

「バトルだ！『クリスティア』で『バーストレディ』を攻撃！」

クリスティアが天空から光の矢をバーストレディに向けて発射する。

十代

「そう簡単にやられるかよ！トラップ発動！『攻撃の無力化』！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する！！」

クリスティアの攻撃はバーストレディには届かず、バーストレディの前に現れた時空の渦に吸収された。

ミスターT

「思ったよりしぶといな。私はこれでターンエンド」

大天使クリスティア 攻撃力3200－400〓2800

十代

「ドロー！（くそっ！このカードじゃ、今の状況を変えられない……。）ターンエンド」

ミスターT

「私のターン。先程の罠カードも無駄になってしまったようだな。それでは戦いの幕を降ろすでしょう……。まずは『クリスティア』で『バーストレディ』を攻撃！」

クリスティアが天空から降らせた矢でバーストレディを串刺しにする

ミスターT

「続けて『墮天使ゼラート』でダイレクトアタック！」

墮天使ゼラートがミスターTの場から十代の目の前へと移動し、手にした剣で十代を斬る。

十代

「ぐあああああっ！！」

斬られた衝撃で十代が膝を付く。

十代 LP－3100－2800〓300

十代

「うう……」

なのは

「十代!!」

ヴィータ

「おい！大丈夫かよ!!」

ユベル

「一気にライフを減らされたか……」

フェイト

「それに、あいつはまだ攻撃していない召喚獣がいる……」

はやて

「それが通れば十代は……」

ミスターT

「そう、敗北だ。彼もここまでよく頑張ったが、ここまでかな？彼の場にモンスターはいない。だが私の場にはまだ攻撃していない『スperlビア』がいる」

六課メンバーが身構える。

ミスターT

「そう怖がる事はない。彼を葬った後に君達もすぐに始末してやる……。『Fの遺産』の2人は別だが……」

エリオ

「え……?」

フェイト

「何故、その事を……」

ミスターT

「その質問に答えるつもりは無い。滅び行く君達に答えるつもりも無いがな……」

フェイト

「くっ……!」

ミスターT

「さて、まずは目の前にいる男に止めを刺すでしょう。『堕天使スperlビア』でダイレクトアタック!!」

スperlビアが十代に向けて黒い雷球を発射する。

なのは

「ああっ!!」

フェイト

「十代!!」

六課メンバーが十代の敗北を覚悟するが、スperlビアの攻撃は、十代の目の前に現れた赤と黒の鎧を着た戦士によって阻まれる。

ミスターT

「何!？」

ユベル

「『ネクロ・ガードナー』か……」

ユベルが笑う。

十代

「墓地の『ネクロ・ガードナー』は墓地から除外する事で相手モンスターへの攻撃を一度だけ無効にする……」

膝を付いていた十代が立ち上がる。

ミスターT

「仕留め損なったか……。ターンエンド」

十代

「俺のターン。（このドローに全てを掛ける！）ドロー！魔法カード『ホープ・オブ・フィフス』！自分の墓地から『E・HERO』と名の付いたモンスターを5枚選択してデッキに戻してシャッフルする」

十代は『フェザーマン』、『バーストレディ』、『クレイマン』、『スパークマン』、『バブルマン』をデッキに戻してシャッフルする。

十代

「その後、カードを2枚ドロー!!」

十代がカードを2枚ドローする。

十代

「『ネクロ・ダークマン』は墓地に存在する時、一度だけ、『E・HERO』と名の付いたモンスターを生け贄無しで召喚できる。現れる！『E・HERO ネオス』！！」

十代の場にネオスが現れる。

E・HERO ネオス 攻撃力2500

ミスターT

「ようやくお出ましか……。だが『ネオス』の攻撃力では私の天使達の攻撃力には遠く及ばない」

十代

「慌てるな。勝負はこれからだ。フィールド魔法『スカイスクレイパー』発動！！」

十代がカードをデュエルディスクにセットすると、十代達の周りの景色が夜の高層ビル街へと変わる。

ミスターT

「これは……！？」

十代

「このフィールドこそ、ヒーローが活躍する舞台だ！『スカイスクレイパー』は『E・HERO』と名の付いたモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、その攻撃モンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

ミスターT

「何!？」

十代

「行くぜ! 『ネオス』で『クリスティア』に攻撃! 『スカイスクレイパー』の効果で攻撃力アップ!！」

E・HERO ネオス 攻撃力2500+1000=3500

ネオスがクリスティアに向かって突進する。

それを見たクリスティアがその攻撃を阻止しようと天空から無数の光の矢をネオスに向けて発射する。

しかし、『スカイスクレイパー』の能力で攻撃力が上がったネオスはその攻撃を軽々と避け、クリスティアの胴体にパンチを入れる。

その攻撃を受けたクリスティアは爆散する。

ミスターT

「くっ!！」

ミスターT LP1900-700=1200

十代

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ミスターT

「私のターン! 例え『クリスティア』が破壊されようと、私の場にはまだ『スペルビア』と『ゼラート』がいる。このターンで君を葬

る！行け！『スペルビア』！『ネオス』攻撃！！」

スペルビアが黒い雷球をネオスに向けて発射する。

十代

「残念だが、それは叶わないぜ！トラップ発動！『魂の結束ーソウル・ユニオン』！！このターン、攻撃表示のモンスターの1体の攻撃力は自分の墓地から選択した「E・HERO」と名のつくモンスター1体の攻撃力分アップする。俺が選ぶのは『フレイム・ウイングマン』！！よって、『ネオス』の攻撃力は『フレイム・ウイングマン』の攻撃力分アップする！！」

E・HERO ネオス 攻撃力2500+2100＝4600

ミスターT

「攻撃力4600だと！？」

十代

「これで、『スペルビア』の攻撃力を上回ったぜ！このバトルが成立すれば俺の勝ちだ！迎撃しろ！『ネオス』！！」

スペルビアが発射した黒い雷球をネオスが受け止め、そのままスペルビアへと投げ返す。

ミスターT

「手札より速攻魔法『エンジェル・リカバリー』を発動！自分の場の天使族モンスター一体につき500ポイントライフを回復する！！」

ミスターT LP1200+1000＝2200

攻撃を受けたスペルビアは破壊される。

ミスターT LP2200-1700=500

ミスターT

「『スペルビア』も破壊されたか……。ならば、『堕天使ゼラート』の効果発動！手札から闇属性モンスター『堕天使アスモディウス』を墓地に送り、相手の場のモンスターを全て破壊する！」

ゼラートが手にした剣から衝撃波を飛ばし、ネオスを破壊する。

十代

「『ネオス』！？」

ミスターT

「カードを2枚伏せる。そして効果を発動した『ゼラート』はこのターンのエンドフェイズに破壊される」

ゼラートがバリーンという音を立てて破壊される。

ミスターT

「（このターン、モンスターを全て失ったが、私にはこのリバーScカード、『魔法の筒』、『聖なるバリアーミラーフォース』がある。奴が攻撃を仕掛けてくれば、次のターン私の勝ちが確定する。）」

十代

「俺のターン！行くぜ！『N・エア・ハミングバード』を攻撃表示で召喚！」

十代の場にエア・ハミングバードが召喚される。

N エア・ハミングバード 攻撃力600

十代

「さらに、魔法カード『ミラクル・コンタクト』を発動！フィールド、または墓地から、『ネオス』を融合素材とする融合モンスターによって決められたモンスターをデッキに戻し、『ネオス』を融合素材とする融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する！俺は墓地の『ネオス』、『アクア・ドルフィン』、そして、場の『エア・ハミングバード』をトリプルコンタクト融合！！」

十代の墓地から現れたネオス、アクア・ドルフィン、そして場のエア・ハミングバードが天へと飛翔する。

なのは

「トリプルコンタクト融合！？」

天へと飛翔したネオス達は銀河の中へと消える。

十代

「3つの力が1つとなった時、はるか大宇宙の彼方から、最強の戦士を呼び覚ます！銀河の渦の中より現れよ！『E・HERO ストーム・ネオス』！！」

十代の場に青い身体に桃色の翼を生やしたネオスが召喚される。

E・HERO ストームネオス 攻撃力3000

十代

「『ストーム・ネオス』の効果発動！1ターンに一度、場の全ての魔法、罠カードを破壊する！！」

ミスターT

「何！？」

ストームネオスが背部の翼から風を起こし、ミスターTの伏せカードを吹き飛ばす。

十代

「これで、俺の邪魔をする物は無くなった！！行け！『ストーム・ネオス』！！」

ストームネオスがミスターTに向かって突進し、両腕の爪でミスターTを攻撃する。

ミスターT

「ぐあああっ！！」

ミスターT LP1200—3000〓0

スバル

「やったあ！！」

リン

「十代さんが勝ったですう！！」

六課メンバーが十代の勝利を祝福する。

ミスターT

「くっ……これほどの力とはな……やはり君は一筋縄では行かないようだ。退散する前に手土産の一つでも残して置くとするか……」

十代

「何!？」

十代が構えるのと同時にミスターTの右腕から黒い霧が無数の槍の形となり、十代達を狙う。

十代

「やらせるか! 『ネオス』を召喚! !」

十代がデュエルディスクにネオスのカードをセットするが、ネオスは現れなかった。

十代

「何!？」

ユベル

「おいどうした!？」

十代

「どうして『ネオス』が……」

十代がデュエルディスクへ視線を落とすとデュエルディスクのライフカウンターの横に何かで斬られた様な後があった。

十代

「この傷……まさか、あの時黒い奴の攻撃を防いだ時に……」

ミスターT

「さらばだ！遊城十代！！」

ミスターTが黒い霧となって消えるのと同時に無数の黒い槍が十代達へと向かっていく。

十代はモンスターが召喚できず、六課メンバーは魔法が使えない。

まさに絶体絶命だった。

しかし、その攻撃は十代達には届かず、突然現れた黒い穴の中へと消えてしまった。

十代

「この穴、さっきヘリへの攻撃を防いだときの……」

十代達が驚いていると、後ろから男の声が響いた。

???

「無事見たいだニャ。十代君」

十代

「その声、まさか……」

十代が後ろを向くと、かつてセブンスターズの一人だったアムナエルの衣装を着た大徳寺先生が立っていた。

十代

「大徳寺先生！！」

大徳寺先生

「ようやくキミに会えたのニャ。十代君」

十代

「でも、先生。その身体は……」

大徳寺先生

「細かい話は後だニャ。今は一度機動六課に戻った方がいいのニャ」

大徳寺先生と合流した十代達はヘリと合流し、一度、六課へと帰還したのだった。

第19話 逆転のコンタクト融合!! (後書き)

次回は模擬戦の話をやろうと思います。

番外編その1 E・HEROVS鉄槌の騎士!

機動六課の訓練場にて、ビルの上に佇む2つの人影があった。

1人はうさぎのぬいぐるみ等の装飾のある赤い服装と帽子、柄の長いハンマーを手にした、スターズ副隊長のヴィータ。

もう1人は別の世界から『ミッドチルダ』へと迷い込み、現在機動六課に協力している遊城十代。

十代も紅いカラーリングが施されたデュエルディスクを構え、ヴィータと対峙していた。

なのは

『2人とも、準備はいい?』

十代とヴィータの間になのはの顔が映し出されたモニターが現れる。

ヴィータ

「あたしはいつでも」

十代

「俺もいいぜ」

2人が返事をする。

ヴィータ

「この前なのはを倒したのがまぐれか実力か、見せてもらうぜ?」

ヴィータが柄の長いハンマー『グラーフアイゼン』を十代に突き付ける。

十代

「ああ。俺も楽しみだったんだ。副隊長のお前がどの位強いのかってのがさ……」

十代のその言葉にヴィータは内心驚いていた。

時空管理局の中でもヴィータは鉄槌の騎士と呼ばれ、他の魔導師からは一目置かれている。

ヴィータ

「（なのはとシグナムと戦って引き分けただけの事はあるってか……）」

なのは

『それじゃあ設定は廃棄都市区画、時間制限なしの勝負、勝敗はK Oか降参するまでね？』

なのはが説明すると、十代達のいる訓練場の整っていたビルは荒廃したビルへと変わった。

ヴィータ

「あたしはそれでいい」

十代

「ああ！何でも来やがれ……！」

なのは

『それじゃあ行くよ！レディー……』

ヴィータはグラーフアイゼンを構え地面を強く踏む。

十代もデュエルディスクから最初の手札となるカードを5枚引き、瞳をユベルと同じ緑とオレンジ色の瞳へと変じさせる。

なのは

『ゴー!!』

合図と共にヴィータが前に出た。

ヴィータ

「であああー……ッ！」

目標を定め、グラーフアイゼンが地面を砕いた。

しかし、十代は既に後方のビルへと移動しており、ヴィータの攻撃は不発に終わった。

ヴィータ

「うまくかわすじゃねえか……」

十代

「へっ！そんなバズーカみたいな攻撃喰らうのはごめんだからな……」

シグナム

「始まったか……」

なのは

「はい……」

フェイト

「早く私もやりたい」

なのはとフェイト、シグナムの3人が2人の模擬戦を訓練場から少し離れた所からモニターで観戦していた。

シグナム

「そう拗ねるなテストロッサ。順番を決めるくじ引きを外したお前が悪い」

フェイト

「……それはそうですけど……」

なのは

「にやはは……」

十代がデュエルディスクからカードをドロースする。

十代

「よっしゃ！今度はこっちから行くぜ！カードを1枚伏せ、『E・HERO スパークマン』を攻撃表示で召喚！」

十代の目の前にスパークマンが現れる。

ヴィータ

「出たな。召喚獣！」

スパークマンを見たヴィータが警戒する。

十代

「さらに装備魔法『ボルテック・スピア』を装備！攻撃力が500ポイントアップするぜ！」

スパークマンが雷を帯びた槍を手に取り、構える。

E・HERO スパークマン 攻撃力1600+500=2100

十代

「行け！『スパークマン』！スパーク・ストレート！」

スパークマンがボルテック・スピアを構え突進し、ヴィータに向けて突きを繰り出す。

ヴィータ

「そんな攻撃！あたしには通用しねえよ！！」

ヴィータがグラーフアイゼンでスパークマンの攻撃を止め、反撃しようとするが……

ヴィータ

「ぐっ!？」

ヴィータが呻き、スパークマンから距離をとる。

ヴィータ

「(ちっ…あの召喚獣の槍、止めたら身体に電流が走りやがった…
…。面倒だな…けど…)」

しかし、ヴィータにはスパークマンの電撃コンボの突破口は見えていた。

ヴィータ

「アイゼン！」

グラーフアイゼン

『Schwalbe fliegen』

ヴィータの前に拳大の鉄球が現れ、それを掴み、空中に放り投げた。

ヴィータ

「いっけえっーーーーー!!!」

振りかぶったグラーフアイゼンで鉄球を弾き飛ばすと、凄まじい速度でスパークマンに向かって飛んでいく。

鉄球を視認したスパークマンは右手から電撃を鉄球に向けて放つが、堅い鉄球はスパークマンの電撃を突き破ってスパークマンに直撃する。

十代

「スパークマン!？」

3度目の鉄球の直撃を受けたスパークマンは爆散する。

十代

「ぐうううう！」

十代 LP8000—1600∥6400

十代

「やるな……。だが、トラップ発動!『ヒーロー・シグナル』！」

訓練場の上空に『H』の文字が浮かび上がる。

ヴィータ

「……!？」

十代

「『E・HERO』が戦闘で破壊された時、手札、デッキからレベル4以下の『E・HERO』を特殊召喚する!俺はデッキから『E・HERO フォレストマン』を守備表示で召喚!」

十代の目の前にフォレストマンが現れ守備体勢をとる。

ヴィータ

「ちっ！」

十代

「今度はこっちから行くぜ!ドロー!『フォレストマン』の効果で

デッキから『融合』のカードを手札に加える！」

ヴィータ

「融合！？召喚獣同士を合体させるアレか……」

十代

「そして『融合』発動！」

十代がデュエルディスクにカードをセットすると、十代の場に青い渦が現れる。

十代

「（俺の今の手札で呼べるのは『フレイム・ウイングマン』……。だが、『フレイム・ウイングマン』を召喚しても、アイツのパワーには多分届かない……。地属性のヒーローを融合させて『ガイア』を呼ぶ事も出来るが、今の状況じゃ……。ここは……。）手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合！」

フェザーマンとバーストレディが青い渦の中に消える。

十代

「来い！『フレイム・ウイングマン』！」

十代の場にフレイム・ウイングマンが現れる。

E・HERO フレイム・ウイングマン

ヴィータ

「出やがったな合体召喚獣！」

十代

「魔法カード『Hーヒートハート』を発動！自分の場のモンスターの攻撃力を500ポイントアップさせる！」

E・HERO フレイム・ウイングマン 攻撃力2100+500
|| 2600

十代

「さらに『フォレストマン』を攻撃表示に変更！」

E・HERO フォレストマン 攻撃力1000

十代

「行け！『フレイム・ウイングマン』！『フレイム・シュート』！」

フレイムウイングマンが竜の形をした右腕から巨大の炎球を発射する。

ヴィータ

「ちっ！」

ヴィータがベルカの魔法陣の形をした魔力の盾を展開させ、炎球を防ぐが、魔法カードで強化されたフレイム・ウイングマンの攻撃は想像以上に強力だったらしく、吹っ飛ばされた。

ヴィータ

「うあっ!?!」

十代

「そして、『フォレストマン』で攻撃!!」

フォレストマンが肩の巨木を前に突きだし突進を開始する。

ヴィータ

「くそっ! アイゼン!」

グラーフアイゼン

『Explosion』

グラーフアイゼンのハンマー部分の片方に鋭いスパイク、反対側にはロケットのような噴射機構のあるハンマー『ラケーテンフォルム』(以後RF)に変わった。

十代

「なっ!」

グラーフアイゼン

『Raketen Form』

ヴィータ

「ラケーテン!」

グラーフアイゼンRFがカートリッジを排莢すると噴射口から推進剤を噴き出し、ヴィータを中心に回転を始める。

ヴィータ

「ハンマアアーーーーッ!!!!」

ハンマー投げの応用で遠心力と加速のついたグラーフアイゼンRF

の推進力に身を任せヴィータが向かってフォレストマンを吹き飛ばす。

十代

「くっそ……返り討ちかよ……」

十代 LP6400—1000≡5400

ヴィータ

「行つくぜえ!!」

ヴィータがグラーフアイゼンRFを構えフレイム・ウイングマンへと攻撃を開始する。

十代

「真っ向勝負か！受けて立つぜ！行け！『フレイム・ウイングマン』!!」

十代が指示を出すと、フレイム・ウイングマンが全身を炎に包み、突進する。

炎を纏ったフレイムウイングマンとグラーフアイゼンRFを振り回して突進したヴィータが激突する。

ヴィータ

「うおおおおっ!!!!!!」

訓練場に巨大な爆発が起こり、爆風が訓練場を包み込む。

爆風が収まると、フレイムウイングマンとヴィータが激突した周り

のビルはボロボロになり、巨大な穴が出来ていた。

ヴィータはその穴に叩き付けられていた。

十代も左腕を押さえ、ビルの屋上に倒れていた。

攻撃を行ったフレイム・ウイングマンは破壊され、既に消滅していた。

十代 LP5400－2100＝3300

ヴィータが叩き付けられた穴から抜け出し、十代の目の前に移動する。

十代

「くそ……。さすがに簡単にはやられてくれないか……」

この戦闘の敗北条件は相手が戦闘不能になるか、降参するのどちらかだ。

現時点では2人ともまだ戦えるし、降参もしていない。

ヴィータ

「当たり前だ。この戦い、負けるつもりはねえよ」

十代

「へっ！そうこなくっちゃな」

十代がヴィータから距離を取る。

十代

「行くぜ！俺のターン！『E・HERO バブルマン』を攻撃表示で召喚！！」

十代の場にバブルマンが現れる。

E・HERO バブルマン 攻撃力800

十代

「『バブルマン』の効果により、カードを2枚ドロ―！そして魔法カード『融合回収』を発動！自分の墓地から『融合』と『フェザーマン』を手札に戻す！そして『融合』を発動！！」

再び青い渦が現れる。

十代

「手札の『クレイマン』、そして場の『バブルマン』を融合！！」

クレイマンとバブルマンが青い渦の中に消える。

十代

「現れる！『E・HERO ガイア』！！」

地面から巨大なガントレットを両腕に装備した黒い鎧のヒーローが現れる。

E・HERO ガイア 攻撃力2200

ヴィータ

「でけえ……！けどあたしだって負ける訳にはいかねーんだ。はや

てに格好悪い所は見せられねえ！行くぞアイゼン！！」

グラーフアイゼン

『G i g a n t F o r m』

カートリッジを二発排莢するとハンマー部分が数倍巨大なハンマー
『ギガントフォーム』（以後GF）に切り替わる。

十代

「すげえ！だが、この勝負俺の勝ちだ！『ガイア』の効果発動！召喚時相手の攻撃力の半分を吸収して、その攻撃力を『ガイア』に加える！！」

ガイアが両腕をビルに叩き付けると、ビルが音を立てて崩れ始める。同時にヴィータの身体から魔力が吸収され、ガイアの身体に宿る。

ヴィータ

「くそ……身体から力が……」

十代

「お前の力を吸収した『ガイア』の攻撃力がアップ！！」

E・HERO ガイア 攻撃力2200+1500=3700

十代

「行けえ！『ガイア』！！『コンチネンタルハンマー』！！！！」

ガイアが両腕をヴィータに向けて振り下ろす。

ヴィータ

「あたしだって負ける訳にはいかねえんだ!! ギガントハンマア
ーーーー!!!!!!」

ガイアの両腕とヴィータのグラーフアイゼンGFが激突する。

互いに一步も引かないぶつかり合いだったが、魔力を奪われたヴィータが徐々に押され始める。

十代

「ここで速攻魔法『融合解除』を発動! 『ガイア』の融合を解除する!」

ガイアが消え、融合素材のクレイマンとバブルマンが現れる。

グラーフアイゼンをぶつける対象が消えたため、ヴィータは肩すかしを食らった様な体勢になる。

ヴィータ

「なっ! てめえ、どういうつもりだ!?!」

十代

「さらに速攻魔法『速攻召喚』を発動! モンスター一体を通常召喚する! 『クレイマン』と『バブルマン』を生け贄に捧げ、『E・HERO エッジマン』を攻撃表示で召喚!」

クレイマンとバブルマンが消え、金色の鎧に身を包んだヒーローが現れる。

E・HERO エッジマン 攻撃力2600

ヴィータ

「なっ!?(こいつ、まだこんな魔力の高い召喚獣を持ってやがるのか……。もう攻撃にも防御にも使える魔力がねえ……。悔しいけど……)」

十代

「行くぜ!エッジマンで……」

なのは

『そこまで!』

十代とヴィータの間になのはが映し出されたモニターが割り込む。

十代

「え!?!」

十代が攻撃宣言を最後までしなかったため、エッジマンの攻撃はストップした。

ヴィータ

「……ふう」

なのはを見たヴィータが小さく嘆息する。

なのは

「そこまで。これ以上続けたら模擬戦通り越して血戦になっちゃうから……」

なのはが呆れた様に言う。

ヴィータ

「……チッ。わかったよ……この勝負はあたしの負けだ」

舌打ちをしたヴィータはグラフアイゼンを待機状態に戻す。

十代

「え？ ああ。お前がいいってんなら……」

十代もデュエルディスクを待機状態に戻す。

なのは

「それじゃ、ヴィータちゃんも十代も一度戻って来て」

十代

「おう！」

ヴィータ

「……ああ」

模擬戦が終わり、2人はなのは達のいる所に戻る道を歩いていた。

ヴィータ

「あたしが負けるなんてな。やっぱお前強えな」

十代

「そんな事ねえよ。負けを覚悟したからな」

ヴィータ

「嘘付け！そんな事思っただろ？」

十代

「本当だって。マジで負けるかと思ったんだぜ？ハンマーでぶっ潰された時、メチャクチャ痛かったし、意識も一瞬吹っ飛んだしな。」

ヴィータ

「フン！ならそう言う事にしといてやるよ」

その直後、戦闘での疲労の所為か、ヴィータが足を滑らせて倒れそうになる。

十代

「危ねえ！」

それを見た十代はヴィータが地面に倒れる前にヴィータを抱きかかえる。

十代

「ふう、危なかったな。やっぱり相当ダメージが入ってたんだな。大丈夫か？」

ヴィータ

「……／／／」

ヴィータの顔は真っ赤だった。

ヴィータ

「……だ」

十代

「だ？」

ヴィータ

「誰の所為だと思ってんだああああ……！！！！！！」

ヴィータの怒鳴り声が訓練場全体に響き渡った。

十代

「まだ耳がキンキンするぜ……」

ヴィータ

「てめえがいつまでも離さねえからだろうが……（それにしても……）」

ヴィータは先程十代に抱きかかえられた事を思い出す。

ヴィータ

「（アイツ……以外と……カッコよかったな……。何だ……この気持ち……）」

ヴィータがその気持ちの正体に気付くのはもう少し先の話である。

番外編その1 E・HEROVS鉄槌の騎士! (後書き)

すげー難しかった……

使えるカードがあり過ぎて思う様に書けなかった……

フラグも何か強引に立てた感じ……

次回はVSフェイトさんです!

番外編その2 E・HEROVS金の閃光（前書き）

一ヶ月も放置してしまった……

これを機に少しずつペースを取り戻したいな……

番外編その2 E・HEROVS金の閃光

「十代、準備はいい？」

訓練場にホログラフの画面に映ったのはが確認を取る。
それを聞いた十代は、

「ああ……もう好きにしてくれ……」

と、半ば諦め気味に答える。

「（つたく……なんでこんな事に……）」

十代は先程の事を思い浮かべた。

……

「疲れたあゝ」

訓練場から戻って来た十代は溜め息を吐き、腰を降ろした。
一息している十代の前にユベルが現れる。

「随分と苦戦していたじゃないか」

「ああ、結構危なかったな……」

ちなみにヴィータは戻って来るなり顔を赤くして隊舎に戻ってしま

った。

「（負けたのが余程悔しかったんだな……）」

と、十代は思っていた。

「いや、それっておかしくないかな？」

「へ？」

ユベルの言っている事が十代には理解できなかった。

「（まったくコイツは……）」

ユベルはただ呆れるだけだった。

「さて、俺も戻って休むか…腹減ったし…」

十代が立ち上がり、隊舎に戻ろうとした時、誰かが十代の腕を掴んだ。

「っ!？」

「十代どこ行くの？次は私とだよ？」

十代の腕を掴んだのはバリアジャケット姿のやる気満々の表情をしたフェイトだった。

「え……いや、でも……」

「どうしたの？早く行こうよ。ね？」

「（十代、逆らったら君の命は無いよ？）」

ユベルが後ろで笑いながら十代に耳打ちする。

「はぁ……」

抵抗をやめておとなしく模擬戦を受ける事にした。

……

訓練所の中央でまだかまだかと開始の合図を待っているフェイト。

「俺に休む時間もくれねえのかよ……」

「でも十代はまだやれるでしょ？」

確かに体力的にはまだやれるが十代はそういう気分ではないのだけれど、ここまで来た以上、十代も逃げるつもりは無かった。

「わかったよ……早く始めようぜ！」

言いながらデュエルディスクをデュエルモードに変形させ、デッキからカードを5枚ドロースする。

「それじゃあいくよー！レディー」

なのはの声を合図に2人が構える。

「ゴーツ!!」

なのはの合図より模擬戦が始まった。

その瞬間、十代はデッキからカードを1枚ドロし、一瞬だけ確認し、すぐにデュエルディスクにセットする。

「行くぜ!魔法カード、融合!」

「いきなりだね」

それを見たフェイトは十代との距離を取り、考えを頭の中でまとめる。

「(この場合、初手からフレイム・ウイングマンが来るかもしれない。でも、私も十代の戦術を全て知ってる訳じゃない。だからここは距離を取って十代の出方を見る!)」

「手札のフェザーマンとワイルドマンを融合!出でよ!E・HEROワイルド・ウイングマン!」

E・HEROワイルド・ウイングマン 攻撃力1900

「フレイム・ウイングマンじゃない!?!」

驚いたのはフェイトだけじゃなかった。

モニターで見ていたなのは、はやて、シグナム、フォワード陣も驚いていた。

「てっきりフレイム・ウイングマンが来るかと……」

「僕も……」

エリオとキャロがそれぞれの感想を述べる。

「まあ、それもありだけど……相手はフォワードチームの隊長さんだからね。十代にも考えがあるんだろうね。それに……」

「それに？」

「十代はまだ自分の持っている力の全てを把握していない。夜な夜な訓練場で能力の確認はしてるようだけどね」

「そういえば、この前、訓練が終わった後に訓練場使わせてくれて頼まれたけど……」

なのはが思い出したように言う。

「それが今回の模擬戦でどう働くか……」

「行けっ！ ワイルド・ウイングマン！ ウイングインパルス！」

ワイルド・ウイングマンが背中の翼から無数の真空刃をフェイトに向けて飛ばす。

「くっ！ バルディッシュ！」

『プラズマランサー』

「ファイアー！」

フェイトも自分の周りに無数の金色の魔力弾を展開させワイルド・ウイングマンの放った真空刃に向けて発射する。
お互いの攻撃が空中で激突し、爆発する。

「くそっ！」

爆発の際に生じた煙から目を守るために右腕で顔を庇うが、そこで十代は自分のミスに気付いた。

「（しまった！これじゃあフェイトがどこに居るかわからねえ！！！）」

舌打ちをしながら急いで煙の中から出るが、背後に気配を感じ、振り向くとフェイトが上空からバルディッシュを振りかぶっていた。

「ハーケンセイバー！！！」

フェイトの掛け声と共に魔法陣から金色の魔力砲が放たれ、ワイルド・ウイングマンに直撃する。

直撃を受けたワイルド・ウイングマンは苦しそうな声をあげ爆散した。

「くっそお！！！」

十代 LP8000－1900〓6100

「やるな……今度はこっちから行くぜ！」

十代がデッキからカードをドロースる。

「カードを1枚伏せ、魔法カード、融合回収！墓地の融合と融合に使用したワイルドマンを手札に戻す！」

「また融合を……」

「そうさ！コイツが俺のデッキのキーカードだからな！行くぜ！魔法カード融合発動！手札のスパークマンとネクロダークマンを融合！来い！E・HEROダーク・ブライトマン！」

十代の隣に黒い稲妻を纏った黒と黄色のツートンカラーのヒーローが現れる。

E・HEROダーク・ブライトマン 攻撃力2000

「さらに、ワイルドマンを攻撃表示で通常召喚！」

ダーク・ブライトマンの隣に背中到大剣を背負ったワイルドなヒーローが現れる。

E・HEROワイルドマン 攻撃力1500

「行け！ワイルドマン！ワイルドスラッシュ！」

ワイルドマンが大剣を構え、フェイトに向かって突進する。

「バルディッシュ！」

『ハーケンフォーム』

バルディッシュが斧形態から鎌形態へと変わる。

「ハッ！」

ワイルドマンの大剣とフェイトのバルディッシュがぶつかり、火花を散らす。

お互い自分の武器を相手に何度もぶつける。

訓練所に互いの武器が激しくぶつかる音が響き渡る。

このまま永遠に終わらないと思われた互いの殺陣だったが、徐々にワイルドマンが押され始めた。

「くそっ！ワイルドマン一度戻れ！」

十代の声を聞いたワイルドマンはフェイトから距離を取り、十代の元へと戻る。

「今度はこっちだ！ダーク・ブライトマンで攻撃！ダークフラッシュユー！！！」

ダーク・ブライトマンがフェイトに向かって突進し、右手から黒い稲妻を発射する。

「くっ！バルディッシュ！」

『ソニックムーブ』

フェイトの姿が消え、ダーク・ブライトマンの攻撃は空振りに終わる。

「くそっ！高速移動《ソニックムーブ》か……っ！」

次の瞬間、ダーク・ブライトマンの背後に瞬間移動したフェイトはバルディッシュでダーク・ブライトマンを斬り裂く。

「くっ！」

十代 LP 6100－2000＝4100

さらにソニックムーブを発動したフェイトはワイルドマンの目の前に現れ、バルディッシュでワイルドマンを斬り裂く。

「ぐあっ！」

斬り裂かれたワイルドマンは十代の至近距離で爆発し、十代はその爆発の直撃を喰らって後方へと吹き飛ばされた。

「はぁ……はぁ……」

肩で息をしながらフェイトは近くのビルに降り立った。
ソニックムーブを使い続け、魔力と体力を大きく消費したのだ。

十代 LP 4100－1500＝2600

「今のは効いたぜ……トラップ発動！ヒーローシグナル！」

立ち上がった十代の目の前に現れたカードから光が照射され、Hの文字が浮かび上がる。

「これって……」

「へへっ！悲鳴を聞けばヒーローはすぐに現れるんだぜ！ヒーローシグナルの効果によりデッキからレベル4以下のE・HEROを特殊召喚できる！来い！E・HEROフェザーマン！」

E・HEROフェザーマン 守備力1000

同時に十代の元に戻って来たダーク・ブライトマンも防御態勢を取るかのように膝を付いていた。

「（今の攻撃で十代のライフポイントを大きく削れた。でも……）」

十代のライフを大きく削り、さらに十代の手札はゼロ。自分の体力と魔力を大きく消費したとはいえ、圧倒的にフェイトの方が有利なのだ。しかし、フェイトは自分の勝利を確信できないでいた。

「どうする十代。諦めて降参する？」

「んなわけあるか！こんなワクワクする戦いは久しぶりだぜ！」

「え……」

十代の輝く様な笑顔にフェイトは驚いてしまう。

圧倒的に不利なこの状況で何故笑えるのか…そして何故圧倒的に有利なこの状況で勝利を確信できないのか。

それは十代が追い詰められた時に発揮する強靱な引きがあるからだった。

「行くぜ！ドロー！（来たぜ！！）」

ドローしたカードを見た十代は笑顔になる。

「（な、なに？何を引いたの？）」

十代の笑みを見たフェイトはとてつもない不安に駆られた。

「行くぜ！魔法カードミラクル・フュージョン！！」

「ミラクル・フュージョン？」

「このカードはフィールドか墓地から融合素材モンスターを除外し、新たなE・HEROを融合召喚できる！！俺は場のフェザーマンとダーク・ブライトマンを融合！」

十代の目の前に光り輝く渦が現れ、フェザーマンとダーク・ブライトマンが渦の中に消える。

「来い！風を操る暴風のヒーロー！E・HEROGreat TORNADO！！」

十代の場に黒いマントに身を包んだ緑色のヒーローが現れる。

E・HEROGreat TORNADO 攻撃力2800

「（魔力が高い召喚獣……。でも、私だって負ける訳には……）っ！？」

フェイトは自分の身体に異変が起こっているのに気付いた。

「魔力が……減ってる！？」

「Great TORNADOは融合召喚した時、相手の攻撃力、守備力を半減させるのさ!」

「そんな……それでも……!!」

魔力を一気に奪われたフェイトは魔法陣を展開し、残る全ての魔力を魔法陣に込める。

「行くぞ! フェイト! これで最後だ!! 行けえ!! Great TORNADO!!」

Great TORNADOが両手から巨大な竜巻を発生させる。

「私だって負けられない! 全力で行くよ! 十代! トライデント……」

フェイトの魔法陣にも残る魔力全てが蓄積されて行く。

「ス……パー……セル!!!!!!」

「スマッシュ……!!!!!!」

訓練場のど真ん中で巨大な爆発が起こった。

「何も見えへん!」

「フェイトちゃん! ?」

観戦していたのはとはやてが声をあげる。

爆発が収まり黒煙の中に立っていたのは……

「はぁ……はぁ……何とか……勝てたぜ……」

十代だった。

「あ……そういや、フェイトは……」

十代が目の前を見ると、フェイトが倒れていた。

「やべー気絶させちまった……」

言いながらフェイトを抱え上げる。

『何とか勝てたみたいだね』

十代の後ろにはいつの間にかユベルが飛んでいた。

「まあ、何とかな……」

『まあ、僕は君が勝つって信じてたけどね』

「へっ！よく言うぜ。取り敢えずフェイトを医務室に運ばないとな
……」

……

「……にしても起きねーなー」

フェイトを医務室に運んでから2時間余りが経過し、日も暮れ始め

ていた。

なのはとフォワードメンバーは訓練に、はやても仕事に戻り、医務室にいたシャル先生も十代に任せると言ってどこかにいった。

さらにユベルも

『面倒だから後は任せるよ』

と言って奥に引っ込んでしまった。

「う…：…ううん…」

目が覚めたのかフェイトはゆっくりと目を開ける。

「あれ…私…：…」

寝ぼけているのか目を擦りながら周りを見渡すフェイト。

「よお…気分はどうだ？」

「…十代？ここは…医務室？」

「そうだ。お前は模擬戦で倒れて、2時間ぐらい寝てたんだよ」

まだ状況がわかっていないフェイトに十代が簡単な説明をする。

「そっか…それで十代はずっとここにいたの？」

「まあな…元々俺の所為だしな」

「そんな事ないよ。模擬戦挑んだのは私なんだし……」

夕焼けの所為かフェイトの顔は赤くなっているようにも見えた。

「それじゃあ、俺行くわ」

十代はそれだけ言うのとドアの方へと歩き出した。

「ああ……えっと……うん……」

……

ベッドの上に座っているフェイトは十代が去ったドアをまだ見つめていた。

「はぁ……」

自然と溜め息が出た。

「ちゃんとお礼言えなかったな……今度ちゃんとお礼しよう……」

この日から数日後の休日にフェイトは十代と共に街に出掛ける事になるのだった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2497t/>

遊戯王GX StrikerS

2011年12月26日16時55分発行